

—国道141号(箕輪バイパス)建設に伴う発掘調査報告書—

横森・横森前遺跡

1999・3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

—国道141号(箕輪バイパス)建設に伴う発掘調査報告書—

横森・横森前遺跡

1999・3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序

本報告書は、国道141号（箕輪バイパス）建設（民家移転地）に先立ち、1996年に発掘調査を実施した山梨県北巨摩郡高根町箕輪字横森前636番地ほかに所在する横森・横森前遺跡について、その成果をまとめたものです。

県の北西部に位置する横森・横森前遺跡は、須玉川右岸の段丘上の南緩傾斜面、標高715メートル付近に位置しております。縄文時代から平安時代の遺跡が帯状に分布が見られ、特に9世紀以降の開発が盛んに行われた地域であります。このような中で発掘調査によって検出された遺構は、中世の地下式土壙22基を中心とした土壙、竪穴遺構、掘立柱建物、溝などであります。地下式土壙はこれまで北巨摩郡下を中心に数多く発見されてきていますが、本地域は当初その存在が知られておらず、調査によって多数の事例が確認されたことに驚きをもっています。また、翌々年に実施された同事業の本線部分からは、性格の異なると考えられる多数の五輪塔（墓）が確認されております。これらの墓地は直線距離で150メートルといった指呼の間に、また時期的にも極めて近いものであり、何らかの要因によって作り分けがあったものと考えられます。

本遺跡を中心として半径1キロメートルの範囲には白倉氏屋敷、清水氏屋敷を始めとする中世から近世にかけての館群が、また名号板碑、陽刻地蔵板碑を始めとしたやはり中世から近世にかけての石物が多数確認され、中世的環境が色濃く醸し出されている地域といえます。このような地域で実施された今回の調査は、この地域の中世社会の復元に大いに貢献するものと考えております。本報告書がより多くの方々によって研究資料としてご利用いただければと念じております。

末筆ながら、ご協力等を賜った関係機関各位、ならびに直接発掘調査、整理作業に当たられた方々に厚くお礼申し上げます。

1999年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 調査の実施と経過	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査の実施	1
第2章 遺跡の環境	2
第1節 位置と地理的環境	2
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	2
第3章 遺構と遺物	6
第1節 地下式土壙	6
第2節 土壙	13
第3節 堅穴状遺構・掘立柱建物跡	19
第4節 溝	20
第5節 その他の遺構と遺物	21
第6節 グリッド出土遺物	24
第4章 各 説	25
第1節 出土遺物と遺構の時期	25
第2節 墓について	27
おわりに	29

挿図目次

第1図 横森・横森前遺跡の位置と周辺遺跡分布図（縄文時代～中世）	3
第2図 横森・横森前遺跡の位置と周辺遺跡分布図（館・板碑等）	4
第3図 近在の板碑	5
第4図 遺跡地形図	5
第5図 遺跡全体図	7
第6図 出土貨銭	18
第7図 遺物分布図（かわらけ・内耳土器等）	22
第8図 遺物分布図（鉄製品・貨銭等）	23

表 目 次

第1表 県内地下式土壙一覧	26
---------------	----

図版目次

図版第1 1号地下式土壙平面・断面図	30	図版第25 40~42・42-2号土壙平面・断面図	54
図版第2 2号地下式土壙平面・断面図	31	図版第26 24・45~49号土壙平面・断面図	55
図版第3 43・44号地下式土壙平面・断面図	32	図版第27 50・51号土壙平面・断面図	56
図版第4 3号地下式土壙平面・断面図	33	図版第28 52~56号土壙平面・断面図	57
図版第5 4号地下式土壙平面・断面図	34	図版第29 57~61号土壙、桑植樹痕（1）	58
図版第6 7号地下式土壙平面・断面図	35	図版第30 62号土壙、桑植樹痕（2）	59
図版第7 8・15号地下式土壙平面・断面図	36	図版第31 1号堅穴状建物跡平面・断面図	60
図版第8 8・15号地下式土壙断面図	37	図版第32 2号堅穴状建物跡平面・断面図	61
図版第9 9号地下式土壙平面・断面図	38	図版第33 3・4号堅穴状建物跡平面・断面図	62
図版第10 10号地下式土壙平面・断面図	39	図版第34 1号掘立柱建物跡平面・断面図	63
図版第11 30号地下式土壙平面・断面図	40	図版第35 1・2号溝平面・断面図	64
図版第12 11号地下式土壙平面・断面図	41	図版第36 3号溝平面・断面図（1）	65
図版第13 12号地下式土壙平面・断面図	42	図版第37 3号溝平面・断面図（2）	66
図版第14 14号地下式土壙平面・断面図	43	図版第38 出土遺物（1）	67
図版第15 14号地下式土壙断面図、 16号地下式土壙平面・断面図	44	図版第39 出土遺物（2）	68
図版第16 17号地下式土壙平面・断面図	45	図版第40 出土遺物（3）	69
図版第17 26・27号地下式土壙平面・断面図	46	図版第41 出土遺物（4）	70
図版第18 28・31~34号地下式土壙平面・断面図	47	図版第42 出土遺物（5）	71
図版第19 28号地下式土壙平面・断面図、 31~33号地下式土壙断面図	48	図版第43 出土遺物（6）	72
図版第20 13号土壙平面・断面図	49	図版第44 出土遺物（7）	73
図版第21 18~20・23・24号土壙平面・断面図	50	図版第45 出土遺物（8）	74
図版第22 20・21・22・25号土壙平面・断面図	51	図版第46 出土遺物（9）	75
図版第23 29号土壙平面・断面図	52	図版第47 遺構（1）	77
図版第24 36・37・38・39号土壙平面・断面図	53	図版第48 遺構（2）	78
		図版第49 遺構（3）	79
		図版第50 遺構（4）及び出土遺物	80

例　　言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡高根町箕輪字横森前636番地他に所在する箕輪・横森前遺跡の発掘調査報告書である。なお、調査時の遺跡名は東田・原屋敷としたが、箕輪・横森前の誤りであり訂正した。
2. 本事業は国道141号（箕輪バイパス）建設（民家移転地）に先立って、山梨県教育委員会が山梨県土木部より委託をうけて実施したものである。
3. 発掘調査および整理調査は山梨県埋蔵文化財センターが担当した。
4. 本書の執筆、編集は調査研究第2課長坂本美夫が担当した。
5. 報告書にかかわる記録図面、出土品、写真などは山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡　　例

1. 図版の縮尺は原則として遺構を1／40、遺物を1／4、特に貨銭は1／1.5としたが、中には大きさにより任意の縮尺としたものもある。

第1章 調査の実施と経過

第1節 調査経過

1 発掘調査事務経過

平成8年9月24日 文化庁に発掘通知を提出する。
平成8年9月24日 調査を開始する。
平成8年12月9日 調査を終了する。
なお、調査終了後に長坂警察署へ発見通知を提出する。

2 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 山梨県埋蔵文化財センター

副主幹文化財主事 坂本美夫

文化財主事 高野玄明

〃 川手昌英

〃 雨宮芳夫

作業従事者 発掘調査 丸茂寿美江、下條厚子、清水きしの、清水よ志み、小林英子、小林武子、中嶋靖子、上条歌子、清水てる子、八巻和子、新海登子、中村ふみ、八巻みはる、下條たつ子、下條しげ子、八巻光子、清水昭子、三井静子

整理作業 猪股順子、今沢美代、土橋園子、村田美由紀、志田幸江、山本有希、北原和江

第2節 調査の実施

1 調査方法と発掘区の設定

本遺跡は、縄文～平安時代そして中世の遺跡として登録されており、現地踏査の際東側の斜面上の畠より縄文土器片などとともに、中世と考えられる土器片を採集することができた。しかし採集された遺物がいずれの時期のものも少量であったため、小規模な遺跡の存在を想定してグリッド方式で部分的な調査を行い、その状況によって必要があれば調査区を隨時拡張する方法をとった。

調査区の設定は、北西隅に位置する桑畠の区画の北側と西側の境を基準として方眼を組み、5mのグリッドを設定し、この北西隅を起点として南に向かってA～G、東に向かって1～10までの記号を付した。

2 調査の経過

調査は排土を調査区内で処理するため、北側の境にそった幅10mほどを畠の区画毎に調査することにした。まず遺物の確認できた東側の斜面上の畠（おおよそA～C 6グリッド以東）より実施して溝、土壙、ピットを確認した。その後台地上の桑畠（A～C 4グリッド以西）、さらにその中間の畠を調査した。桑畠では畠状に植えられた桑の根の跡が、中間の畠においてはピット、土壙などとともに地下式土壙が確認された。そして地下式土壙が周辺に広がっていることが予想されたため、当初設定した北側部分だけでなくその南側にある畠などへの調査が必要となり、結果として全面調査となった。

第2章 遺跡の環境

第1節 位置と地理的環境

1 位置

横森・横森前遺跡の所在する北巨摩郡高根町は、甲府盆地の北西部に位置する。北を八ヶ岳連峰において長野県南佐久郡南牧村、川上村と接する。また、東から南は北巨摩郡須玉町、西は同長坂町・大泉村に接し、おおよそ東西6.7km、南北20.9kmの南北に細長い町域を持つ。町の東側には、八ヶ岳（主峰の赤岳は標高2,899m）に源を発する須玉川が、北から南へ緩やかに流れる。横森・横森前遺跡はこの町域の南端近くにあり、須玉川右岸の段丘上の南に開く緩傾斜面上に位置する。

JR韮崎駅より直線で北北西約14km、中央自動車道須玉インターより北約3.3km、国道141号線箕輪新町の交差点より南々西約580mにある。

2 地理的環境

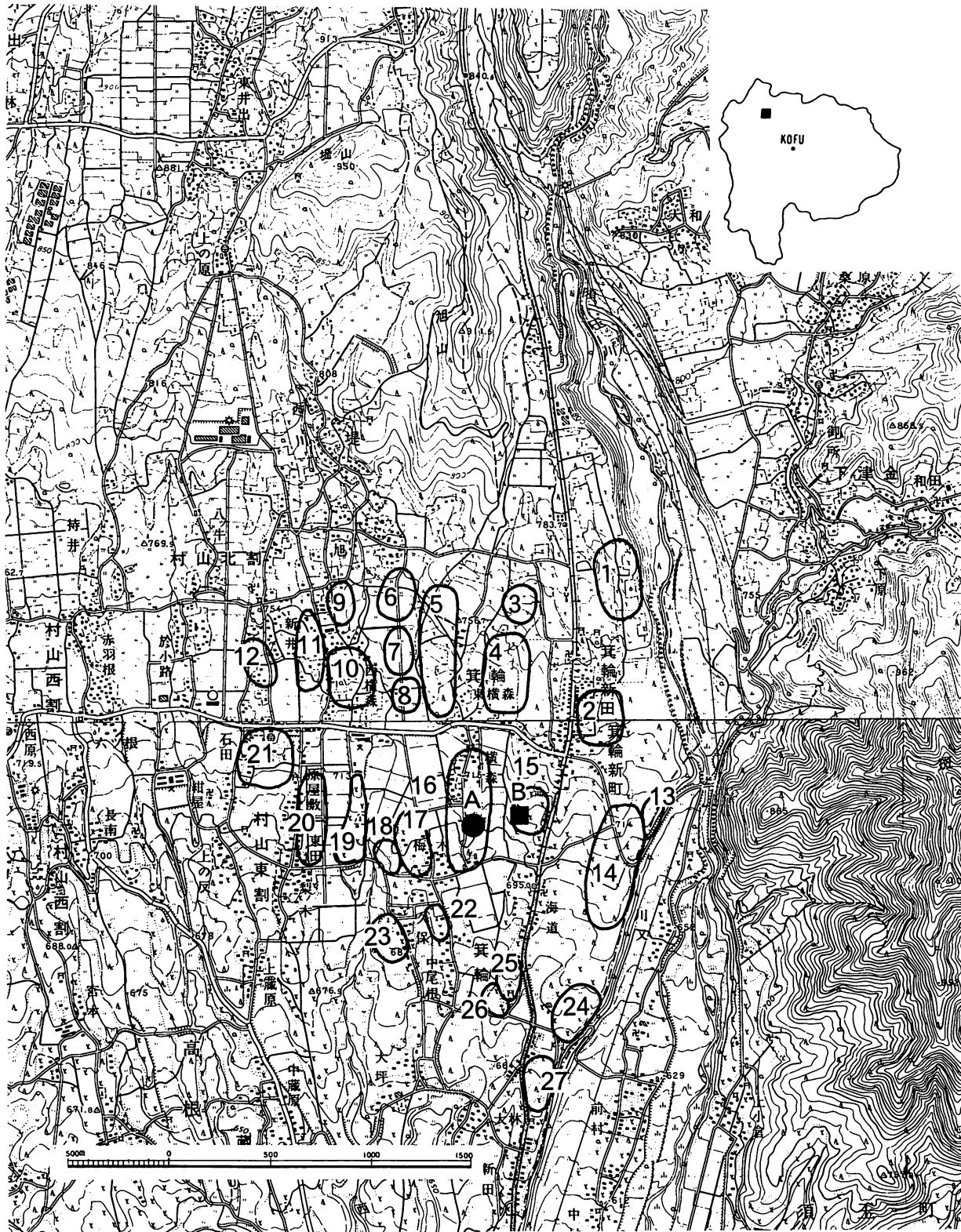
高根町は町域のほとんどを八ヶ岳が造った山麓（東南麓）の裾野においている。この裾野は、南北方向の尾根状の小台地が帶状に幾筋もみられる起伏に富む地域であるが、特に標高800m付近から山間地的様相を一段と強める。横森・横森前遺跡のあたりは東南麓の東端でかつ南端に近いところにあり、緩やかな傾斜面に立地している。また、横森・横森前遺跡は、町の東側を南北に流れる須玉川の段丘上の標高715m付近にあり、段丘下の川面との比高差はおよそ60mほどである。そして遺跡の南側は甲府盆地へと続き、遠く富士山を一望できる景勝の地である。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

横森・横森前遺跡の所在する高根町地域は、旧石器時代より古代に至る間の遺跡が濃密に分布する地域であり、その中でも特に縄文時代の時期の遺跡が濃厚な地域である。また古代の9世紀以降に八ヶ岳東南麓の開発が盛んとなり、その時期の遺跡も顕著に認められる。これらの遺跡は地理的環境のなかで述べたが、尾根状の小台地が南北に帶状にみられるのと呼応しているかのように、帶状に分布していることが特徴とされている。本遺跡の周辺においても圃場整備に伴う町や県によって調査された青木遺跡、青木北遺跡、東久保遺跡、梅の木遺跡、海道前遺跡、大林遺跡などが存在している。このうち前3者は平安時代を主体とする遺跡であり竪穴住居跡などが多数確認された。また、梅の木遺跡、海道前遺跡は縄文時代を主体とする遺跡であり、やはり竪穴住居跡などが確認されている。

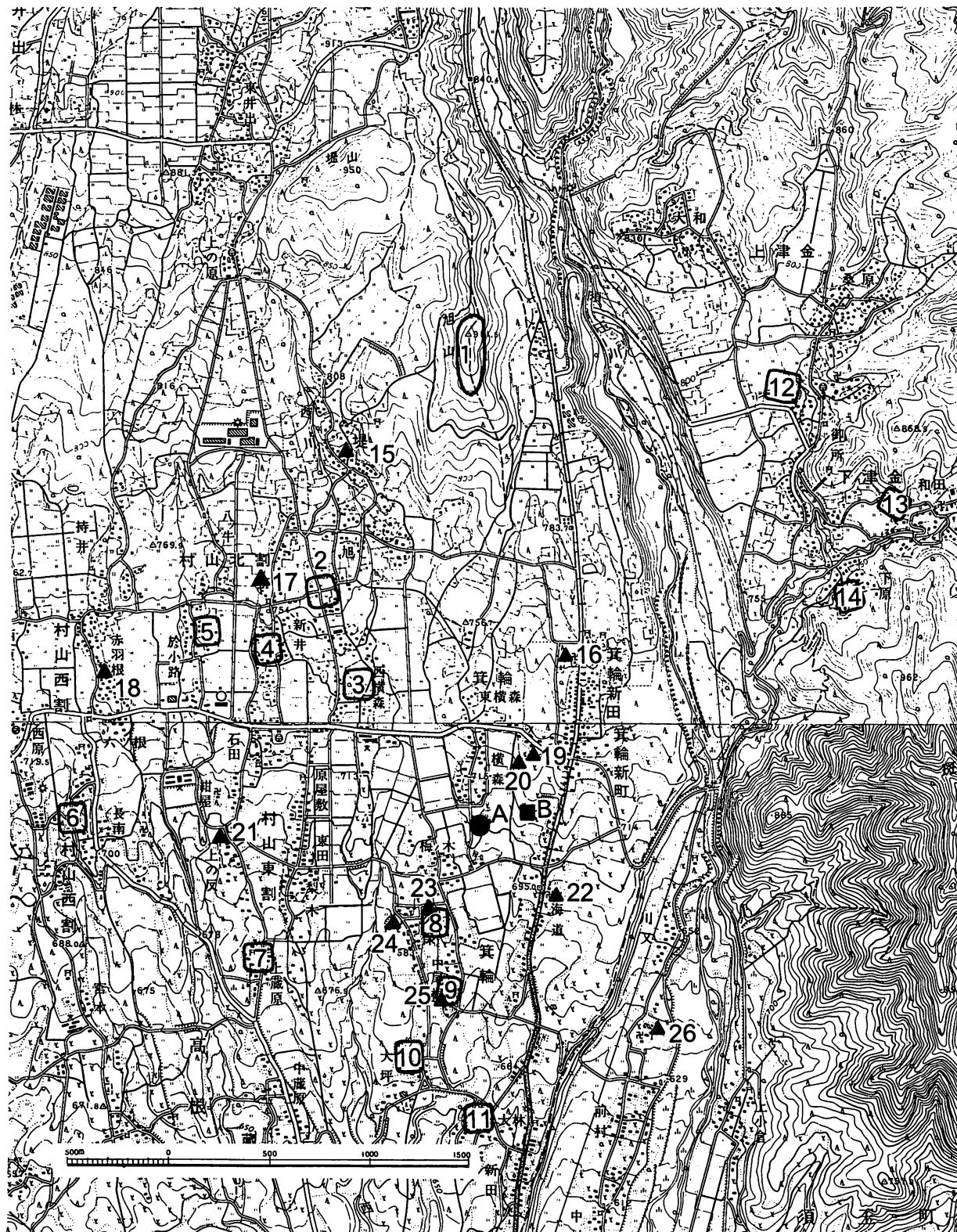
このようにこの地域は、縄文時代から平安時代にかけての遺跡が顕著にみられる地域であるが、さらに本地域の特徴を一層際立せるものとして、時代は下るが中世から近世にかけての時期の遺構や遺物の豊富さがあげられる。本遺跡を中心とした半径500mほどの範囲には古宮屋敷、清水氏屋敷、大渡の狼煙台（以上須玉町）、大林屋敷、大坪塙跡、中尾根屋敷、清水氏屋敷、上藏原の塙跡、小宮山氏屋敷、日向氏屋敷、新井館、西横森塙跡、白倉氏屋敷、旭山砦といった中世から近世のごく初めにかけての館などが多数存在する地域である。

また板碑についても多数確認できる地域もある。箕輪新田大蔵寺所在名号板碑（長禄2年銘=1458）、村山北割赤羽根公民館所在名号板碑、村山東割上の反の辻、箕輪中尾根、同海道養福寺、箕輪新町横森伊勢神社先辻所在の日月板碑、村山北割ハッ牛光村寺、箕輪新町横森墓地、箕輪久保墓地、藏原中蔵原墓地所在陽刻地蔵板碑、海道養福寺、横森墓地所在の六地蔵板碑、箕輪中尾根所在の月待板碑、須玉町穴平遠照寺所在の題目板碑などが知られる。このうち横森墓地、伊勢神社先の辻、海道養福寺、箕輪久保墓地、中尾根所在板碑などは本遺跡に近接する位置にあり、特に前2者は直線で300～400mほどの距離である。板碑ではないが村山東割梅の木には、六地蔵幢（永享9年銘=1437）がみられる。また、本遺跡と直線にして200mほどの東側で、1997年に実施した本事業にかかる本線部分の試掘調査によって、多数の五輪塔を伴った墓地が確認されている。



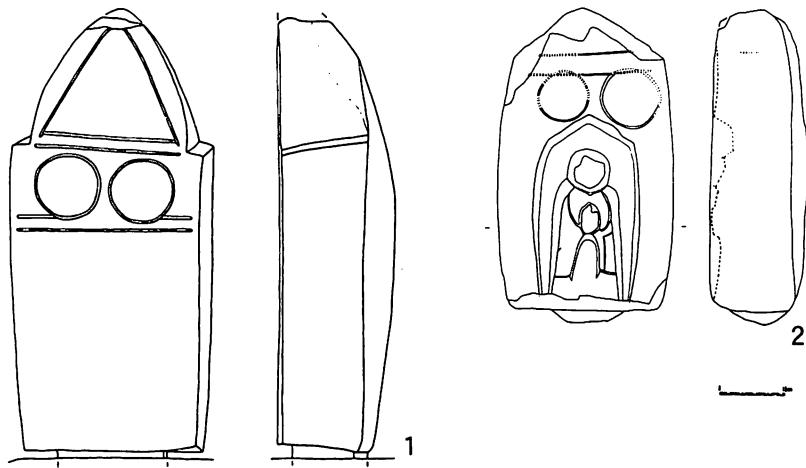
第1図 横森・横森前遺跡の位置と周辺遺跡分布図（縄文時代～中世）

- 1. 道満・細久保遺跡
- 2. 東浦遺跡
- 3. 矢拾遺跡
- 4. 桧久保遺跡
- 5. 社口遺跡
- 6. 東久保遺跡
- 7. 青木北遺跡
- 8. 青木遺跡
- 9. 旭西保遺跡
- 10. 横森遺跡
- 11. 新井B遺跡
- 12. 新井C遺跡
- 13. 川又坂上遺跡
- 14. 下原遺跡
- 15. 横森赤台遺跡(横森東下遺跡B)
- 16. 横森前遺跡(A)
- 17. 堤・堤上遺跡
- 18. 梅ノ木遺跡
- 19. 雲雀沢辺成遺跡
- 20. 東田・原屋敷遺跡
- 21. 石田前遺跡
- 22. 中尾根遺跡
- 23. 堤前遺跡
- 24. 海道前B遺跡
- 25. 海道前C遺跡
- 26. 海道前A遺跡
- 27. 大林上遺跡

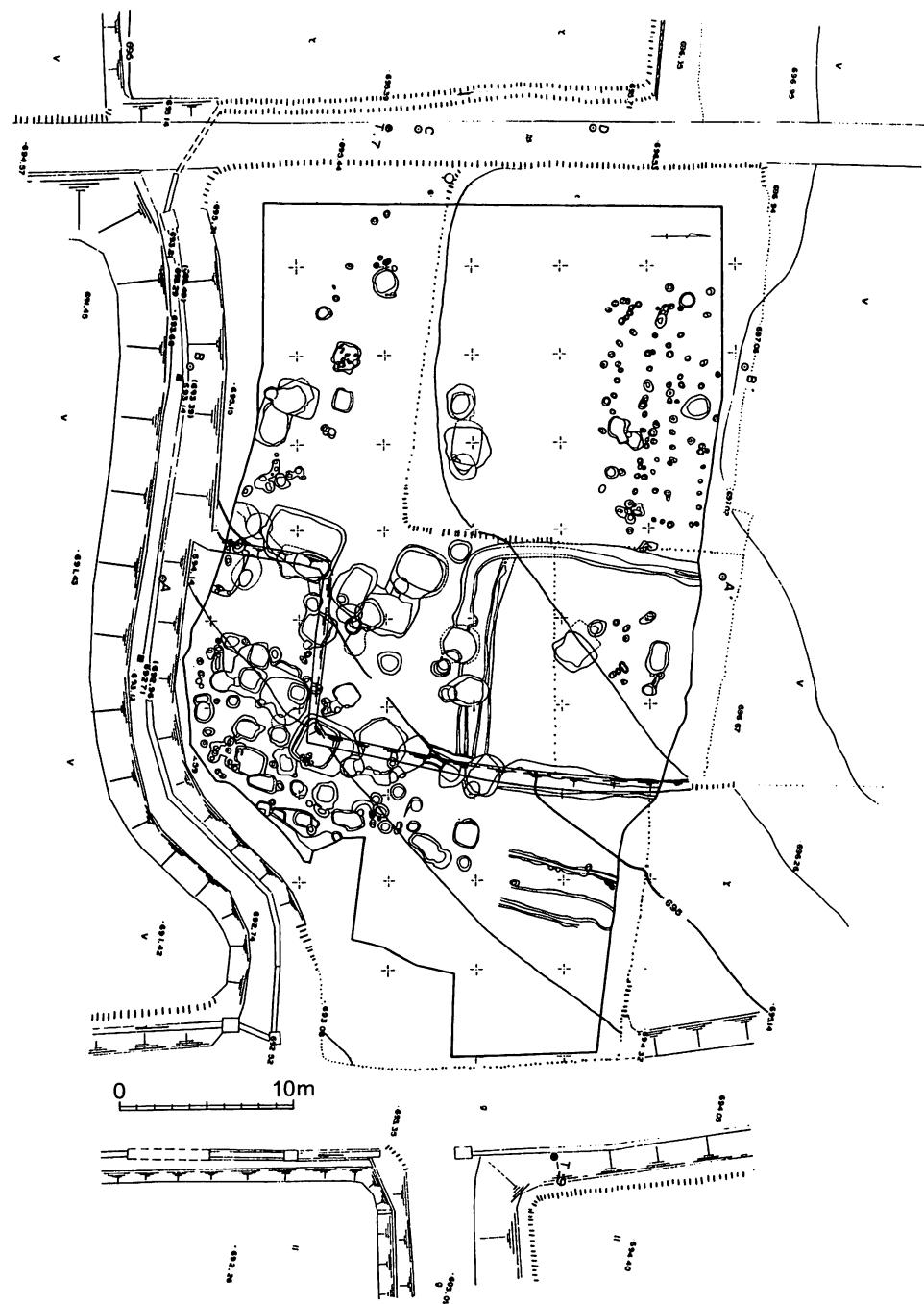


第2図 横森・横森前遺跡の位置と周辺遺跡分布図（館・板碑等）

1. 旭山砦
 2. 白倉氏屋敷
 3. 西横森塙跡（植松氏屋敷）
 4. 新井氏館
 5. 日向氏屋敷
 6. 小宮山氏屋敷
 7. 上藏原塙跡（中村氏屋敷）
 8. 清水氏屋敷
 9. 中尾根屋敷
 10. 大坪塙跡
 11. 大林屋敷（下条氏屋敷）
 12. 古宮屋敷
 13. 清水氏屋敷
 14. 又十郎屋敷
 15. 堤陽刻地蔵板碑ほか
 16. 大藏寺所在名号板碑
 17. 光村寺所在日月・陽刻地蔵板碑
 18. 赤羽公民館所在名号板碑
 19. 横森墓地所在陽刻板碑
 20. 横森伊勢神社前辻所在板碑
 21. 村山東割上の坂の辻所在日月板碑
 22. 養福寺所在日月・六地蔵板碑
 23. 箕輪中尾根所在月待板碑
 24. 箕輪久保墓地所在陽刻地蔵板碑
 25. 箕輪中尾根所在日月板碑
 26. 須玉町穴平遠照寺所在題目板碑
- A. 横森・横森前遺跡（本調査）
B. 横森赤台遺跡（横森東下遺跡B）



第3図 近在の板碑 1. 伊勢神社先所在板碑 2. 横森墓地所在板碑



第4図 遺跡地形図

このほか中世集落遺跡についての発掘調査例がほとんどなく、的確とは言えないまでも平安時代などの遺跡と重複して、横森前遺跡、横森東下遺跡、久保遺跡、矢拾遺跡、横森遺跡、旭西久保遺跡、新井B遺跡、石田前遺跡、東田・原屋敷遺跡、雲雀沢辺成遺跡、堤・堤上遺跡、中屋敷遺跡、海道前A遺跡、東浦遺跡、道満・細久保遺跡などといった中世ないし近世の時期の推定されている遺跡が、本遺跡の周辺地域に色濃く存在している状況が窺える。従って、本遺跡を取り巻く周辺地域には中世から近世にかけての環境が色濃く見られるところと言える。このことは、本遺跡付近が中世から近世にかけて活発な活動を展開していた地域であり、また、板碑などの造立の伴う民間信仰も盛んに行われていた地域であったことを裏づけることができる。

第3章 遺構と遺物

第1節 地下式土壙

第1号地下式土壙（旧13号地下式土壙）（図版第1）

B・C-4・5グリッドに位置する。上部に東西方向の溝が走っている。入口である豊坑は、直径1.16m～0.93m、深さ1.85mほどの規模である。漏斗状にしづむ形態で入り込み、北西側にある地下室につながっている。地下室の入口には礫が3個ほど積み重ねられたような状態で確認された。しかし閉塞のための施設かは明確にならない。地下室の形態は長方形を呈し、2.35m×1.85mほどの大きさである。底は、掘削の凸凹はみられるものの、総じてほぼ平らに作られている。天井は、蒲鉾状に作られている。入口より奥に向かってやや高さを増す作りで、入口で0.93m、中央あたりで1.15mを測る。掘削の工具痕が壁や天井に顕著に認められる。壁回りでは、裾30cmほどの所を3段にわたり縦方向に掘削し、それ以上はやや斜め方向の掘削、天井部分では粗い斜めの掘削がおこなわれている。

遺物は、全くみられなかった。

第2号地下式土壙（図版第2）

D・E-4・5グリッドに位置する。5・6号豊穴状建物跡の下に作られたものである。入口である豊坑は、直径80cm、深さ1.50mほどの規模である。豊坑は、足掛け状の中段をもち漏斗状にしづむ形態で入り込み、北側にある地下室につながる。豊坑の底は、地下室に向かって徐々に低くなっている。地下室の平面形態は方形に近いもので、東西1.5m、南北1.1mほどの大きさである。底は、多少の凸凹はみられるものの総じてほぼ平らに造られているが、豊坑の底に引き続き、奥に向かって緩やかに低まっている。天井は、蒲鉾状に作られている。地下室の高さは、1.05mほどである。掘削の工具痕が壁、天井に見られる。奥壁では縦方向、両脇の壁では横方向、壁から天井に移行する間では斜め方向の丁寧な掘削痕が認められる。

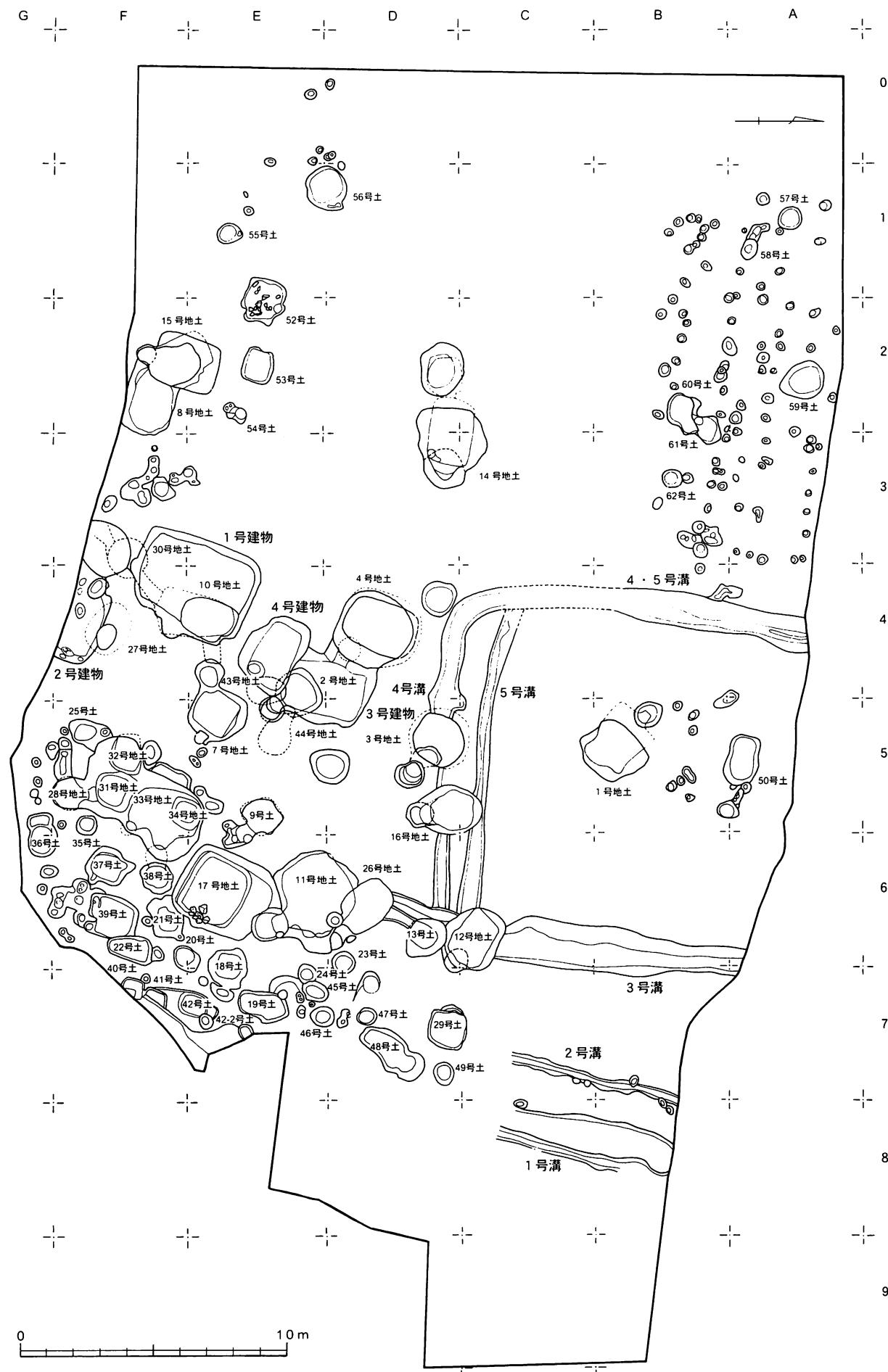
遺物は、全くみられなかった。

本豊坑の両脇に、本土坑の入口を共用する副室とでも言うべき地下式土壙がある。一連のものとして捕らえられるが、ここでは独立して記述することとして、東側に位置するものを44号、西側に位置するものを43号とした。

第43号地下式土坑（図版第3）

E-4・5グリッドに位置する。2号地下式土壙の豊坑西脇に作られたものである。従って、入口は2号地下式土壙の豊坑からとなる。2号地下式土壙の底の一部をわずかに掘り込んで入口状の施設を作り、これに続いて円形状の平面形態をとる地下室に続くといった形態のものである。地下室の径は1.3m、高さ1m程の規模で、天井は蒲鉾状を呈する。奥壁に掘削した工具痕がみとめられた。

遺物は、全く見られなかった。



第5図 遺跡全体図

第44号地下式土壙（図版第3）

E-5グリッドに位置する。2号地下式土壙の豊坑東脇に作られたものである。43号地下式土壙と同様に、入口は2号地下式土壙の豊坑からとなる。2号地下式土壙の底の一部をわずかに掘り込んで入口状の部分を作り、これに続いて方形状の平面形態をとる地下室に続くといった形態のものである。地下室は一辺1.2m程の規模で、天井は蒲鉾状を呈していた。

遺物は、全くみられなかった。

第3号地下式土壙（図版第4）

C・D-5グリッドに位置する。入口である豊坑は、径1.16×1.05m、深さ1.45mほどの規模で、中段をもち漏斗状にしづむ形態で入り込み、西側にある地下室につながる。地下室の平面形態は、やや不整の方形を呈する東西1.9～2m前後、南北2.35mほどの大きさである。底は、多少の凸凹もみられるが、総じてほぼ平らに作られている。天井は蒲鉾状に作られている。さらに入口から奥に向かってやや高さを増す作りで、入口で1.3m、奥壁あたりで1.4mほどを測る。壁と天井には、ところどころに掘削した工具痕が残っていた。

地下室の最奥部の底から壁にかけて、斜めに黒褐色土の詰まっているのが確認され、ここよりさらに下方に向かって副室とでもいえる小規模の地下室の掘られていることが推定できた。しかし、危険防止のため調査は実施しなかった。

遺物は、全くみられなかった。

第4号地下式土壙（図版第5）

D-4グリッドに位置する。南東側にある第4号豊穴遺構と重複する。豊坑は確認できなかったが、第4号豊穴遺構の西壁あたりに入口である豊坑の存在したであろう形状が断面から捕らえられる。あわせて豊坑が漏斗状にしづむ形態で入り込み、北西側にある地下室につながっていることを確認できる。地下室の形態は、長方形を呈する2.83m×1.86mほどの大きさである。底は多少の凸凹もみられるが、総じて平らに作られている。天井は蒲鉾状につくられている。

遺物は、全くみられない。

第5号地下式土壙 欠番。（第3号豊穴状建物跡とする）

第6号地下式土壙 欠番。（第4号豊穴状建物跡とする）

第7号地下式土壙（図版第6・38）

E-4・5グリッドに位置する。南西隅で第10号地下式土壙の豊坑と重複するが、新旧関係は不明である。本地下式土壙は、土壙の可能性もあるが、相対的に判断して地下式土壙とした。入口は南東壁の中央あたりに、豊坑の下端にみられるような斜めに落ち込む直径50cmほどの円形状の窪みがみられるので、これを入口としてとらえた。平面形態は、方形を呈するものである。2.2×1.75m、高さ90cmを測る。壁は、4面とも斜めに立ち上がるようになされている。立ち上がった壁で、天井に移行する変換点と考えられる位置は明確にみられなかった。恐らく蒲鉾状の天井になるものと考えられ、高さは90cm前後であろう。

土壙の中央やや北東寄りの底に接して、僅かであるが人骨を確認した。

遺物は、覆土中より内耳土器（図版第38-1～5）、かわらけ（同6～7）、陶器片（同8）が出土した。このうち3の内耳土器には、底部に近いところに補修孔かとみられる小穴が穿たれている。また、7のかわらけの底部にタール状の付着物がみられる。

第8号地下式土壙（図版第7・8）

F-2グリッドに位置する。15号地下式土壙と北西部の隅で重複している。15号地下式土壙の地下室上部に底

が位置し、切り合って空洞部を作っていた。新旧関係は明確にならなかった。なお、天井部分は完全に陥没していた。入口の豊坑の位置は、平面では確認できなかった。西側で重複する15号地下式土壙側に存在した可能性もあるが、本地下室の南側に豊坑ではないかと考えられる地下室に斜めに落ち込む断面形状の箇所がみられるので、ここを豊坑とすることもできる。豊坑の先に、楕円形の 2.46×1.66 m、高さ90cmほどの地下室がつく。ただし豊坑の位置によって地下室の形態が違ってくる。すなわち西側であれば縦方向に長い地下室となり、南側とすれば横方向に長い楕円形の地下室となる。遺跡全体では、90%以上が縦長の地下室となっていることを考えれば可能性もある。しかし本豊坑と15号地下式土壙の地下室との空間的位置関係からすれば、本豊坑が15号地下式土壙の空間部に掘削される位置となり、豊坑が西側に位置することはほとんどあり得ないものと考えられる。これから豊坑は、南側に位置するものと考えられるのである。底は壁に向かって徐々に高くなるように作られている。天井は蒲鉾状を呈するものであろう。地下室の壁は全体に丁寧な削りで仕上げられており、中段には縦方向の工具痕が確認できた。

遺物は、全くみられない。

第15号地下式土壙（図版第7・8）

E・F-2グリッドに位置する。東側で地下室の天井部分が、第8号地下式土壙の底と重複し、空洞部を作っていた。新旧関係は確認できなかった。入口の豊坑は、直径60cm、深さ2mほどの規模である。豊坑はまずほぼ垂直に穿たれ、1.4mあたりに中段の足掛けの段がみられる以降やや斜めに入り込み、北側にある地下室につながっている。地下室の平面形態はやや矩形の縦方向の長方形で、 2.45×1.95 m、高さ1.4mほどの大きさである。底は多少の凸凹がみられ、壁に向かって高くなるように作られている。天井は、蒲鉾状に作られている。掘削の工具痕が、壁、天井にみられる。壁回りは、基本的には縦方向、壁と天井との際は斜め方向の掘削痕がところどころに確認された。

遺物は、全くみられなかった。

第9号地下式土壙（図版第9）

E-5・6グリッドに位置する。入口である豊坑は南東部にあるが、上部を削平されあるいは小穴が掘られたりなどして形態を確認できない。恐らく直径50cm前後ではなかったかと考えられる。しかし豊坑の斜めに地下室につながる部分が、長さ約70cmほどに渡って確認できる。地下室は豊坑の北西側につながっていて、平面形態は楕円形を呈している。長軸1.75m、短軸1.41mほどを測る。底は、ほぼ平らであるが奥に向かい少しづつ高くなる。壁は湾曲した造りで、天井への変換点も確認できた。天井は蒲鉾状に造られ、高さは80cm前後と考えられる。

遺物は、全くみられない。

第10号地下式土壙（図版第10）

E・F-4グリッドに位置する。1号建物跡の下に造られたものである。また入口である豊坑の東側部分で第7号地下式土壙と重複する。豊坑は、直径1.1m、深さ1.05mほどの規模である。ほぼ垂直に入り込み、西側にみられる短い地下道のような通路を滑り込むようにして豊坑の底から約80cm下に造られている地下室につながっている。地下室は横長の長方形で、 2.95×1.6 mほどを測る。なお、入口の豊坑は地下室の北側の端に近い位置に造られている。底は、東西方向がほぼ平らなのに対して、南北方向では北側から南側に向かって20cmほど低くなるような傾斜をしている。天井は蒲鉾状に造られている。天井は1.4m程の高さをもつものと考えられるが、南北方向では入口から2.5mほどのあたりから、南壁に向かって45度ほどの角度で下がっている。この部分が、副室と考えられる第30号地下式土壙の入口になっている。

遺物は、全くみられない。

第30号地下式土壙（図版第11）

F - 3・4 グリッドに位置する。第10号地下式土壙の奥壁から入るようになっており、第10号地下式土壙の副室といえるものである。第10号地下式土壙の南側にある奥壁から、幅40～50cm、長さ65cmほどの狭い通路を通り、地下室へと通じている。地下室の平面形態はほぼ円形で、直径1.3mほどの大きさである。底は多少の凸凹はあるものの、おおよそ平らに造られている。天井は、蒲鉾状に造られている。天井の高さは、1m前後と低い造りと考えられる。

遺物は、全くみられなかった。

第11号地下式土壙（図版第12・38）

D・E - 6 グリッドに位置する。壁の北隅が、第26号地下式土壙の南壁と重複する。入口である豊坑は、直径95cm前後である。豊坑の深さは現状で85cmほどが確認され、豊坑の北西側で地下室につながる。この豊坑の位置は地下室の中央でなく、すこし北側に寄った位置に造られている。地下室は、ほぼ長方形を呈するもので2.4×2.7mほどの大きさである。底は、中央部でわずかにレンズ状に窪んでいる。なお、東壁の中央付近にみられる浅い土壙は、本地下式土壙以降のものと考えられる。天井は、蒲鉾状に造られたものである。天井までの高さは、1.5m前後あったものと考えられる。

遺物は、覆土中から内耳土器（図版第38-9～11）、かわらけ（同12～14）、銭（第6図1～3）が確認されている。9の内耳土器は、三分の一ほどの残りのもので、直径33cm、高さ21cmほどの大きさである。外面に煤の付着が認められる。14のかわらけは、ほぼ完全な形で確認されたもので、口径7.5cmほどの小型品である。13のかわらけは細片であるが、大きさは口径15cmほどである。銭は4枚確認されているが、銭種の確認されたのは北宋銭の元豊通宝1枚、元祐通宝1枚、開元通宝と考えられるもの1枚である。

第12号地下式土壙（図版第13・38）

C・D - 6・7 グリッドに位置する。第1号土壙と一部が重複し、上部には本地下式土壙以降と考えられる溝が南北と東西の両方向に走っている。入口である豊坑は直径90cm、深さ60cm（現状）ほどの規模である。豊坑は漏斗状にしほむ形態で入り込み、北西側にある地下室につながる。なお、豊坑のしほむ形態が他に比べ緩やかであることから、入口は垂直に掘られたものではなく、概して斜めに掘り込まれた形態と考えられる。地下室の平面形態は縦長の長方形で、2.08×1.4m、高さ90cm（現状）である。底は、多少の凸凹は認められるものの、総じて平らに作られている。天井は、調査の危険を避けて調査前に削平したが、概ね1.3mほどで、かつ、蒲鉾状を呈していたと想定できる。

遺物は、覆土中から内耳土器（図版第38-15）、かわらけ（同16）が出土した。内耳土器は、四分の一程度の残りであるが、直径30cm、深さ16.5cmほどのものである。また、外面には煤の付着が確認できる。

第14号地下式土壙（図版第14・15・38・46）

C・D - 2・3 グリッドに位置する。入口である豊坑は直径1.5mほどで、深さ2.1mほどの規模である。豊坑は漏斗状にしほむ形態で入り込み、北西側にある地下室につながっている。地下室は、主室それに奥に副室をもつ2連式の形態と考えられるものである。豊坑に接してまず主室である2.5×1.75m、高さ1.40mほどの長方形の地下室がある。主室の天井は、蒲鉾状を呈している。底は、掘削の凸凹はみられるものの、総じて平らに作られている。壁は丁寧な削りであるが、上部に水平、中央あたりに斜めの工具痕がみられる。天井の一部にも規則正しい工具痕のみられる部分もあった。この主室の奥壁の入って左寄りに、主室の床より10cmほど上がって幅1m、高さ0.90mほどの副室の入口が作られている。副室の形態は不整形の方形を呈する1.35×1.3mほどの大きさで、天井は主室同様に蒲鉾状である。床は入口から奥に向かって傾斜をもって立ち上がる。なお、副室の上部から豊坑が掘られ副室に達している。これは径が2mと大きく、また、下部が袋状を呈していることは、副室が掘られ

た後に豊坑が掘り抜いてできた形態と考えられることから、副室上部の豊坑は後世に掘られたものと考えておきたい。

遺物は、覆土中からかわらけ（図版第38-18）の小破片、それに石製鉢（図版第46-1）、石臼（同2）が出土した。

第16号地下式土壙（図版第15・39）

C・D-5・6グリッドに位置する。上部には、本地下式土壙以降と考えられる西から東に走る2本の溝がみられる。入口である豊坑は、直径90cm、深さ90cm（現状）ほどの規模である。豊坑は、広い中段をもち漏斗状にしづむ形態で入り込み、北側にある地下室につながる。地下室の平面形態は、縦方向に長い不整形の橿円形をとり、1.7×1.75m、深さ90cm（現状）ほどの大きさである。なお、地下室には、天井のローム層が落ち込んでいた。底はほぼ平らに作られていが、中央あたりに小さな窪みがみられる。天井は、高さ1.3m前後の高さがあったものと考えられる。

遺物は、覆土中の上部から磁器の茶碗（図版第39-17）が出土しているが、地下式土壙に伴うものではなく、本地下式土壙の上にみられる溝にともなうものであろう。

第17号地下式土壙（図版第16・38）

E・F-6グリッドに位置する。北東部分で、第11号地下式土壙と重複する。入口は明確にできなかつたが、東壁の中央からやや南側に寄ったところに、外側に突出し、豊坑状の傾斜をもつ所がみられるので、ここが入口部と考えられる。この入口部は両脇に立石し、壁側に石積みをおこない、内側には階段の踊り場のようにみられる偏平な石を据え付けている。恐らく豊坑の施設であろう。この豊坑を入り、西側にある地下室につながる。地下室の平面形は、横方向に長い長方形を呈する東西2.95×3.5mほどの大きさである。底は化粧であろうか、南側4分の3ほどが縦長の長方形の形に一段低く（10cm前後）掘り込まれているのが確認できる。あるいは拡張した結果、段差をもつようになった可能性も残るがどちらとも断定できない。地下室の高さについては天井が崩れており、また天井に移行する部分が明確にできなかつた。しかし、底から1.3m付近で壁が内側に向かうような状況がみされることから、1.4m前後あったものと考えられる。

遺物は、覆土中から内耳土器（図版第38-19）、かわらけ（同20）、鉄製品（図版第43-1～4）が出土した。このうち内耳土器は、わずかな小片である。かわらけは、およそ半分以上残るもので、口径12.9cmほどの大きさである。また、口唇部の外面において、その一部を削りとった痕跡が確認できる。

第26号地下式土壙（図版第17・39）

D-6グリッドに位置する。第11号地下式土壙と、南壁の一部が重複する。入口である豊坑は直径50cm、深さ1.1mほどの規模である。豊坑は、中程に足掛け状の中段をもち、ほぼ垂直に入り込む形態と考えられる。豊坑から北西側にある地下室につながるが、その境は10cmほどの仕切り状に高くなっている。地下室の平面形態は縦長の長方形で、1.55×2.15mほどの大きさである。底はほぼ平らに造られているが、入口に向かって多少低くなっている。なお、地下室に入った右側の底には大きな石が、そのまま残されている。天井は蒲鉾状に造られたものと考えられ、奥壁にみられる天井に移る変換点の状況から、中央付近で1.3mほどと考えられる。

遺物は、覆土中から内耳土器（図版第39-1～2）、かわらけ（同13）、銭（第6図4）が出土した。内耳土器は小片であり、第11号地下式土壙の覆土中の出土例と同一固体と考えられる。かわらけは、口径12.6cmほどである。銭は、北宋銭の元豐通宝（篆書）1枚である。

第27号地下式土壙（図版第17・45）

F-4グリッドに位置する。第2号建物跡の北壁に接する様に作られていた。最初70cm程の穴の中に、穴の入

口を塞ぐような大きな石が入っていたものを、危険を避けるため上部の土を掘削し掘下げたところ、ほぼ直下に地下室が確認されたものである。これからすれば入口の豊坑は、地下室のほぼ中央当たりに穿たれていたものと考えられる。豊坑に接して地下室が作られている形態ではなく、豊坑の直下が地下室となる地下式土壙と考えられるものである。すなわち豊坑は深さ50cm前後（現状）で、直下にある袋状地下室に入り込むラスコ状の形態といえる。地下室は直径1.55m程の不整円形で、高さは1m以上と考えられる。底は、壁に向かって少しずつ高くなっている。天井は、蒲鉾状と考えられる。地下室の南西側壁が多少直線状に仕上げられており、そこに半月状の刃先をもつ工具の掘削痕が多数確認された。

遺物は、覆土中より安山岩製の石臼（図版第45-1）がほぼ完全な形で出土した。上臼であり、側縁がほぼ垂直に造られ、直径29.4cm、厚さ11.4cmほどを測る。上面の上縁幅は下部で5cm、上部で2cm、高さ1.7cmほどで、この間はほぼ平らに造られている。ほぼ中心に、直径5cmほどの木芯孔が穿たれている。下面是レンズ状に窪み（2.5cm）、主溝によって区画されているような部分もみられる。これからすると5区画ほどを考えられるが、やや不規則な部分もみられ明確にならない。主溝、副溝の形態はほぼ同じで、幅6mm、深さ2mm前後のV字状を呈する。しかしそれぞれの間隔は均一でなく、広狭がみられる。側縁に円形に近い直径5cm、深さ4.5cmほどの挽手孔が穿たれている。

第28号地下式土壙（図版第18・19・39）

F・G-5グリッドに位置する。入口の豊坑部において、第31号地下式土壙の地下室の南壁と重複するため、豊坑が明確に存在したのか否か不明である。しかし、地下室の入口部分とみられる位置において、豊坑の底と考えられる斜めに上がる形状が確認できた。このため本地下式土壙は、第31号地下式土壙の副室ではなく、単独に造られたものととらえておきたい。それから推定した豊坑の規模は、直径70cmほどと考えられるのである。豊坑の南側に、短い地下道のような通路を経て地下室がつながる。地下室の平面形は、横長の長方形を呈する1.34×1mほどの大きさである。底は、僅かであるが中央部でレンズ状に窪んでいる。天井は、蒲鉾状に造られ、高さ1m前後を測るものと考えられる。

遺物は、覆土中より陶器の鉢（図版第39-4）片が出土した。小片で、内外面ともにうぐいす色の釉薬を施したもので、直径21cmほどの大きさである。

第31号地下式土壙（図版第18・19・43）

F-5グリッドに位置する。本地下式土壙の南壁が、第28号地下式土壙の豊坑部と重複したものと考えられる。また、第32号地下式土壙とも奥壁で重複するが、第32号地下式土壙の豊坑が確認できず底も本地下式土壙と同一面にあることから第32号地下式土壙は本地下式土壙の副室と考えておきたい。入口の豊坑は不明であるが、第32号地下式土壙との位置関係からすれば東側にあったものと考えられる。地下室の平面形は矩形で、東西1.45m、南北1.4mほどの大きさである。底は中央あたりで少し窪み、第32号地下式土壙と接続するあたりから斜めに立ち上がり、壁に移行する。天井は蒲鉾状で、1m前後の高さがあったものと考えられる。

遺物は、底面のほぼ中央あたりで鐵鎌（図版第43-6）が確認された。

第32号地下式土壙（図版第18・19）

F-5グリッドに位置する。第31号地下式土壙と重複し、位置関係から本土壙を副室と考えておきたい。ただし大きさは第31号地下式土壙と比べても遜色はない。入口は第31号地下式土壙の奥壁にあり、底の高さからすれば第31号地下式土壙より一段高く造られている。地下室の平面形態は、縦に長い橢円形を呈する。長さ1.32m、幅1m程である。天井は蒲鉾状を呈するものと考えられ、高さは85cm前後ではないかと思われる。

遺物は、全くみられない。

第33号地下式土壙（図版第18・19）

F－5グリッドに位置する。第34号地下式土壙と北西隅で重複するが、新旧関係は分からぬ。また、南側で第31号地下式土壙と重複するものと考えられるが、やはり新旧関係は分からぬ。入口の豊坑の位置は、地下室の平面形態などから東側に位置したものと考えられる。豊坑に続いて西側に地下室がある。地下室の形態は、横長の長方形で東西1.9m、南北2.1mほどの大きさである。底は、ほぼ平らである。なお、底は第31号地下式土壙との間に土手がみられ、それを区別している。天井は、蒲鉾状に造られたものと考えるが、高さについては1m前後でなかつたかと考えられる。なお、入口である豊坑の直下で、地下室と反対側に直径80cm、奥行き80cmほどの副室と考えられる部屋がある。また、南東隅あたりにも直径60cm、奥行き40cmほどの副室と考えられる部屋がある。

遺物は、副室も含め全くみられない。

第34号地下式土壙（図版第18・39）

E・F－5グリッドに位置する。第33号地下式土壙の北西隅にあり重複するが、新旧関係は分からぬ。入口の豊坑もどこなのか不明であるが、直上に造られたものか、あるいは第33号地下式土壙と共有していたもののいずれかと考えられる。共有した場合は、第33号地下式土壙の副室となろう。地下室の平面形態は方形ないし円形であり、底で東西、南北とも85cm前後の大きさである。壁は湾曲しており、天井の高さは1.3m以上と考えられる。底は、第33号地下式土壙より少し低い位置にあり、ほぼ平らに造られている。

遺物は、覆土中より瓦器の摺鉢（図版第39－5）片が出土した。底部付近の小片であるが、外面に指頭痕と思われる浅い窪みが、また内面に6本前後を一単位とした摺目が2単位確認できる。

第2節 土壙

第13号土壙（図版第20）

D－6グリッドに位置する。北側部分が第12号地下式土壙の南側部分に接するような位置にある。なお両者の接する辺りが後世の溝の流路の中にはいっており、攪乱を受けているため明確な関係は分からぬが、いずれもの本体を壊しておらず厳密な意味での切り合い関係はないものといえる。平面形は東側がやや飛び出しているが、不整な円形を呈するものといえる。規模は長径1.75m、短径1.49m、深さ1.45mほどを測る。壁は斜めに立ち上がるが、中には袋状に掘り込まれている部分もみられる。底は周辺で緩やかに上がっているため、全体としてやや湾曲している。

遺物は、全くみられない。

第18号土壙（図版第21）

E－6・7グリッドに位置する。平面形態は方形を呈するものである。壁は、斜めに立ち上がる。底は北側に向かって低くなる。底で95×95cm、高さ60cmほどである。

遺物は、全くみられない。

第18－2号土壙（図版第21）

E－7グリッドに位置する。第18号土壙の東側に接して造られている長方形に近い深い土壙である。東西55cm、南北1m、深さ20cmほどを測る。

遺物は、全くみられない。

第19号土壙（図版第21）

E－7グリッドに位置する。平面形態は、長方形を呈する。壁は、緩やかに立ち上がる。底は、ほぼ平らであ

る。東西1m、南北2m、深さ20cmほどを測る。

遺物は、全くみられない。

第23号土壙（図版第21）

D-6・7グリッドに位置する。円形で直径90cm前後、深さ30cmほどを測る。壁は、斜めに立ち上がる。

遺物は、全くみられない。

第24号土壙（図版第21）

E-7グリッドに位置する。円形で直径65cm前後、深さ60cmほどを測る。壁は垂直に近い。

遺物は、全くみられない。

第20号土壙（図版第21・39）

E・F-5・6グリッドのほぼ中央に位置する。平面形は楕円形に近い形を呈している。長径0.99m、短径0.80m、深さ30cmほどを測る。壁は北側で斜めに立ち上がるが、その他ではほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は、陶器片（図版第39-6）がみられる。

第21号土壙（図版第22）

F-6グリッドに位置する。平面形は長方形に近い形態を呈する。長さ1.5m、幅1.1m、深さ0.5mほどを測る。壁は斜めに立ち上がり、床はほぼ平坦に作られている。土壙の西寄りに30cm四方ほどの石が入っている。なお南壁に接した外側に直径40cm、深さ30cmほどのピットがみられるが、これは東側にみられる掘立柱建物の柱穴である。また北東にも細いピットがある。

遺物は、全くみられない。

第22号土壙（図版第22・39・43）

F-6グリッドに位置する。第39号土壙と接し、第39号に切られている可能性が強い。また、北側で小穴と重複している。平面形は長方形に近い形態を呈する。長さ1.6m、幅1m、深さ40cmほどを測る。底は、北から南に向かって少し低くなっている。

遺物は、覆土中より、かわらけ（図版第39-7）、鉄製品（図版第43-5）が出土している。

第25号土壙（図版第22・44）

F-5グリッドに位置する。平面形は長方形を呈するが、南壁に足掛けないし中段を意識したと思われる、直径35cmほどの小穴が掘り込まれていた。そしてこの小穴部から石臼、土器破片が検出された。土壙は75×55cm、深さ60cmの大きさで、壁は斜めに立ち上がり、底はほぼ平らである。なお、底の南東隅に浅い窪みがみられる。窪みの上部で底に接した状態で、わずかな残り具合であるが人骨が確認できた。

石臼（図版第44-1）は安山岩製の上臼で、粉碎する穀物類を流し込む口のある部分を欠損している。側縁はやや中央付近で膨らんだ造りになっている。大きさは直径33cm、厚さ14.6cmほどである。上面は、下部の幅5.5cm、上部の幅2.5cm、高さ2cmほどの縁がまわり、縁と縁との間は平らに仕上げられている。下面はレンズ状に窪み（4cmほど）、中心に芯受けの小孔が穿たれている。主溝による区画されたような状況をみせる部分もあるが、全体的には明確とならない。むしろ、各々の溝が芯受けに向かって放射状に収束しているといった状況を呈している。溝は、幅6mm、深さ2mm前後で、これらの間隔には広狭がみられる。側縁の中央あたりに、直径5cm、深さ5cm前後の挽手取付孔が円錐状に穿ってある。

第29号土壙（図版第23・39）

C・D-7グリッドに位置する。平面形は矩形を呈する。1.37×1.32m、深さ80cmほどを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底は壁に向い少しづつ高くなっている。なお、西壁側に半月状の掘り込みがあり、第29号土壙との間に中段を作る。本土壙を切っていたのか、本土壙の中段を作るための施設なのか調査時には確認できなかつた。

遺物は、覆土中からかわらけ（図版第39-8～9）が出土した。1は完全な形で確認されたもので、口径10.1cmほどである。内面に褐色のニカワ状に固まった付着物がみられる。2は、口径14.9cmほどの大きさである。

第35号土壙（第5図）

F-5・6グリッドに位置する。平面形態は、円形に近い形態を呈する。直径70cm、深さ30cmほどである。底は、ほぼ平らである。

遺物は、全くみられない。

第36号土壙（図版第24・39）

F・G-5・6グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。なお西側に一回り小さい方形の土壙が接している。直径1.1m、深さ30cmほどを測る。西側の土壙は60×90cm、深さ20cmほどを測る。壁はいずれも斜めに立ち上がり、底はほぼ平らである。

遺物は、覆土中より内耳土器（図版第39-10）が確認されたが、細片である。

第37号土壙（図版第24）

F-6グリッドに位置する。平面形態は、南北に長い長方形を呈する。1.4×1.2m、深さ80cmほどを測る。壁はやや斜めに立ち上がり、底は壁に向かい少しづつ高くなっている。

遺物は、全くみられない。

第38号土壙（図版第24・39）

F-6グリッドに位置する。平面形態は南北に長い楕円形を呈する。1.25×1.15m、深さ40cmほどを測る。壁は、北側を除きほぼ垂直に立ち上がっている。北壁は壁の立ち上がりが分からないように、緩やかに立ち上がっている。

遺物は、覆土中より内耳土器（図版第39-12）と、かわらけ（同13）が出土した。かわらけは、口径10cm弱の小型品である。

第39号土壙（図版第24・39）

F-6グリッドに位置する。北東部で第22号土壙と重複する。平面形は、南北にやや長い長方形を呈する。1.9×1.7m、深さ30cmほどを測る。南西と南東隅に、土壙状の掘り込みがみられる。壁は斜めに立ち上がり、底は北から南に向かって低くなっている。

遺物は、瓦器摺鉢（図版第39-11）、内耳土器（同14）、それに銭（第6図5）が1枚出土している。明銭の永楽通宝である。

第40号土壙（図版第25）

F-7グリッドに位置する。平面形は、四辺の中央が膨らむ正方形を呈する。80×90cm、深さ35cmほどを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底はほぼ平らであるが、東壁近くにレンズ状の浅い掘り込みがある。

遺物は、全くみられない。

第41号土壙（図版第25）

F-7グリッドに位置する。平面形は、矩形を呈するもの考えられる。南北80cm、東西50cm（現状）程で、深さ15cmほどを測る。壁はやや緩やかな傾斜で立ち上がり、底はレンズ状に緩やかに窪んでいる。

遺物は、全くみられない。

第42号土壙（図版第25）

E・F-7グリッドに位置する。平面形は、南北に長い長方形を呈する。南北1.05m、東西0.85m、深さ0.25mを測る。北東隅で深さ55cmほどの第42-2号土壙に切られている。壁は、やや斜めに立ち上がり、底はレンズ状に緩やかに窪んでいる。

遺物は、全くみられない。

第42-2号土壙（図版第25）

E-7グリッドに位置する。第42号土壙の北東隅を切っている。ほぼ円形を呈する。直径50cm、深さ55cm程である。

遺物は、錢が2枚出土している。錢種の確認できたのは1枚で北宋錢の元豐通宝（第6図6）である。

第45号土壙（図版第26）

D・E-7グリッドに位置する。第24号土壙に切られている。楕円形を呈する浅い土壙である。長軸1m、短軸65cm、深さ20cm前後を測る。

遺物は、全くみられない。

第46号土壙（図版第26・39）

D・E-7グリッドに位置する。ほぼ円形を呈する。直径85cm、深さ70cm前後を測る。

遺物は、覆土中よりかわらけの底部（図版第39-15）が出土した。

第47号土壙（図版第26）

D-7グリッドに位置する。ほぼ円形を呈する。直径75cm、深さ20cm前後を測る。

遺物は、全くみられない。

第48号土壙（図版第26）

D-7グリッドに位置する。不整形に近い長方形を呈する。長さ2.65m、幅1.1m、深さ30cm前後を測る。壁は斜めに立ち上がる。

遺物は、全くみられない。

第49号土壙（図版第26）

D-7グリッドに位置する。楕円形を呈する。長軸80cm、短軸65cm、深さ50cm前後を測る。

遺物は、全くみられない。

第50号土壙（図版第27）

A・B-5グリッドに位置する。丸みをもった長方形を呈する。長さ1.9m、幅1.2m、深さ25cm前後を測る浅い土壙である。

遺物は、全くみられない。

第51号土壌（図版第27）

A・B-5グリッドに位置する。楕円形を呈する。長軸70cm、短軸60cm、深さ10cm前後を測る浅い土壌である。
遺物は、全くみられない。

第52号土壌（図版第28）

E-1・2グリッドに位置する。平面形態は、長方形を呈する。長さ1.8m、幅1.9m、深さ15cm前後の浅い土壌である。中には頭大から拳大の礫が、多数入っていた。またこれらのうちの幾つかに火を受けているものも見うけられた。

遺物は、全くみられなかった。

第53号土壌（図版第28）

E-2グリッドに位置する。平面形は、長方形を呈する。長さ1.3m、幅1.05m、深さ10cm前後の浅い土壌である。

遺物は、全くみられない。

第54号土壌（図版第28）

E-2グリッドに位置する。平面形は、ほぼ長方形を呈する。長さ82cm、幅52cm、深さ20~30cmほどの土壌である。中にさらに幾つかの小穴が掘られている。

遺物は、全くみられない。

第55号土壌（図版第28）

E-1グリッドに位置する。平面形は、楕円形を呈する。長径90cm、短径70cm、深さ26cmほどの土壌である。
遺物は、全くみられない。

第56号土壌（図版第28）

D・E-1グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。直径1.4m、深さ20cm前後ほどの浅い土壌である。
遺物は、全くみられない。

第57号土壌（図版第29）

A-1グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。直径80cm、深さ40cm前後を測る。
遺物は、全くみられない。

第58号土壌（図版第29）

A-1グリッドに位置する。平面形は、ほぼ円形を呈する。直径55cm、深さ55cm前後を測る。
遺物は、全くみられない。

第59号土壌（図版第29）

A-2グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長軸1.6m、短軸1.35m、深さ17cm前後の浅い土壌である。
遺物は、全くみられない。

第60号土壙（図版第29）

B-2・3グリッドに位置する。第61号土壙を切っている。平面形は楕円形を呈している。長軸1.65m、短軸1m、深さ20cm前後の浅い土壙である。

遺物は、全くみられない。

第61号土壙（図版第29）

B-2・3グリッドに位置する。第60号土壙に切られている。平面形は、ほぼ円形を呈する。直径1m、深さ15cm前後を測る。

遺物は、全くみられない。

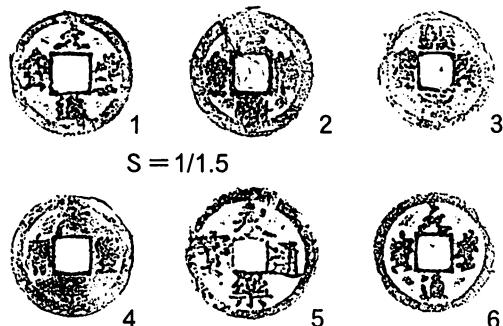
第62号土壙（図版第30）

B-3グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。直径60cm、深さ25cm前後を測る。

遺物は、全くみられない。

その他の土壙（図版第29・30）

墓壙と考えられない小穴については、一々説明するのを省き、深さのみを表示した。この中でも特にA・B-1～3グリッドの土壙番号以外の小穴は、全て桑などを畠状に植えた跡である。また、同グリッドにみられる第57～62号土壙についても、墓とするよりは樹木に関係する穴ではないかと考えられる。



第6図 出土貨銭

第3節 壇穴状建物・掘立柱建物

第1号壇穴状建物跡（図版第31・39・43）

E・F-3・4グリッドに位置する。長軸をほぼ南北にとる平面形態が長方形の壇穴状建物跡で、北東隅の下部に第10号地下式土壙がある。地下式土壙との関係は明確にならないが、北東隅の床が落下している状況からすれば、壇穴状建物跡が古く、地下式土壙が新しいのではないかと考えられる。壇穴状建物跡は長軸4.44m、短軸3.4mの大きさである。南東斜面に造られているため、壁は北壁で83cm、西壁で69cm、南壁37cm、東壁が36cmほど、北西側が高く南東側が低い状況を呈している。床は、ほぼ平らに造られており、中央やや東寄りに焼土がみられ、さらに落下した地下式土壙の部分に続いているのであろう。中央やや南西寄りで僅かに窪む楕円形の落ち込みを確認でき、その傍らにやや平たい石が据えられているような状況で確認された。柱穴は、床面からは全く確認できなかった。これにかわって西壁の立ち上がり部分から切り込んだ小穴が一列に6個並んで確認された。また西壁の外側に沿って小穴が数個確認できるが、これも柱穴の可能性がある。さらに南壁の中央付近の外側に張り出したような格好で、小穴がみられる。北壁および東壁、あるいは壁回りからは、小穴は確認されなかった。ただし東壁の中央あたりにやや大ぶりな穴がみられ、あるいは柱穴である可能性もある。特に北壁には、北東隅

あたりで一部崩れているが、5段前後に積まれた石垣を確認できた。南東隅にも石の散乱する状況を確認できるが、何かに使われたような配置を確認することはできなかった。

遺物については、西壁の南壁寄りで床面に接した状態で鉄製品（図版第43-7～10）、それに覆土内から内耳土器（図版第39-16）、陶器の鉢（同17）が出土した。鉄製品はレントゲン撮影の結果、いずれも中空状のものであることが判明した。鉄板を幅8mm前後で四角く折り曲げたものと考えられる。このうち1は尖っている部分に長さ12cmほどに渡る木質の付着部分が確認でき、さらにその先端を折り曲げて外れないようにしている。2も同様なものと考えられる。従って「コ」の字状に折り曲げ、その先端を木質の部材に打ち込み、先端を外れないようにしたものである。中空の造りであること、「コ」の字状の部分が幅15cm、厚さ5cmほどであることから、開き戸ないし什器類の引き出しなどの取手ではないかと考えられる。

第2号竪穴状建物跡（図版第32）

F-4グリッドに位置する。北壁中央付近で、第27号地下式土壙と重複する。新旧関係は明確でないが、それでも第27号地下式土壙の竪坑の入口付近に据えられた偏平な礫が、本建物跡の壁から突き出している状況などから、本建物跡が先行して造られたものと考えたい。第1号竪穴状建物跡同様に長軸ないし短軸を、ほぼ南北にとる。平面形態は南側が法面となり下の畑に続いているため不明である。長方形ないし方形を呈するものと考えられる。なお西側については、長軸80cm、短軸55cm、深さ40cmほどの土壙などが掘られているため、西壁の部分を明確にできなかった。現在残っている部分は、東西2.75m、南北1.4mほどである。北壁は60cm、東壁は25cmほどの確認である。このうち東壁は、緩やかな立ち上がりである。床は、ほぼ平らに造られている。中央西寄りに、長軸60cm、短軸40cm、深さ15cm前後の浅い窪みがある。またこの窪みから東側に僅かに離れた位置に、礫がみられる。床面に明確な柱穴と考えられる箇所はみられなかった。しかし壁回りに、第1号竪穴状建物跡にみられたような小穴が何ヵ所か確認され、これらが柱穴ではないかと考えられる。

遺物は、ほとんどみられなかった。

第3号竪穴状建物跡（旧第5号地下式土壙）（図版第33・39）

調査時に第5号地下式土壙としたもので、柱穴などもみられず墓の可能性も捨て難いが、壁が低く天井高を確保できない恐れがあり、また平面形態、壁の立ち上がり状況などから建物跡とするのが合理的と考えたものである。

E-4グリッドに位置する。北側で第4号竪穴状建物跡と重複する。新旧関係は、第4号竪穴状建物跡の床面が第5号地下式土壙まで及んでいないことから、本建物跡が第4号竪穴状建物跡を切っているものと考えられる。平面形態は長方形で、長軸を東西にとる。長軸3m（現況）、短軸2.10mほどの規模である。壁は北壁で20cm、西壁で84cm、南壁で58cm、東壁で46cmほどが確認できた。床は、ほぼ平らに造られている。南東隅に長軸80cm、短軸55cm、深さ40cmほどの土壙がある。柱穴、焼土などは全く確認できなかった。

遺物は、覆土中から小破片であるが、練鉢（図版第39-18）と考えられる瓦器が確認された。

第4号竪穴状建物跡（旧第6号地下式土壙）（図版第33）

調査時に第6号地下式土壙として扱ったもので墓の可能性も捨て難いが、第3号竪穴状建物跡と同様な理由で建物跡としたものである。

D-E-4・5グリッドに位置する。南側で第3号竪穴状建物跡、西側で第4号地下式土壙と重複する。新旧関係について第3号竪穴状建物跡との関係をみれば、第3号竪穴状建物跡で述べた理由で、本建物跡が切られている。また第4号地下式土壙との関係については、やはり地下式土壙に切られていると考えている。平面形態は、長方形で、長軸を南北にとる。長軸3.05m、短軸2.6mほどの規模である。壁は、北壁で60cm、西壁で57cm、東壁で43cmほどを測る。床は、ほぼ平らに造られている。柱穴、焼土などは、全く確認できなかった。

遺物は、かわらけなどの細片が多少みられた。

第1号掘立柱建物跡（図版第34）

E・F-6・7グリッドに位置する。柱間2.1～2.3mの東西1間×南北2間の、南北に長い建物跡と思われるものである。確認された柱穴は5本で、西列の真ん中の柱穴が確認できなかった。確認できなかった柱穴は、位置的にちょうど地下式土壙の崩れた覆土の中に掘られたためと考えられる。柱穴は直径30～50cm、深さ50cm前後である。

遺物は、周囲からかわらけなどの細片が多少確認された程度で、柱穴の中からの出土はない。

第4節 溝

第1・2号溝（図版第35）

B・C-7・8グリッドに位置する。ほぼ南北の等高線に沿って斜面上に造られた幅3.2m前後の深い溝の上端と下端に、幅の狭い溝2条を添えた形態をとる。これらは一体のものと考えられるが、便宜上、下のものを1号溝、上のものを2号溝とした。1号溝は幅50cm、深さ15cm前後である。2号溝は1号溝より多少細い幅40cm、深さ15cm前後である。この間に挟まれた中間地帯は、幅1m前後で10cm前後の段を持つ。そして部分的であるが砂利などが入り、また硬化面も確認された。これらからあるいは溝ではなく、墓への道路の可能性もある。

遺物は、全くみられない。

第3号溝（図版第36・37）

A～D-6・7グリッドに位置する。ほぼ南北の等高線に沿って斜面上につくられた幅1.5m前後の溝である。第12号地下式土壙と第13号土壙と重複している。新旧関係は、本溝が両土壙を切っているものと考えている。第12号地下式土壙より以北は幅1～1.9m、深さ90cm前後である。これに対して第12号地下式土壙より以南は、幅は1m前後であるが2段に渡って落ち込み、しかも深さ35cm前後となり趣を異にする。

遺物は、かわらけなどの細片が多少確認された程度である。

第4・5号溝（挿図第5図）

A～D-4～6グリッドに位置する。第4・5号溝は、ほぼ等高線に沿って南北方向に向い、C・D-4グリッドで「L」字状に向きを変えこんどは東西方向に向い、第3号溝に接続する。なおこの中で、L字状に向きを変えた位置から両溝は別々に分岐する。第4号溝は第3号地下式土壙、第5号溝は第3・16号地下式土壙と重複し、いずれをも切っているものと考えている。

第4・5号溝の南北に走る部分では、それでおおよそ50cm前後の幅で平行して走り、両者を合わせると幅1m前後となる。ただし、深さでは第4号溝が40cm前後なのに対して、第5号溝が上部にあり深さ20cm前後と浅い。向きを変えてからは第4号溝は、幅90cm前後、深さ40cm前後となる。しかし第16号地下式土壙以東では細かく数条に別れるものと考えられる。一方の第5号溝は、幅50cm前後、深さ40cm前後となる。

遺物は、かわらけなどの細片がいくつかみられたにすぎない。

第5節 その他の遺構と遺物（図版第29・30）

A・B-1～3グリッドにおいて、直径30cm、深さ20cm前後の小穴が多数確認されたが、これらは先に述べたように全て桑を畝状に植えた跡である。畝はおおよそ1.8mの間隔で作られており、この畝上に80cm前後の間隔に桑が植えられたものである。桑は基本的には畝に沿って植えられているが、この畝上以外にみられる小穴も改植などによるものであろう。なお、本グリッド内にみられる第57～62号とした土壙は、墓というよりは樹木にかかる穴ではないかと考えている。

遺物は、かわらけなどの細片が多少出土した。

第6節 グリッド出土遺物（図版第40～42）

本遺跡においては、かわらけなどの遺物がその濃淡はあるものの、ほぼ全域に渡って確認された。前述の地下式土壙や土壙などにおいても遺物が確認されているが、そのほとんどが覆土内からの出土であり、原位置をおさえられたものは僅かに過ぎない。ここでは遺構以外で確認され、かつ図化できたものについて記述することとした。

A-4・5グリッド

いずれも内耳土器（図版第40-1・2）の口縁部の細片である。

B-2・6・9グリッド

内耳土器の底部（同3・4）と、縄文土器（水式）の深鉢の口縁部（同5）の細片である。

C-4・6・9グリッド

内耳土器の口縁部（同6・7）と、かわらけの口縁部（同8）の細片である。

D-6グリッド

内耳土器の口縁部（同9・10）と底部（同11）、かわらけの口縁部（同12）、陶器の底部（同13・14）の細片である。このうち13の陶器には、内外に青灰色の釉薬がみられる。14の陶器は、外面に全体に鉄釉が塗られている。なお、13の陶器については近世以降のものと考えられる。

D-7グリッド

すべて内耳土器の口縁部（同15～17）と底部（同18～19）（図版第41-1・2）の細片である。

D-8グリッド

内耳土器の口縁部（同3）と底部（同4・5）、かわらけ（同6～8）の細片である。

D-9グリッド

かわらけ（同9）の細片である。

E-5グリッド

内耳土器の口縁部（同11・12）と底部（同14）、それにかわらけ（同15～20）、磁器碗（同21）である。このうち20は三足碗である。なお、磁器碗は近世以降のものと考えられる。

E-1グリッド

内耳土器の口縁部（図版第41-10）である。

E-6グリッド

内耳土器の口縁部（同22～24）と、陶器の甕の口縁部（同25）である。このうち陶器の甕は常滑窯製品と考えられるものである。

E-7グリッド

かわらけ（同26）の細片である。

E-4グリッド

内耳土器の口縁部（図版第42-1・2）である。

F-4.5グリッド

内耳土器の口縁部（図版第42-1～5）と、かわらけ（同6・7）それに陶器碗（同8）の細片である。陶器碗は外面の沈線部にまで、鉄釉が塗られている。近世以降のものと考えられる。

F-6.7グリッド

陶器片（同9）、内耳土器の底部（同10）である。

G-5グリッド

内耳土器の底部（同11）である。



第7図 遺物分布図（かわらけ、内耳土器等）



第8図 遺物分布図（鉄製品・貨銭等）(番号は図版第43図に一致)

表採遺物

内耳土器（図版第42-12～16）、かわらけ（同13～18）、陶器碗（同19）、磁器（同12）、石臼（図版第46-3）などがある。

第4章 各説

第1節 出土遺物と遺構の時期

本遺跡からは、先のようにある程度の土器や鉄器などが出土している。そして土器類については、極力遺構と関係づけて記述してきた。しかし具体的にはそのことごとくが覆土からの出土であり、確実に遺構に伴うといった例は皆無に近いといえる。わずかに第33号地下式土壙から出土した鉄鎌、それに第1号建物跡から出土した鉄製品などが確実に伴うものと確認されたに過ぎない。また、内耳土器なども同一個体のものを極力まとめようとしたが、出土量が少ないなかで接合できた資料はほんの僅かに過ぎなかった。また、口径ごとの復元ということから大小ばらつきのみられるものであり、かつ結果として破片の数に近い図化の数となってしまい、実際の個体数とは掛け離れたものではないかと考えられるものである。まず、このような前提のあることを明記しておきたい。

次に本遺跡での遺物の分布状況は、第7・8図から明らかなように南東斜面を中心に分布していることがわかる。これは、地下式土壙、土壙などが斜面を利用して作られていることによるもので、斜面の上にあるものが開墾などによって徐々に下方にかき寄せられた状況を示しているものととらえることができる。このような状況からは、遺構との関係を厳密に確認することはできない。しかし、本遺跡でみられる内耳土器などは、これまで県内の各地で調査された地下式土壙、土壙、五輪塔などの遺構が調査された折りに、必ずといってよいほど出土することが知られているものである（第1表）。従って、このことからすれば本遺跡における遺物も覆土からの確認とはいえ、本遺跡で確認されている地下式土壙、土壙などにかかわるものととらえて大過ないものであろう。

本遺跡における遺物は、内耳土器、かわらけ、瓦器、陶器、磁器、鉄製品、古銭などである。これらの時期について次に触れてみたい。なお、このうちの磁器類は、地下式土壙や土壙などより後の近世以降のものと考えられるものであり、これ以外のものが本遺構にかかわるものと考えている。

内耳土器は、先に触れたように個体数、口径などに明確にならない点が多々みられるものである。このようななかで、口縁形態からすれば5～6個体の存在が推定され、またそれほど極端な開きではないが大きさからは直径25cm前後のものと、30cm前後のものとに分かれるようである。造りは、器肉の薄いものがほとんどのようにある。形態的には、深鍋形ないし浅鍋形のものと考えられるもので、深鍋形のものが少なくとも2個体確認されている。そして内耳土器には、破片の中に浅い盤形を想定させる明確な資料は今のところみられない。このことは本遺跡にみられる内耳土器が、深鍋形ないし浅鍋形を中心とした時期のものであることを暗示しているように思われる。本遺跡の内耳土器をこれまでに検討されている県内の内耳土器編年に当てはめると、本遺跡出土のものは15世紀後葉から16世紀前葉にみられる形態といえるものである。

かわらけは、法量的に2形態がみられる。一つは大きめな直径15cm前後のもの、いま一つは小振りな直径10cm前後のものである。口唇部形態は、丸く作られたものが大半であり、尖った形態のものは僅かである。かわらけの年代に関しては、勝沼町（伝）岩崎氏館跡が参考になろう。岩崎氏館跡から出土したかわらけは、大小問わず体部中央付近にほとんどが稜線をもつものである。そして伴出した陶器類から15世紀後半代ころの年代が考えられている。また、新しい時期のものとしては、境川村寺尾出土の陶器仏餉碗・碗に伴ったかわらけがある。このかわらけは、小振りの形態で、体部中央付近に稜線を認められないものであり、本遺跡に近いものがある。なお、口径／底径比は0.59ほどのものである。伴出した仏餉碗・碗などはその釉調から瀬戸の御深井釉と考えられるものであり、およそ17世紀後半代以降のものと考えられている。本遺跡出土のかわらけは、先に触れたように体部中央付近に稜線のないもので（伝）岩崎氏館跡以降の形態である。しかし、小振りのかわらけの口径／底径比はおよそ0.49ほどのものであり、境川村寺尾出土品以前の様相をみせるものである。このことから本遺跡のかわらけは、15世紀後半代以降で16世紀前半代、少なくとも17世紀後半代以前の形態を示すものととらえられるのではないだろうか。

本遺跡からは、数点であるが大甕（図版第38-8ほか）、碗（図版第39-4）などの陶器類が出土している。こ

所在地	遺跡名	遺構名	形態	遺物	時期	
長坂町	小和田館跡	北13号	方形	かわらけ、須恵、陶器		
		北44号	方形			
		北6号	長方形	陶器		
		C 6号		かわらけ、内耳	15世紀代	
		C 12号		人骨		
大泉村	御所遺跡 東姥神B 遺跡	1号	長方形	かわらけ、内耳、石製鉢	16~17世紀	
		S K 2号	長方形			
		S K 3号	方形			
		S K 6号	方形			
		S K 8号	方形			
	金生遺跡	1号	長方形	古錢	15世紀代	
		2号	方形	かわらけ、内耳	"	
		3号	楕円形		"	
		4号	長方形		"	
		5号	方形	かわらけ、(内耳) 鉄釉水滴、鉄釉茶入れ	"	
	金生遺跡	6号	長方形		"	
		7号	方形		"	
		8号	方形		"	
		10号	方形	石臼 鉄鎌	"	
		12号	長方形		"	
	金生遺跡	13号	長方形	かわらけ、五輪塔	"	
		14号	方形		"	
		15号	方形	鉄釉菊皿	"	
		16号	長方形		"	
		17号	方形		"	
	金生遺跡	18号	方形		"	
		19号	方形		"	
		22号	方形		"	
		23号	方形		"	
		24号	長方形		"	
	金生遺跡	25号	方形	かわらけ	"	
		26号	長方形		"	
		27号	長方形		"	
		28号	長方形		"	
		29号	方形		"	
	金生遺跡	30号	長方形		"	
		31号	楕円形		"	
		32号	方形		"	
		33号	長方形		"	
		34号	矩形		"	
	金生遺跡	35号	長方形		"	
		37号	長方形		"	
		38号	長方形		"	
		40号	長方形		"	
		41号	矩形		"	
	金生遺跡	42号	長方形		"	
		43号	楕円形		"	
		44号	楕円形		"	
		45号	長方形		"	
		46号	矩形		"	
	金生遺跡	47号	楕円形		"	
		48号	楕円形		"	
		49号	長方形		"	
		51号	長方形		"	
		52号	方形		"	
	金生遺跡	53号	方形		"	
			台形		"	
明野村	中村道祖神 遺跡	91号	長方形	かわらけ		
		88号	長方形			
		117号	楕円形			
		3号	長方形	かわらけ、内耳		
		87号	楕円形			
		2号	不整形			
		1号	楕円形	かわらけ		
		4号	長方形			
		6号	長方形	かわらけ、内耳		
明野村	中村道祖神 遺跡	18号	長方形			
		107号	-			
		7号	長方形	石臼		
		9号	楕円形	かわらけ		
		5号	長方形			
		11号	円形	内耳		
		17号	不整形	石臼		
		26号	長方形			
		39号	楕円形	かわらけ、内耳		
		61号	長方形	内耳、ひで鉢	16世紀	
		43号	不整形	かわらけ	15世紀	
		45号	不整形	かわらけ		
		44号	円形	かわらけ、内耳		
		52号	長方形	石臼、かわらけ、内耳	15世紀	
		106号	円形			
		65号	長方形			
		36号	長方形	内耳		
		60号	方形		15世紀	
		35号	矩形	石臼、かわらけ、内耳	15~16世紀	
		46号	-	かわらけ、内耳、古錢	15世紀	
		169号	長方形			
		64号	方形	石臼、かわらけ、内耳、		
		69号	長方形			
		171号	長方形			
		148号	長方形			
		166号	不整形			
		147号	-			
		155号	長方形			
		168号	長方形			
		149号	長方形		白磁 15世紀	
		153号	長方形	かわらけ		
		150号	長方形	かわらけ	15世紀	
		154号	長方形	かわらけ 古錢		
		138号	長方形			
		152号	長方形			
		156号	長方形	かわらけ		
神取遺跡		1号	楕円形	石臼		
		2号	長方形	石臼		
		3号	円形	石臼		
		4号	長方形	石臼		
		5号	不整形			
		6号	長方形			
武川村	上原遺跡	1号	長方形			
		1号	長方形			
垂崎市	伊藤窪 第2遺跡	2号	長方形			
		3号	長方形	かわらけ、内耳		
		3号	長方形			
三珠町	上野遺跡	1号	楕円形		15世紀中	
		1号	隅丸方形			
甲府市	牛石地下式 土壤	1号	長方形			
		2号	長方形			
		3号	長方形			
		1号	楕円形	石臼		
大月市	吉久保遺跡	1号	長方形			
		2号	長方形			
	原平遺跡	3号	長方形			
		1号	楕円形	石臼		

第1表 県内地下式土壤一覧

のうち大甕は無釉の破片数点がみられ、造りなどから同一個体であろう。この大甕は常滑窯製品で、形態的には口縁の縁帯の幅が極端に広いのが特徴である。このように口縁の縁帯の幅が広くなる形態は、およそ15世紀終わりころより16世紀前半代にかけてのものと考えられている。残りの碗類は、うぐいす色の釉が全面に塗られたもので、いずれも瀬戸の大窯製品である。大甕同様におおよそ15世紀後半～16世紀前半代のものと考えられるものである。

本遺跡出土の鉄製品には、鉄鎌、不明鉄製品がある。鉄鎌は、先端部を僅かに欠損している。このような形態の鉄鎌の確認された調査例は、県内ではそれほど多くなく、形態による明確な時期的位置づけはなされていない。長坂町健康村遺跡出土の鉄鎌は、かわらけなどと伴出している。このかわらけの形態は、本遺跡出土品に近いものがある。明確な時期設定はないが、中世の時期と考えられているものである。

出土銭のうち、銭種の確認できたものは5枚ほどである。内訳は第11号地下式土壙で元豊通宝（初鋤1078年）1枚、元祐通宝（初鋤1086年）1枚、それに開元通宝（初鋤960年）ではないかと思われるもの1枚、第26号地下式土壙で元豊通宝1枚、第39号地下式土壙で永楽通宝（初鋤1408年）1枚、第42-2号土壙で元豊通宝1枚などである。唐銭の開元通宝以外は、北宋銭である。最も新しいものが永楽通宝であり、15世紀代前半代に作られたものである。

鉄製品については、木質部に打ち込んで使用したものであることは確認できるが、用途は不明である。年代は、県内に類似資料がなく明確にはならないが、地下式土壙などとの関係から、15世紀後半頃のものであろう。

以上、本遺跡出土の遺物の時期について検討を加えてきたが、内耳土器、陶器類などから大きくは15世紀後半代から16世紀前半代にかけてのものと考えて大過ないであろう。また出土銭も皇朝十二銭の乾元大宝（958年）から寛永13年（1636）までの我が国で錢貨の鋳造されなかった間、中国から輸入され使用された渡来銭であり、年代的には全く矛盾しない。従って本遺跡の遺構もこの時期に作られ、使用されたもので、地下式土壙と土壙とは同じころに順次作られたものと考えられる。そしてこの年代については、第1表に示すように県内各地で確認されている地下式土壙の年代とも矛盾することはない。また、出土遺物の様相も極めて近い状況にあり、この点からも先の時期が大幅に前後することはあり得ないものといえる。

第1～4号竪穴状建物跡については、県内においてほとんど類例がみられないようである。これまで県内における中世の集落跡、墓地などの調査から掘立柱建物がよく確認されているが、本遺跡のものは竪穴を掘りその周囲などに柱を立て、かつ内部に石積みを伴うものであり、大いに違う形態のものである。建てられた時期については、壁際から出土した鉄製品からは明確にすることはできない。しかし地下式土壙などとの関係から考えると地下式土壙に先行する時期に作られたと考えるのが、合理的のように思われる。ただし、それほどの開きはなく、近接した時期につくられたものと考えられる。

第2節 墓について

本遺跡で確認された墓には、地下式土壙と土壙の2形態が知られるが、その占地については若干の違いがみられるようである。まず地下式土壙では斜面の平坦部に造られたのが第14号地下式土壙のみであり、残りのものは全て斜面の上縁を中心とした台地の縁辺部に作られていることが分かる。これに対して土壙は、幾つかの例外を除いてその多くが斜面の下端に近いところに、また地下式土壙の周囲に造られていることが分かる。規模においても、費やされるエネルギーにおいても地下式土壙の大きさに比べ、土壙は小規模なものであることが一目瞭然である。このことは地下式土壙と土壙との間に、埋葬された人物の地位などによる違いが存在することを示しているものとも受け取れる。そして墓の位置や規模からすれば地下式土壙が上位の葬制であるかのようにも見られるが、副葬品などには、どちらも内耳土器、かわらけ、陶器類、銭、鉄鎌といったものが確認される程度であり、これといって明確な階層差、違いを示すものはみうけられないようである。このことは、墓の違いが所属する集団の違いによるものではなく、同じ集団内、家族内における地位などの違いに起因するものではないかと考えられるのである。

本遺跡は、出土遺物からみて15世紀後半～16世紀前半代にかけて、同一の葬制をとることから同じ集団によって形成されたものであることが確認できるのではないだろうか。次に、本遺跡を取り巻く歴史的環境について、先に述べたことと重複する部分もあるが改めて触れてみたい。

本遺跡の存在した時期には、周辺地域においても15～16世紀代と考えられる板碑が多数確認できる。このことは、当時この地域一帯が活発な活動をみせていましたことにはかならないであろう。そしてこの時期は、武田三代の祖である武田信虎の時代の前後にあたる。信虎は、これまで暴虐な人物像として定着している。しかし、最近になって武田三代の礎を築いたのは、信虎であったのではないかといった見直し論もだされている。武田三代の領国支配体制は、旗本、地方武将に率いられた被官の同心、武士たちであったが、辺境武士団によって維持されていた面も見落とせないものがあるといわれる。これら辺境武士団は、衆あるいは党と呼ばれ国境警備にあたったのであるが、その体制づくりは信虎によるところも多かったのではないかだろうか。本遺跡の所在する地域にかかりわりのある衆は、津金衆と小尾衆であるが、その中でも特にかかりわりの強いのが津金衆といえよう。

津金衆は、逸見筋の北辺の須玉川左岸一帯の山岳地帯を本拠地として、平沢峠を越える平沢口、十文字峠を越える佐久口を警護したものである。この津金衆には、小尾、比志、小池、箕輪、海口、村山、八巻、清水、井出、鷹見沢、河上などの諸氏があるといわれ、享禄年間（1528～1531年）に今井流逸見氏が滅亡したとき、信州よりきた佐竹源氏が逸見氏の根拠地に入り津金氏を名乗ったのが始まりとされ、この津金氏を頭目に結び付いたのが津金衆と言われている。このことは、津金氏以前の逸見氏の時期に逸見氏の下に既に多数の諸氏が結集していたものを、改めて吸収、結合したものであろう。

これら津金衆のうち本遺跡に最もかかりわりのあるのが清水氏である。清水氏の屋敷跡については、本遺跡より直線距離で南西650 mほどの高根町久保の地に存在するものと考えられており（第2図参照）、また屋敷の南側に広がる沢の水田の開発を中心的に行なったと考えられている。この清水氏については、同所久保にある清水家墓地、高根町箕輪養福寺過去帳、さらに須玉町津金熊野神社由緒書などに15世紀まで系譜のたどれる記述がみられる。だがこれらについては、いずれもこれまで江戸時代に作られたり、書かれたりしたものと考えられているものである。しかし、最近になって清水氏とかかわりをもつ油井氏板碑（大永四=1524年銘）の存在を介して、この系譜が全く信憑性のないものではなく、逆にそれなりの事実を示している部分が多くあるのではないかと考えられるに至った。それはさきほどの過去帳などに、その存在自体確認されていない油井（由井）氏について清水氏から出た氏族であることが記されており、そしてその油井氏にかかるであろう先程の油井氏板碑が高根町東井出西村墓地から確認されたことによるものである。このように別々の資料から油井氏が確認されたことは、油井氏の存在が確実になったことを意味するものであろう。さらに油井氏の存在の信憑性により、油井氏を出した清水氏の存在自体の信憑性も合わせて高めるものとなるのである。油井氏との関係からすれば清水氏は16世紀前半代には確実に存在が確認され、養福寺過去帳などからすれば15世紀、あるいはそれ以前からの氏族と考えることもできる。

清水氏の存在が、極めて高いものと考えられるに至ったが、その本拠地は前述のように屋敷跡の存在の考えられている久保の地を中心にした地域と考えられるのである。また、この地域における氏族の屋敷跡などは第2図のように考えられている。清水氏より出た油井氏は板碑の確認された東井出地域を根拠地としたものと考えられる。これらから本遺跡を含めた地域が、清水氏にかかりわりの強い地域と考えることができるのであり、その地域に存在する本遺跡の地下式土壙、土壙なども、清水氏とのかかりわりの中で考えていく必要があろう。なお、そのかかりわり具合については、清水氏の勢力範囲と考えられる本遺跡より東側200 mほどの箕輪バイパス上の横森東下遺跡（第1図参照）において、五輪塔を伴う墓が多数確認されていることなどから、けして一様ではないと考えている。五輪塔—地下式土壙—土壙といった埋葬形態の違いに、社会的地位、階層違いが投影されているのではないかと考えている。いずれにしても本遺跡の地下式土壙、土壙は清水氏にかかりわりをもつものといえるのではないだろうか。

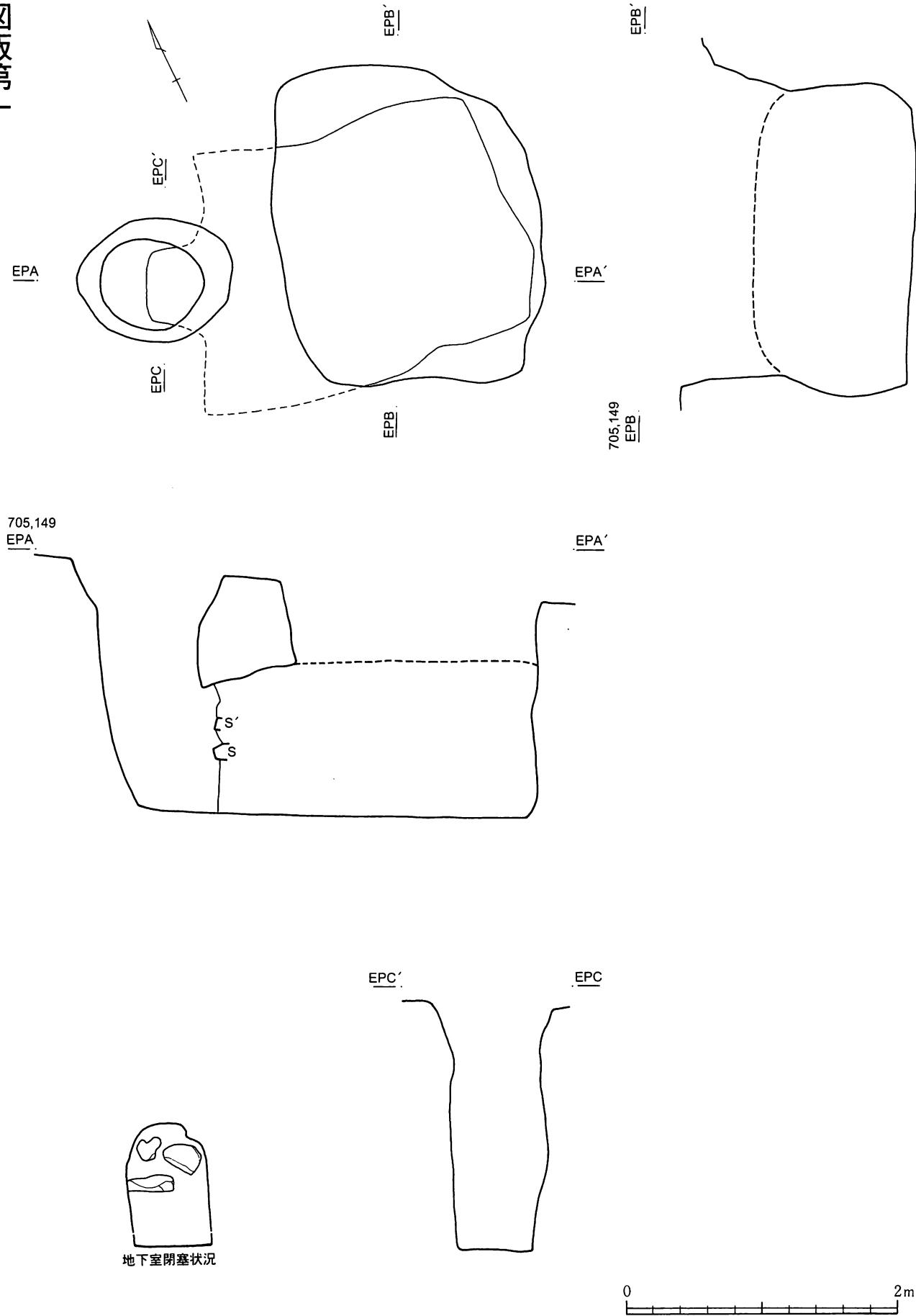
おわりに

本遺跡からは、15世紀後半～16世紀前半代と考えられる、中世の地下式土壙と土壙が多数確認された。そしてこれらが本地域に根拠をおいた、清水氏にかかわりをもった人達の墓であることも考えられるところとなった。これら確認された遺構、遺物は、本県における中世史を研究する上で、重要な資料になるのではないかと考えている。

最後に、ご協力を賜った関係機関、ご教示願った多くの方々、また発掘調査、整理作業に従事した多くの方々に厚くお礼申し上げます。

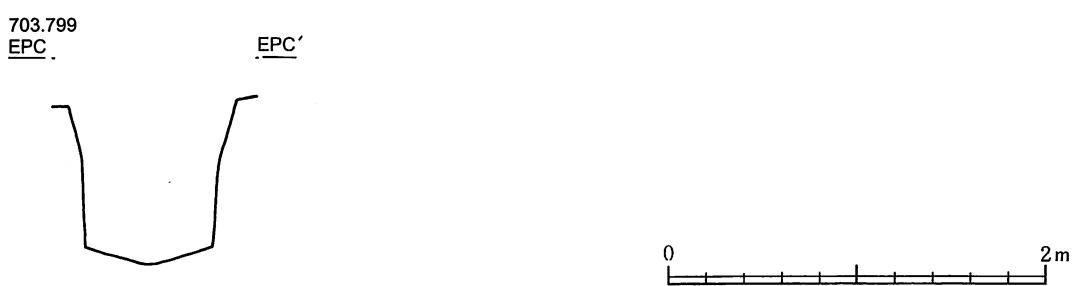
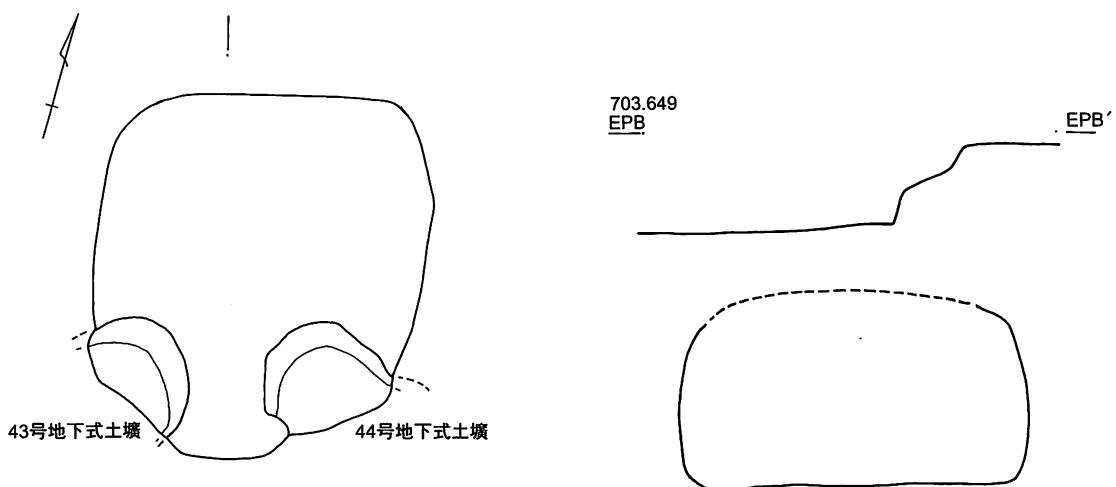
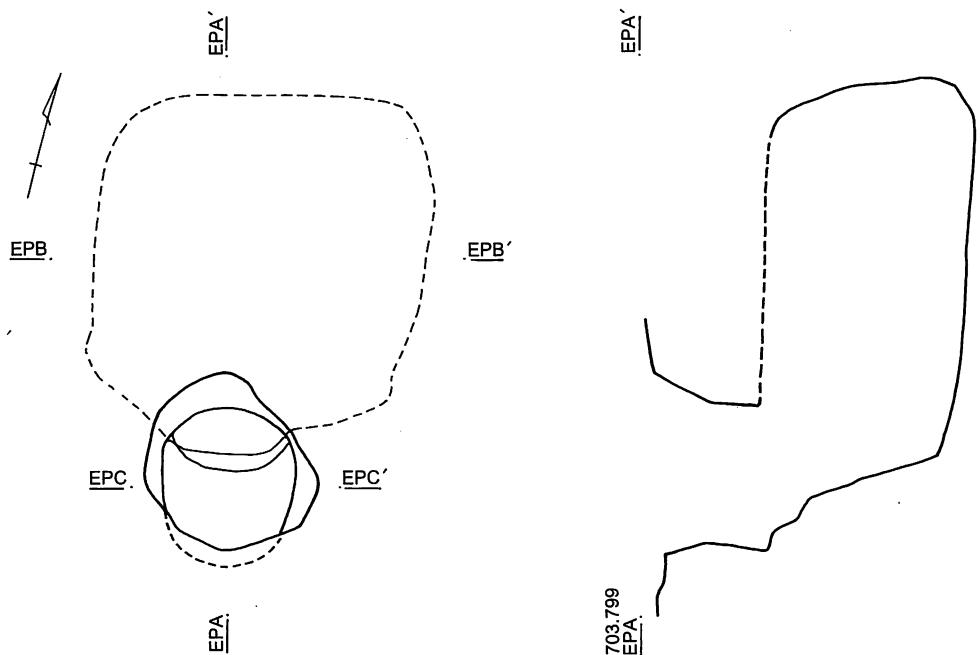
参考文献

- 坂 本 美 夫 1977 「土師質土器の考察」『(伝) 岩崎館跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会
森 原 明 廣 1993 「山梨県地域における内耳土器の系譜」『研究紀要』9 10周年記念論文集
山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
坂 本 美 夫 1983 「山梨県に於ける15世紀以降の土師質土器編年－境川村寺尾出土品を中心に－」
『甲斐考古』20の1
赤 羽 一 朗 昭和59 『常滑焼』考古学ライブラリー23 ニュー・サイエンス社
新宿区区民健康村遺跡調査団 1994 『健康村遺跡』
永井久美夫編 1994 『中世の出土銭』
平 山 優 1994 『信虎誕生500年を迎えて』山梨日日新聞9月15日掲載
持 田 友 宏 1992 『甲斐の板碑』2 国中地方の基礎調査
上 野 春 朗 1972 戦国史叢書4 『甲斐武田氏』
山梨県立図書館 1952 『甲斐社記・寺記』第1巻
柴 辻 俊 六 1990 「甲斐源氏と逸見氏」、「武田氏と高根町の城」『高根町誌』
八 卷 与 志 夫 1990 「城跡・館跡」『高根町誌』
坂 本 美 夫 1999 「高根町東井出墓地の日月板碑と油井氏」『山梨県考古学論集』IV
－山梨県考古学協会20周年論文集－



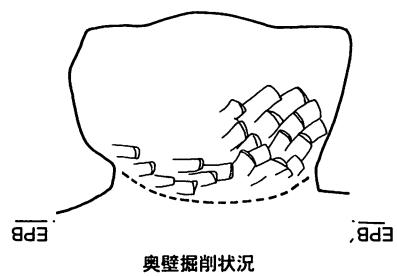
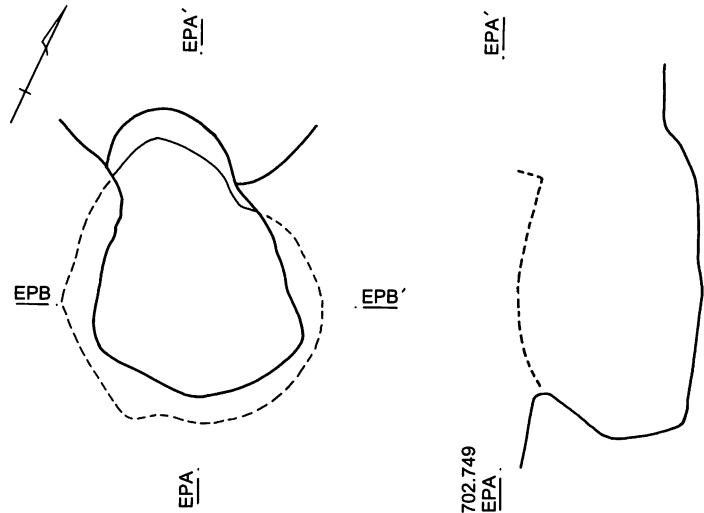
1号地下式土壤平面・断面図

II断面図

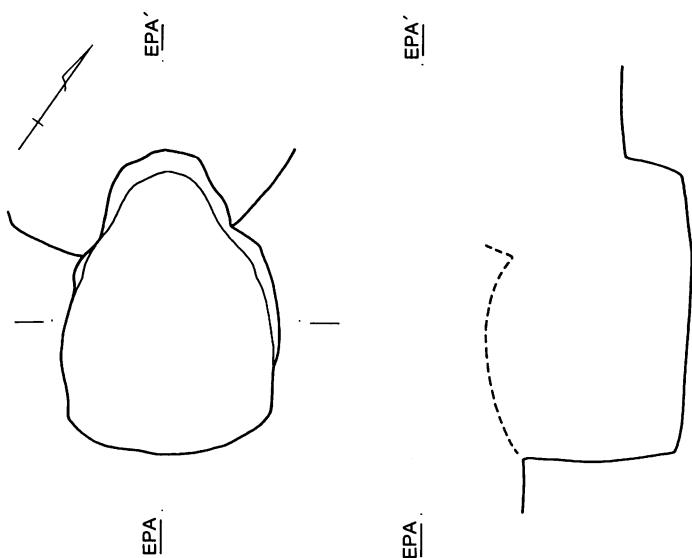


2号地下式土壤平面・断面図

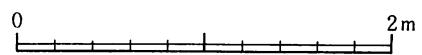
III第版図



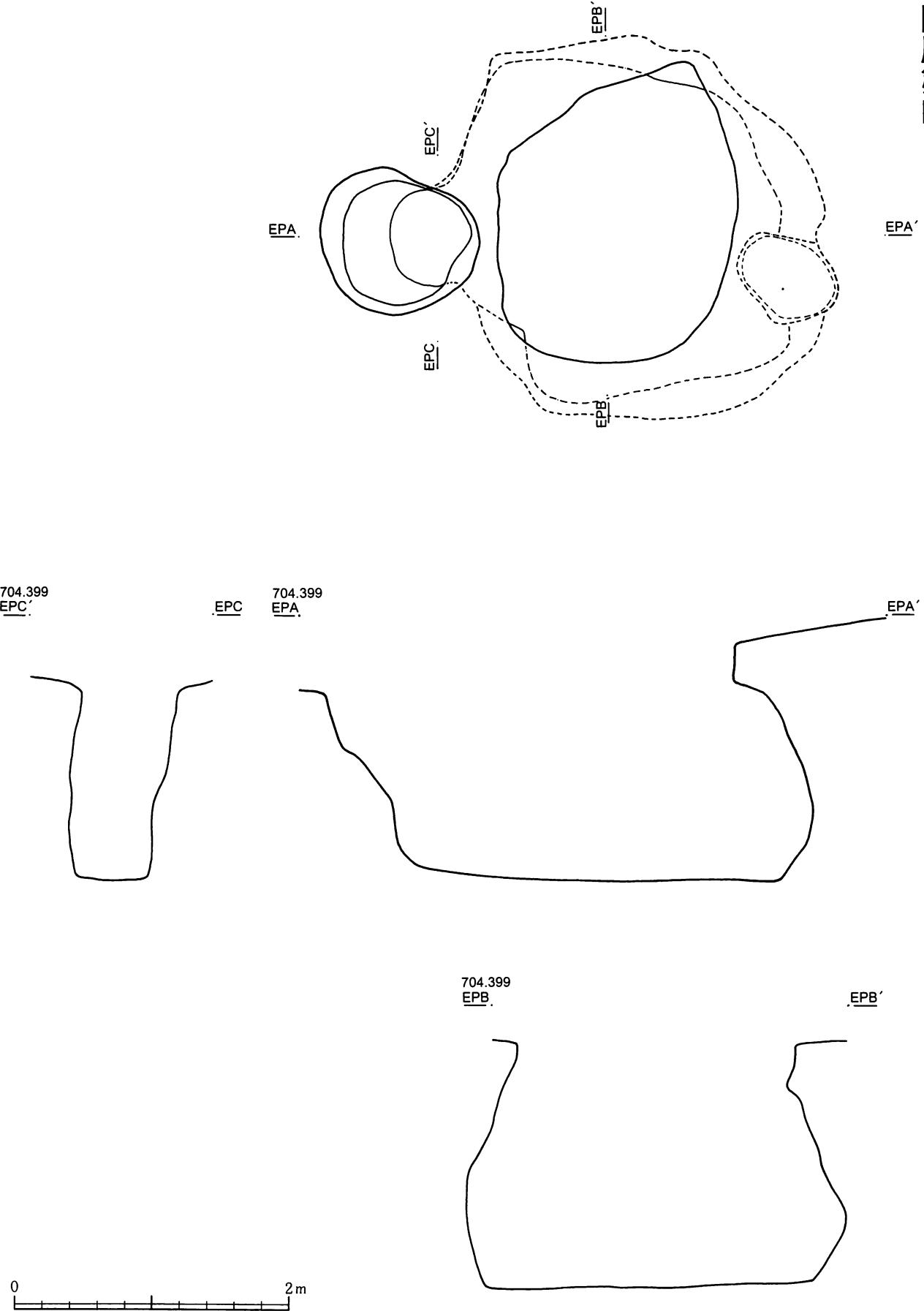
43号地下式土壤



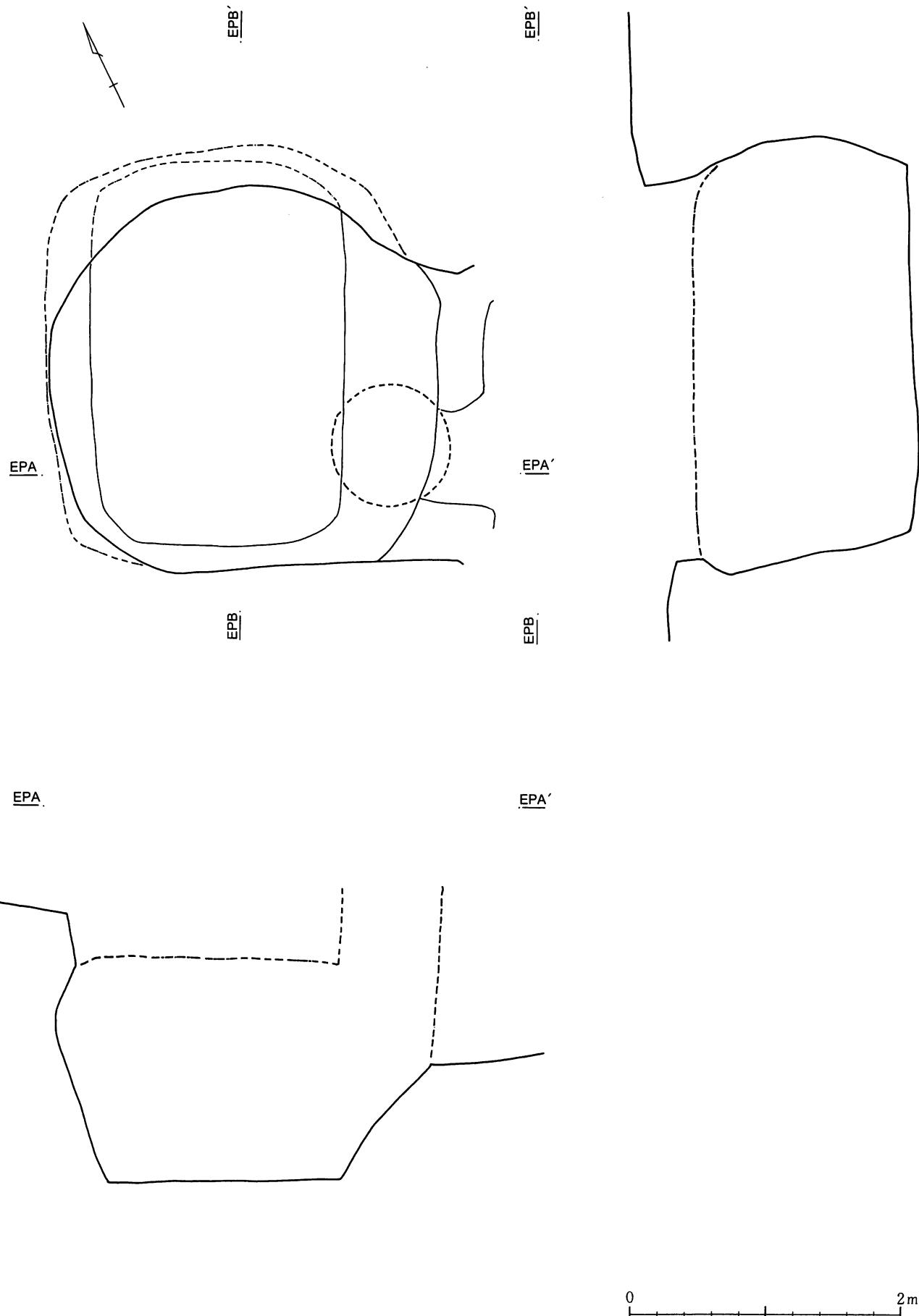
44号地下式土壤



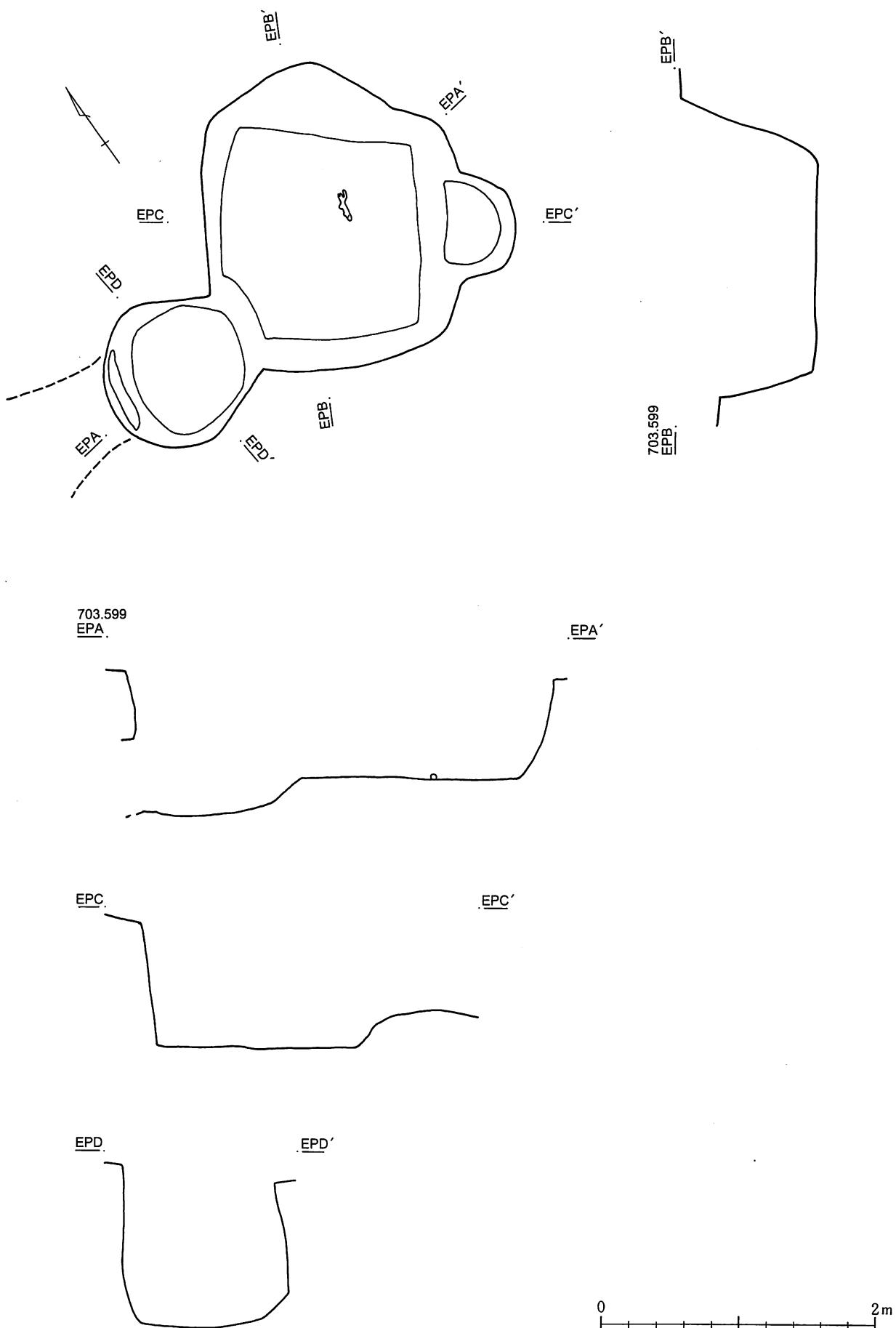
43・44号地下式土壤平面・断面図



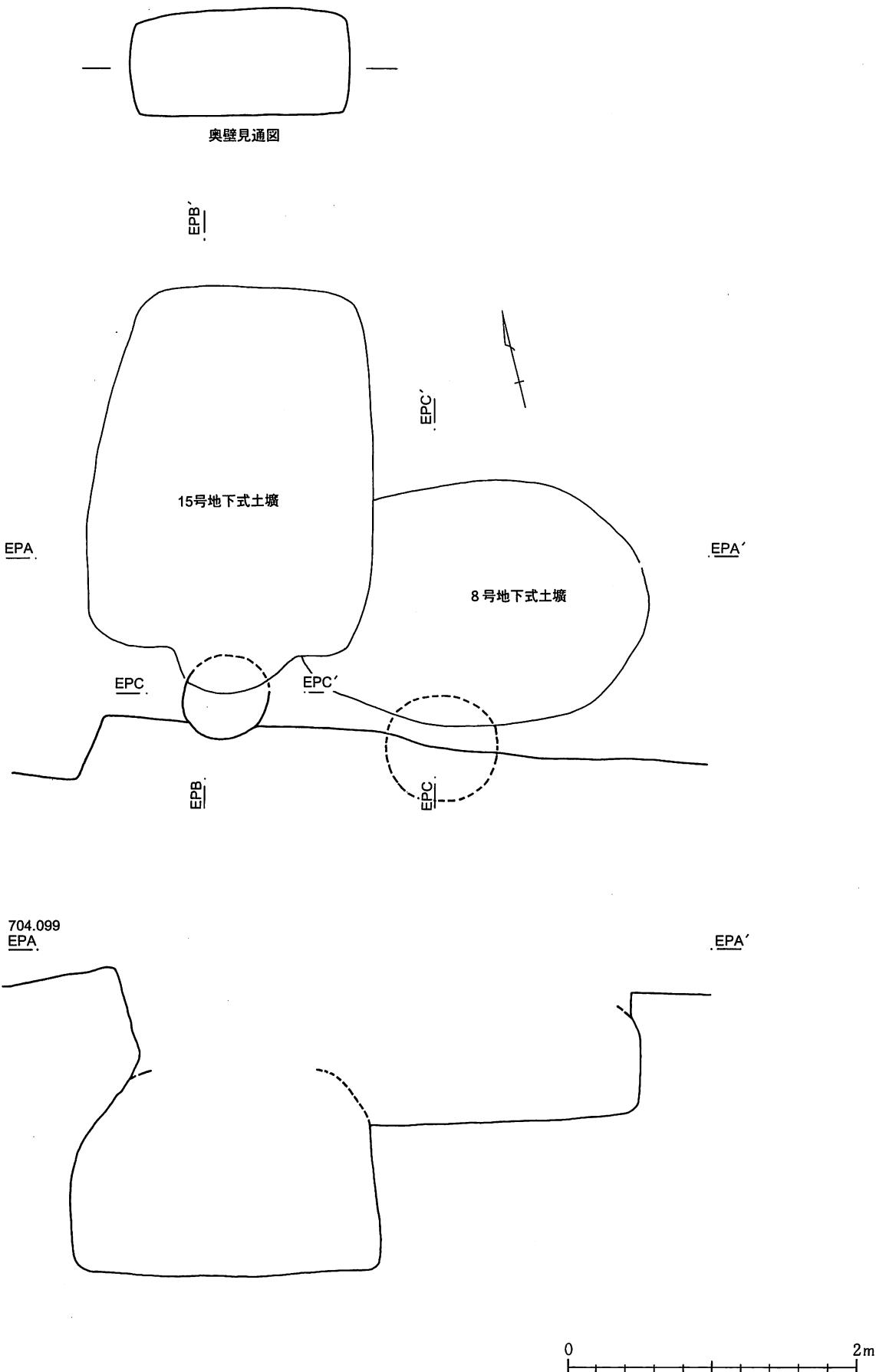
3号地下式土壤平面・断面図



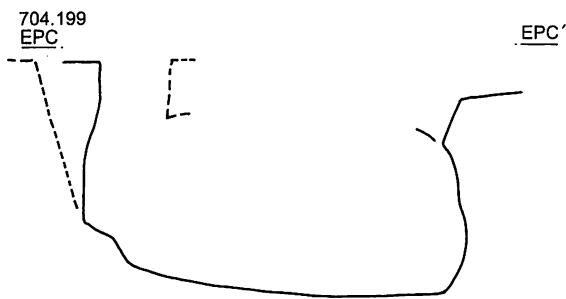
4号地下式土壤平面・断面図



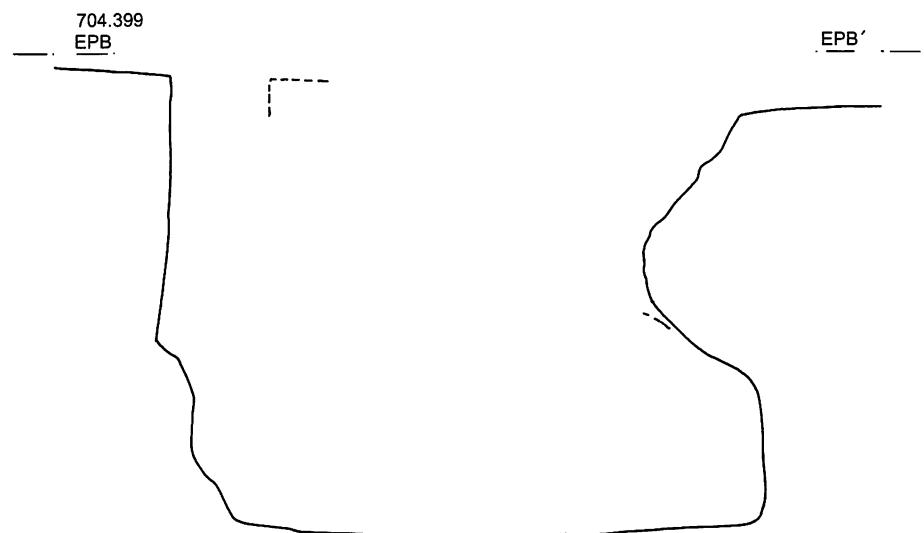
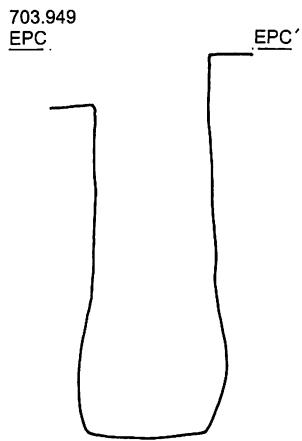
7号地下式土壤平面・断面図



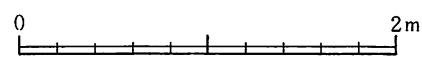
8・15号地下式土壤平面・断面図



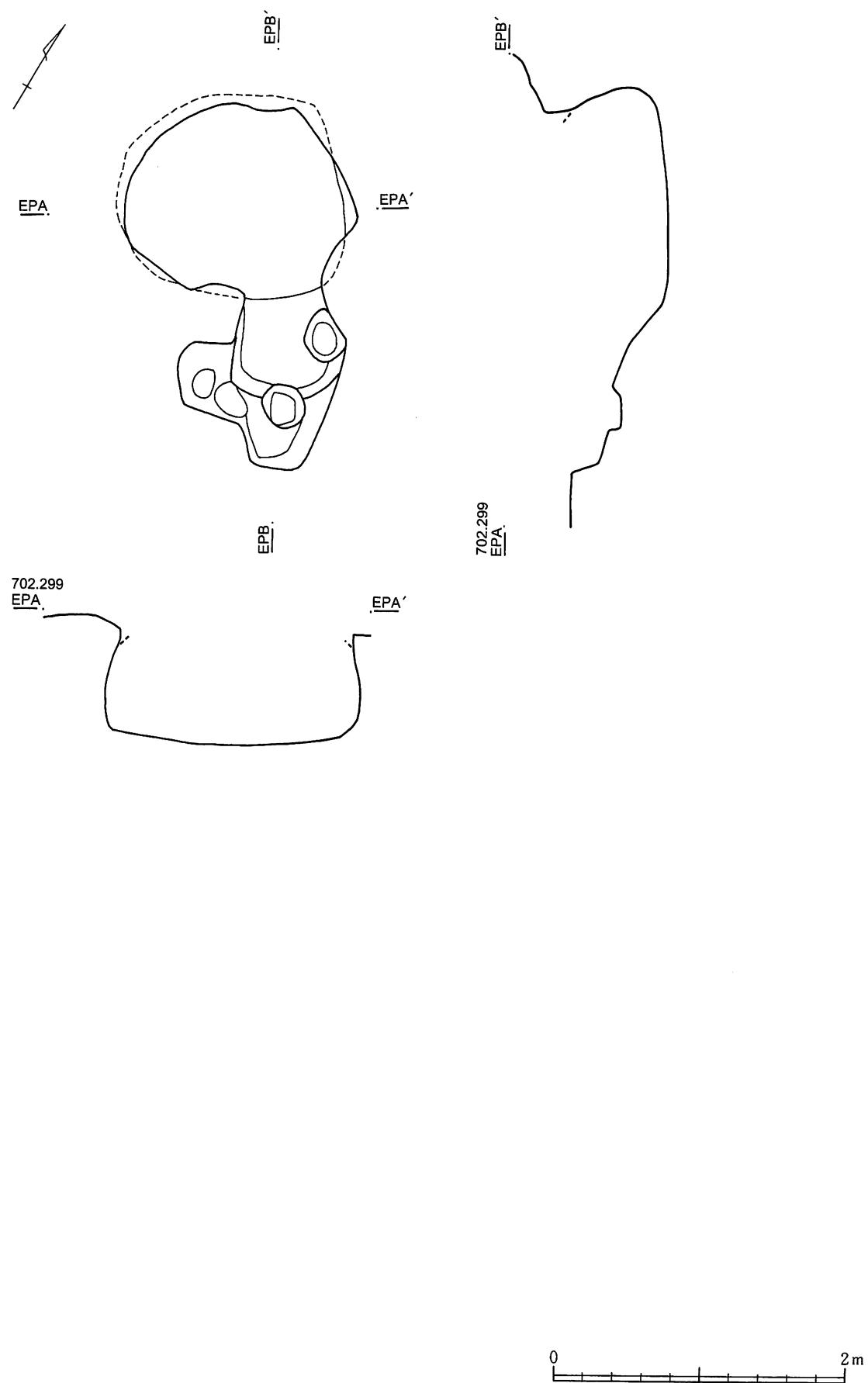
8号地下式土壤



15号地下式土壤

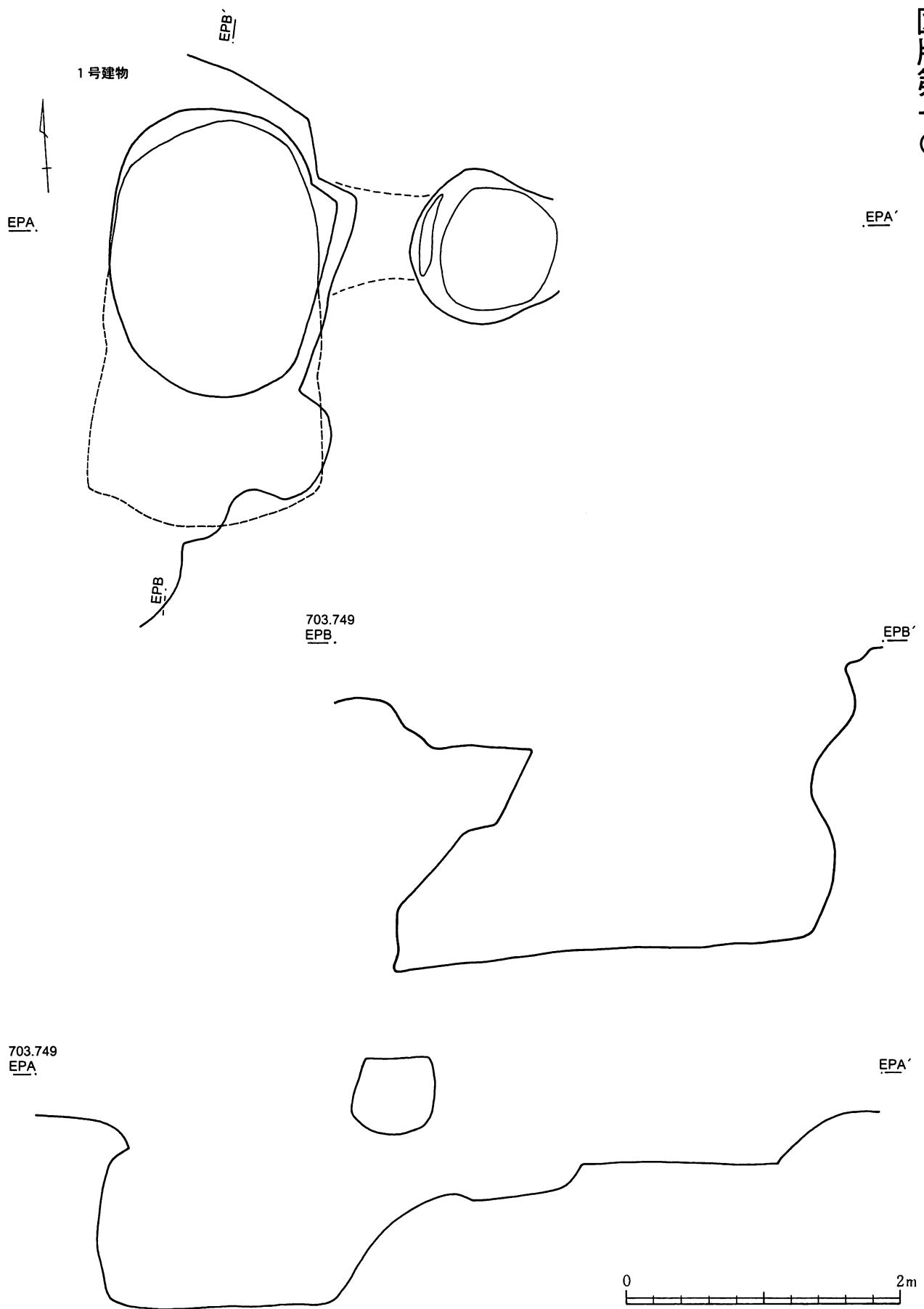


8・15号地下式土壤断面図

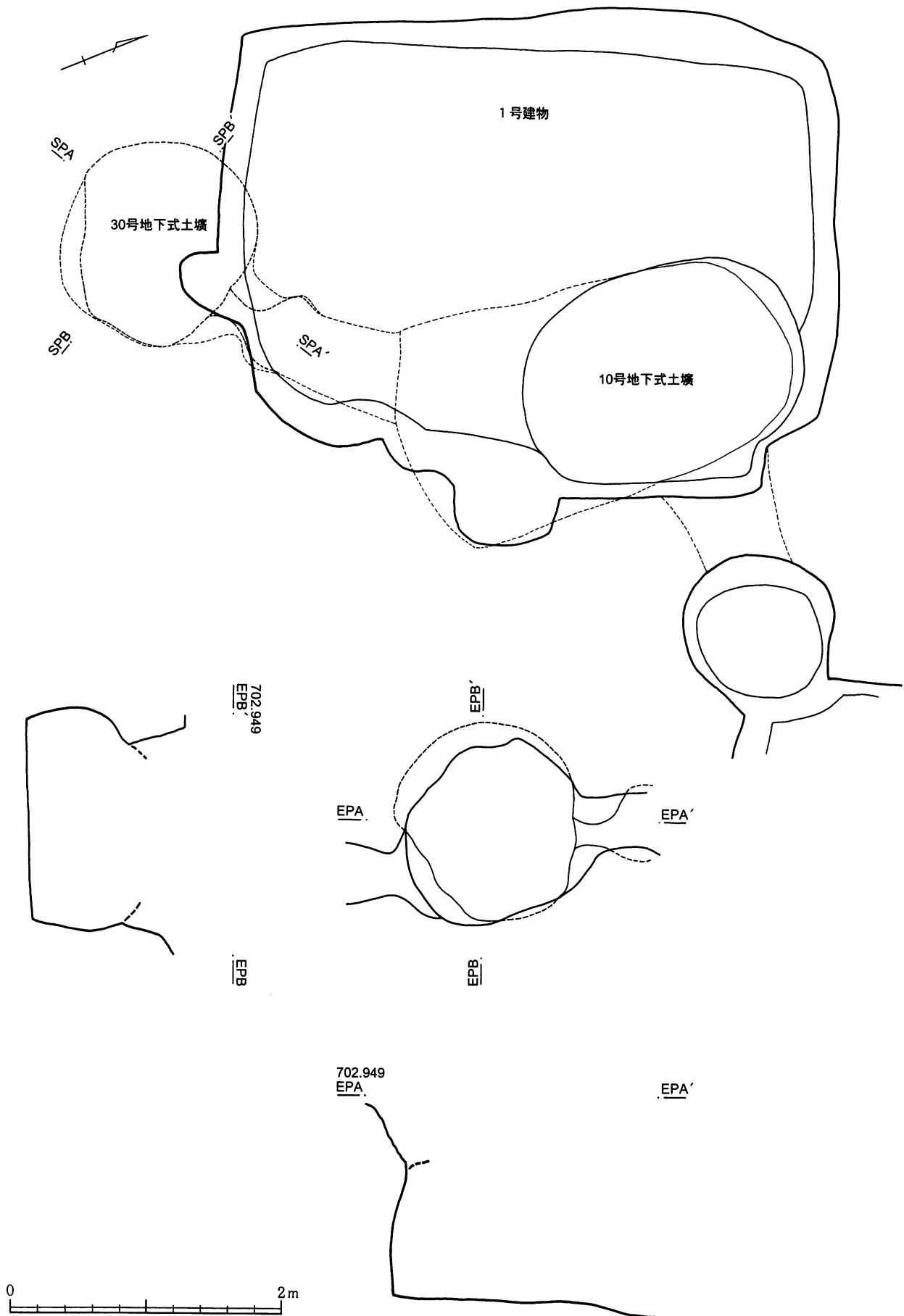


9号地下式土壤平面・断面図

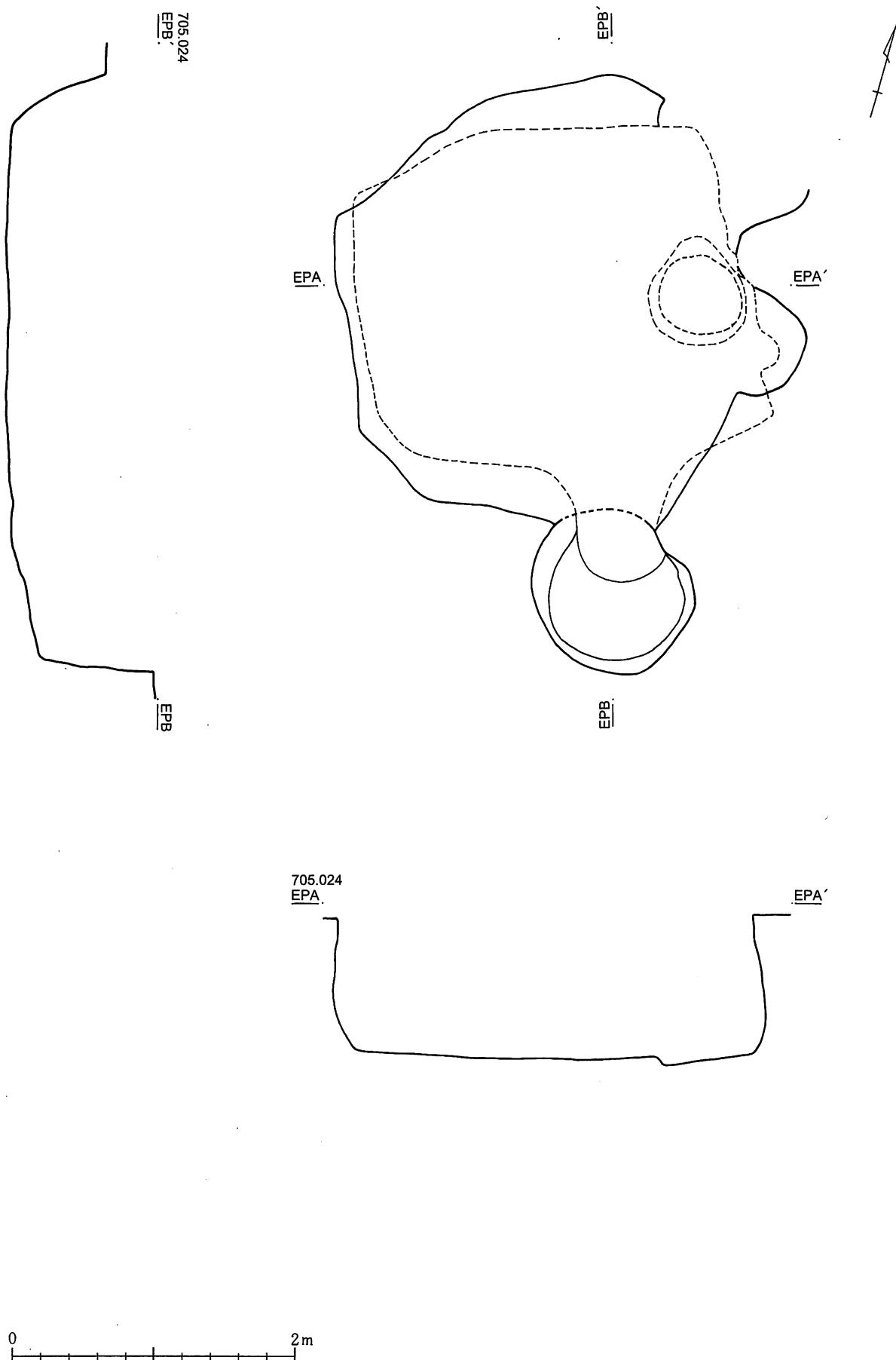
図版第10



10号地下式土壤平面・断面図

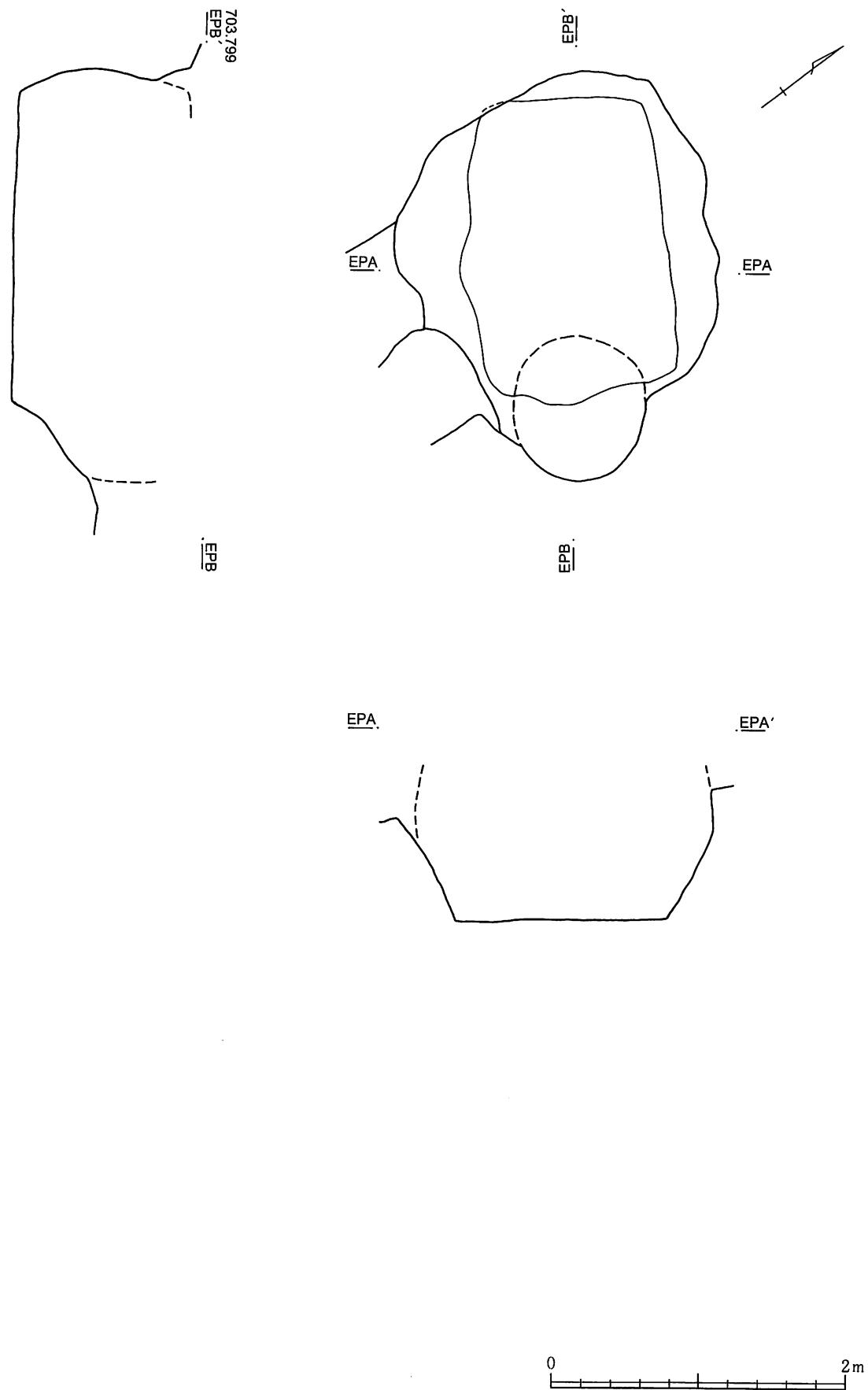


30号地下式土壤位置・平面・断面図



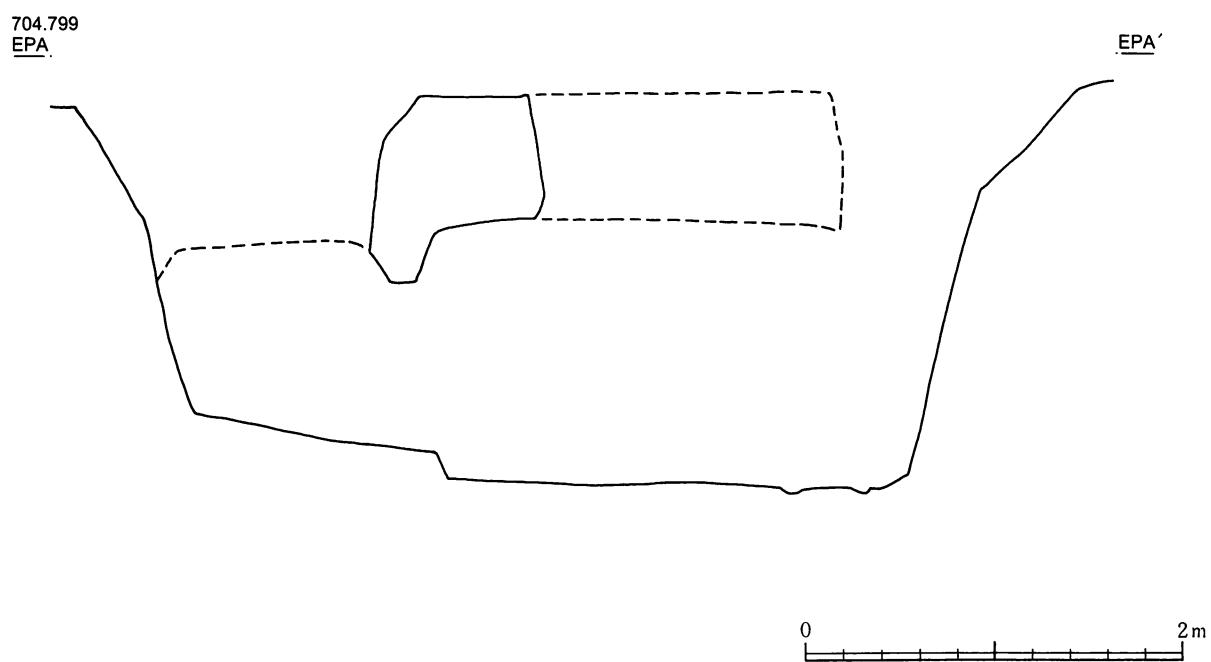
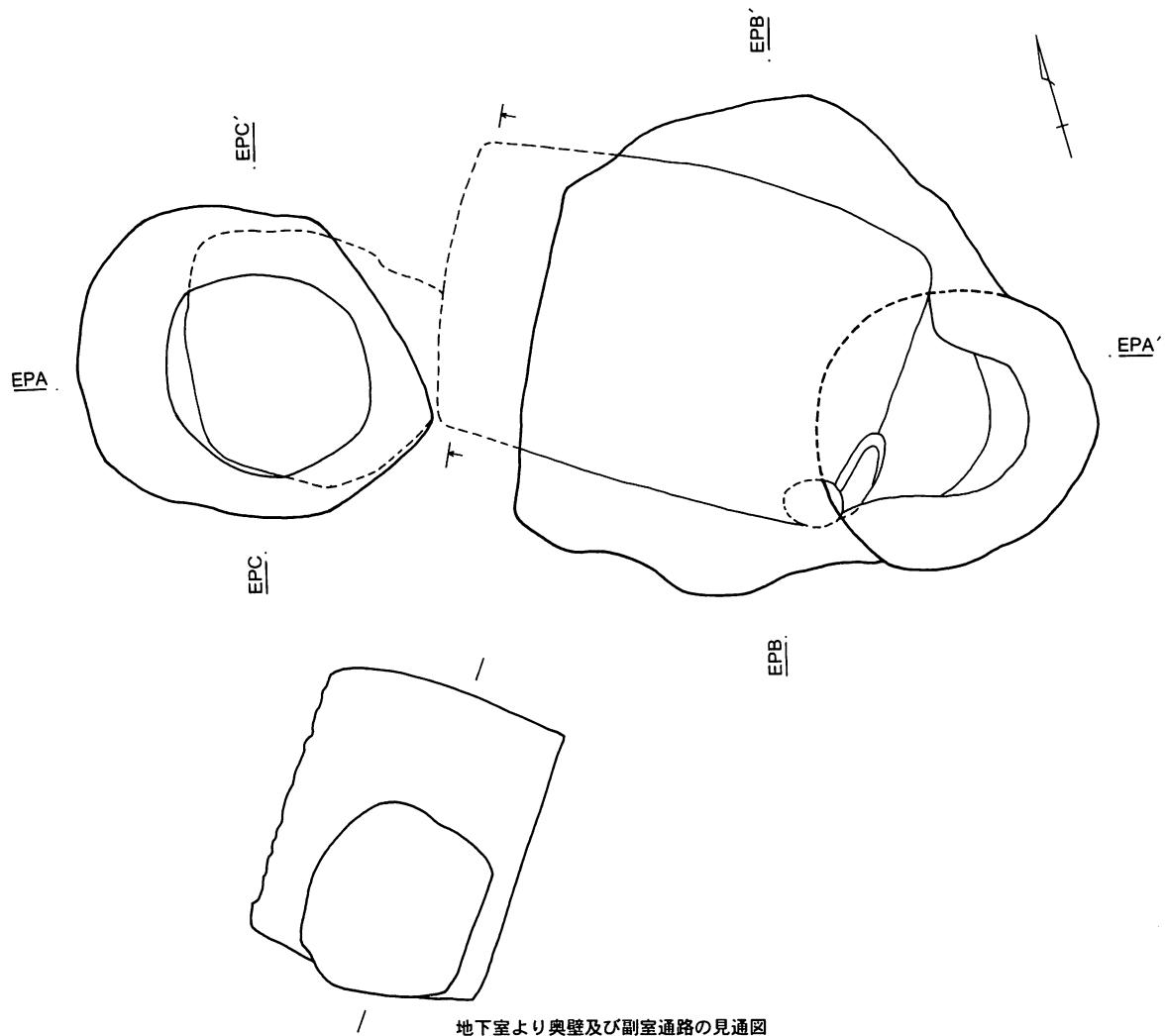
11号地下式土壤平面・断面図

図版第一三



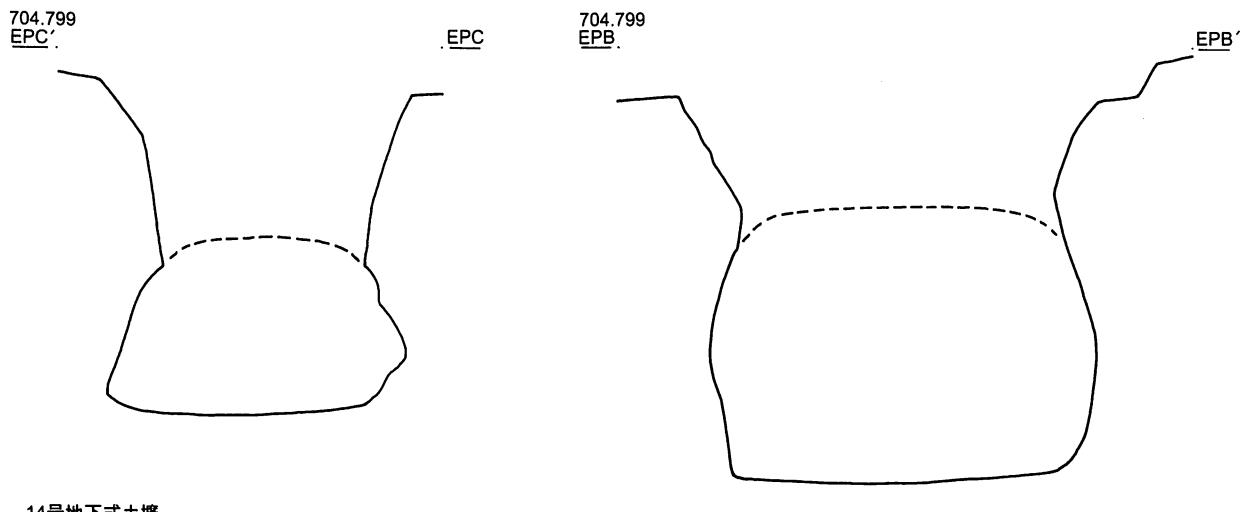
12号地下式土壤平面・断面図

図一断面図

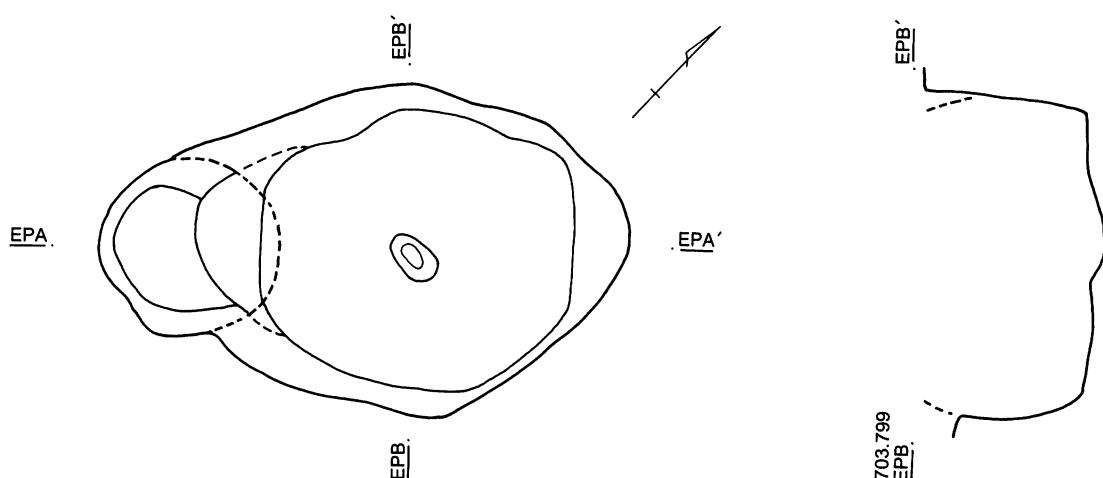


14号地下式土壤平面・断面図

圖版第一五



14号地下式土壤

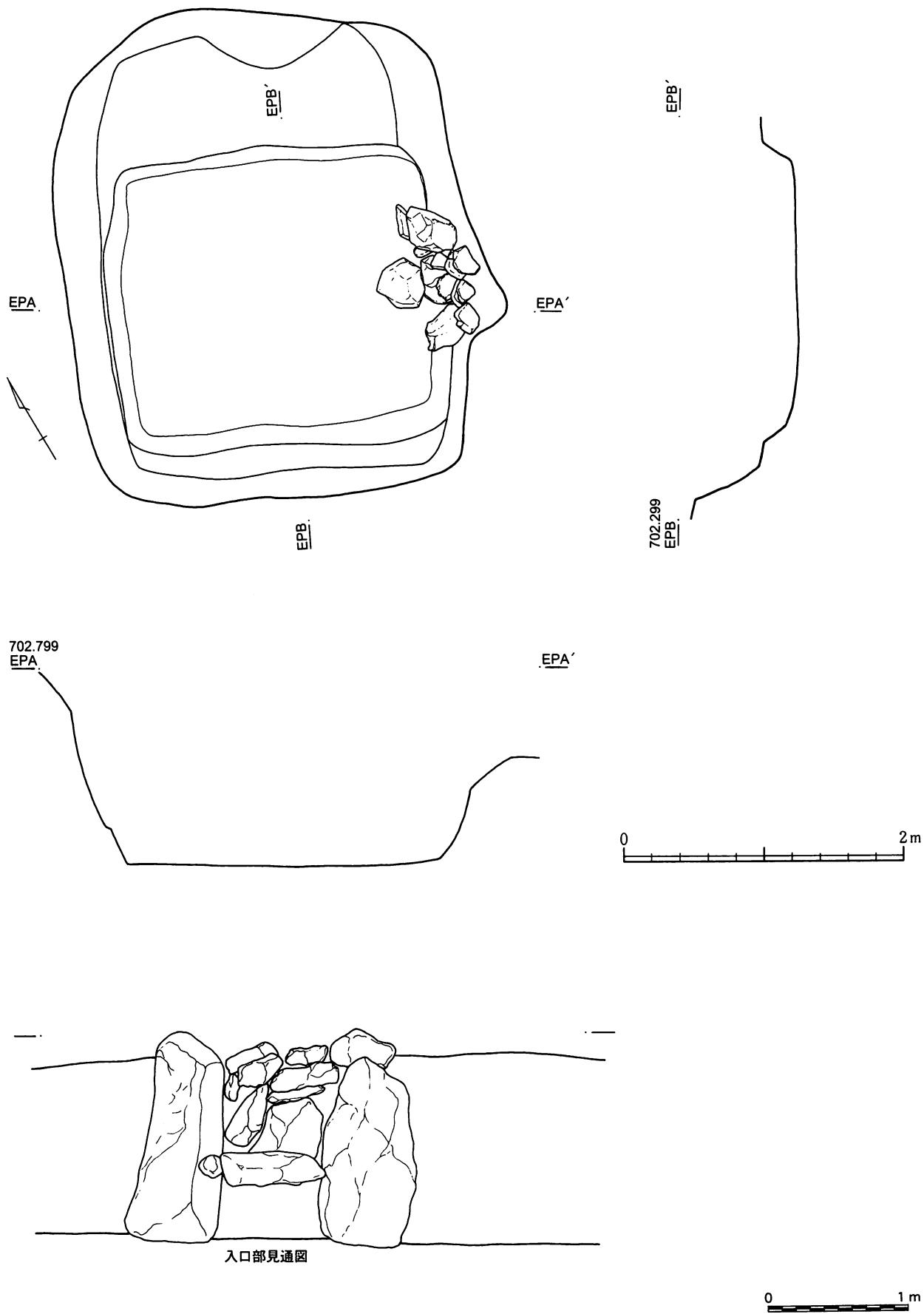


16号地下式土壤



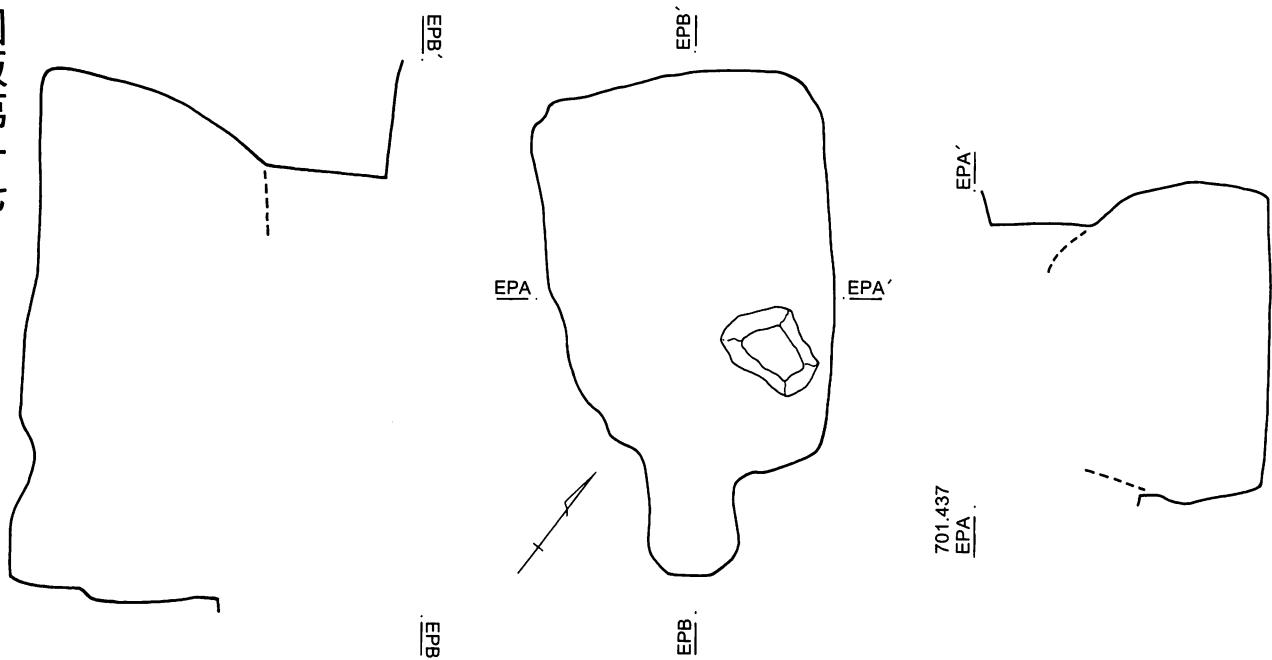
14号地下式土壤断面図、16号地下式土壤平面・断面図

図版第一六

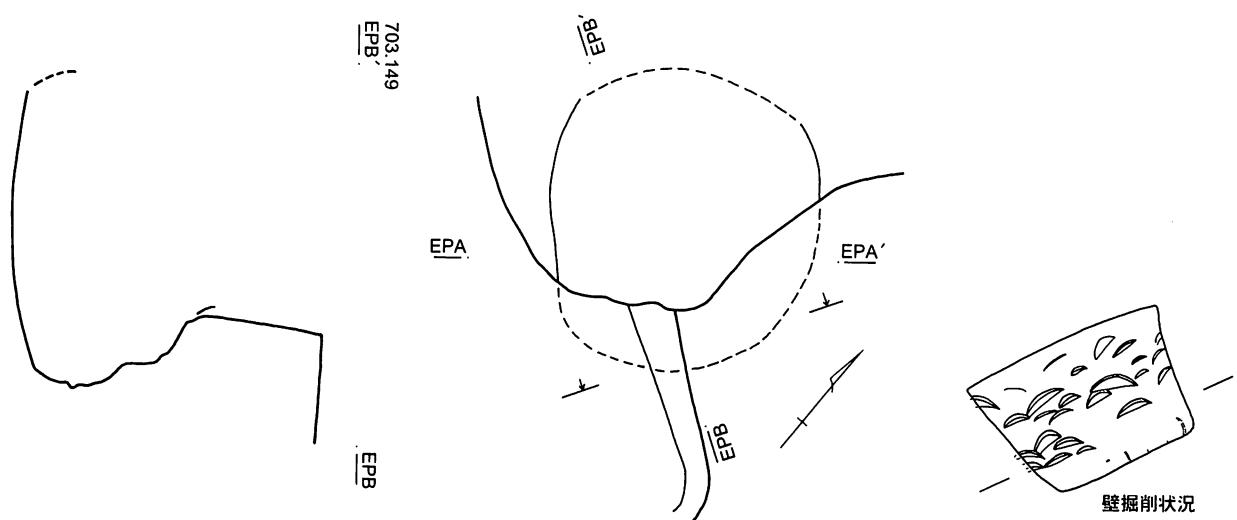


17号地下式土壤平面・断面及び入口部施設見通図

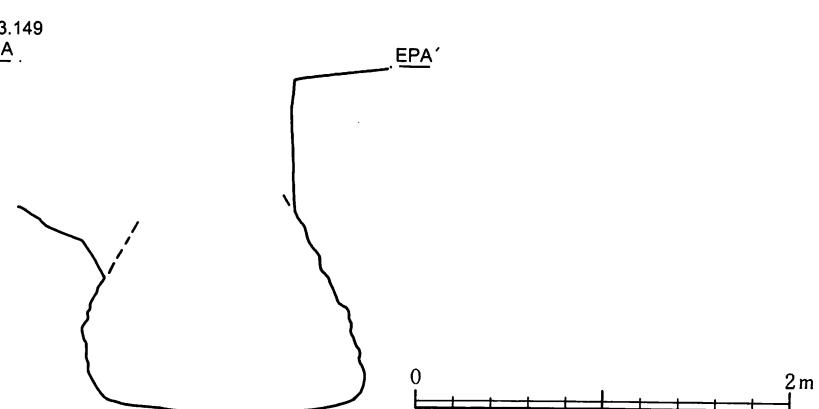
圖版第一十七



26地号下式土壤

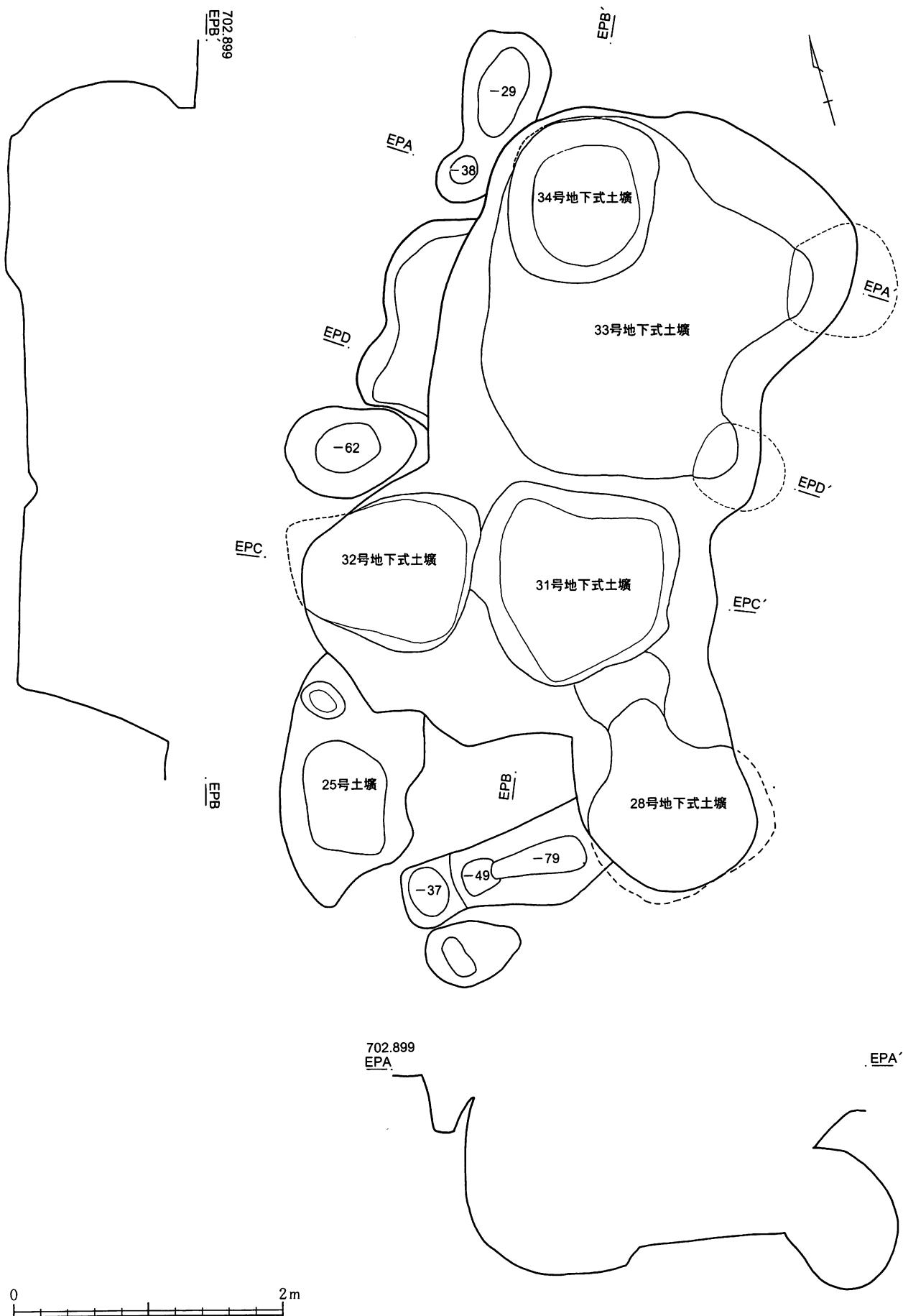


27号地下式土壤



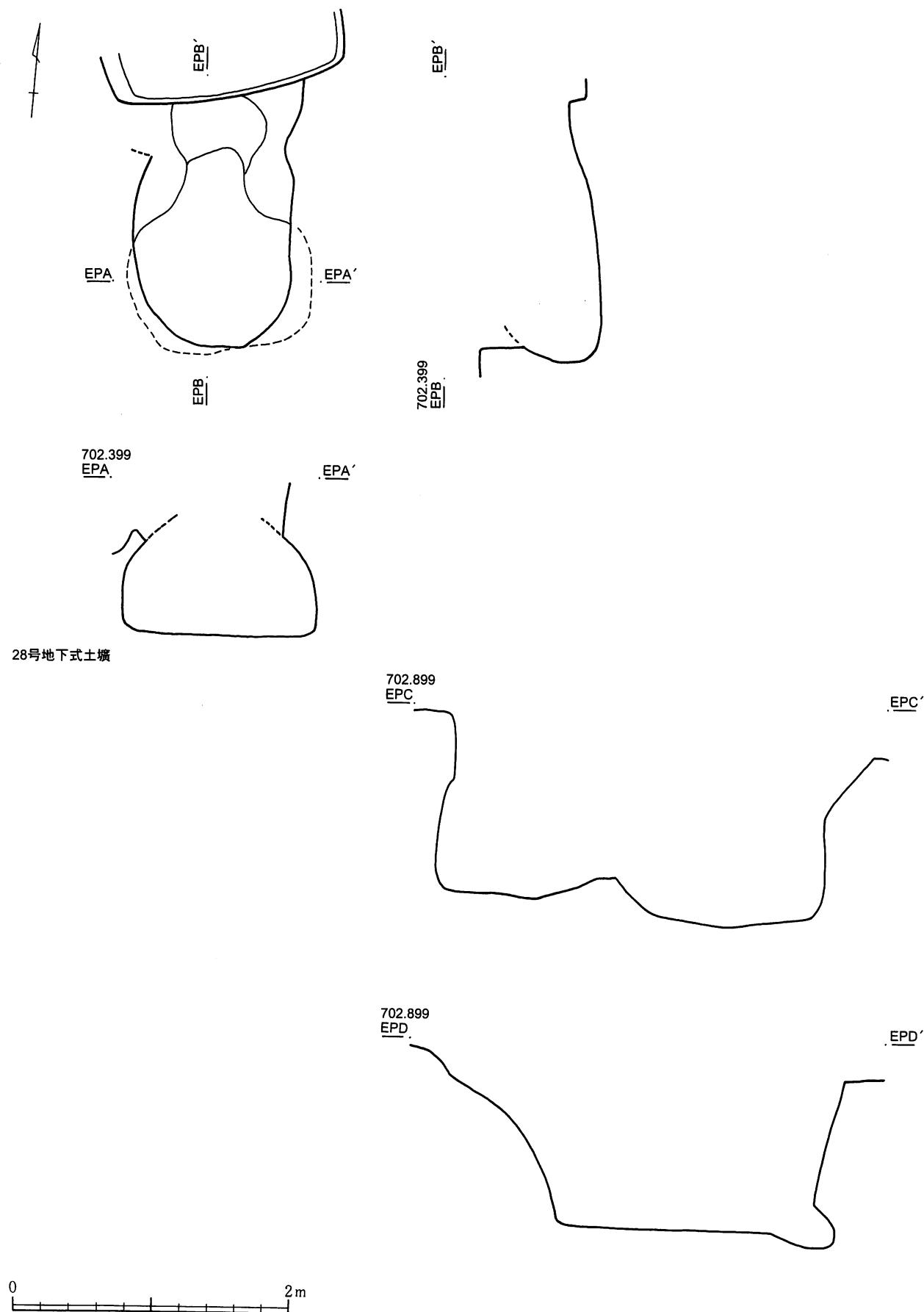
26・27号地下式土壤平面・断面図

図版第一八

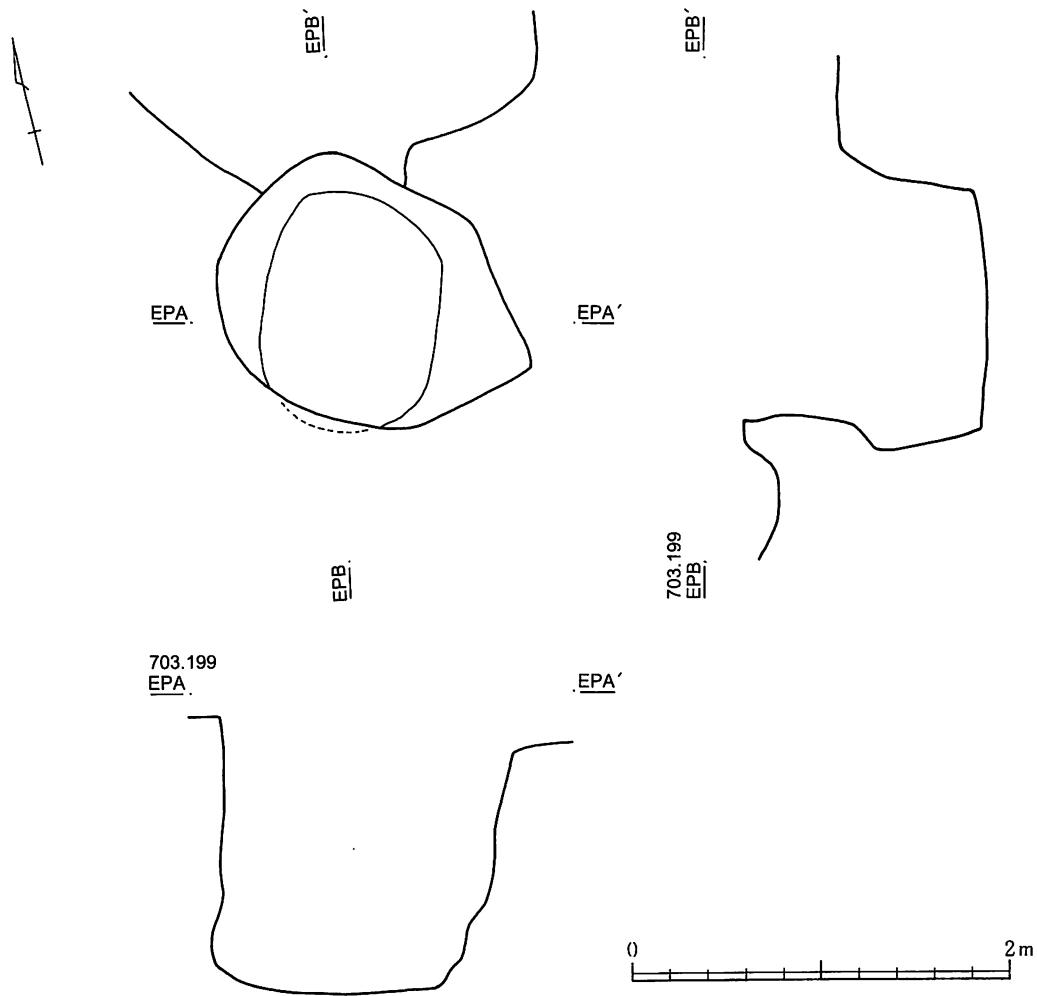


28・31～34号地下式土壤平面・断面図

図版第一九

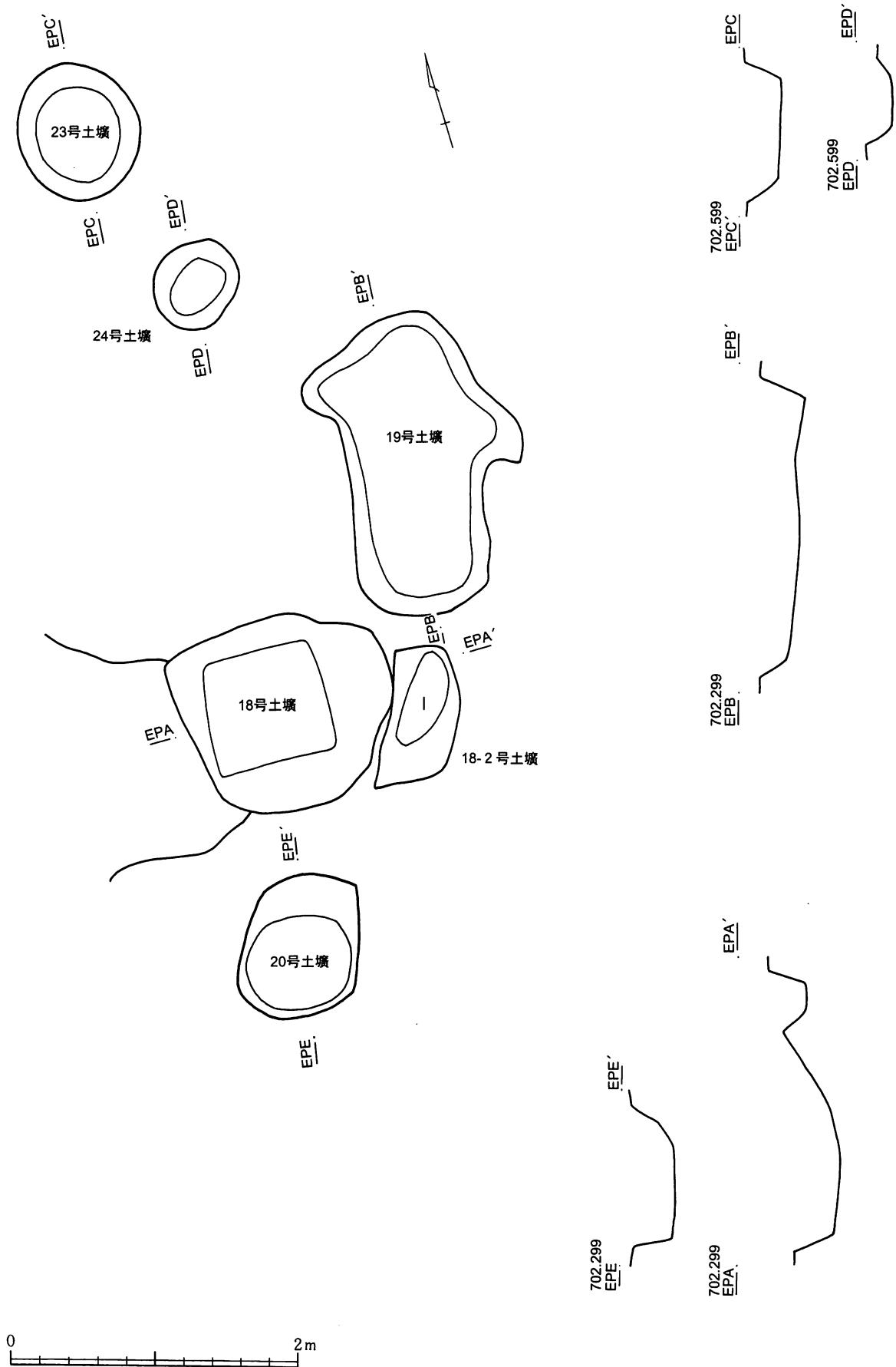


28号地下式土壤平面・断面図、31~33号地下式土壤断面図

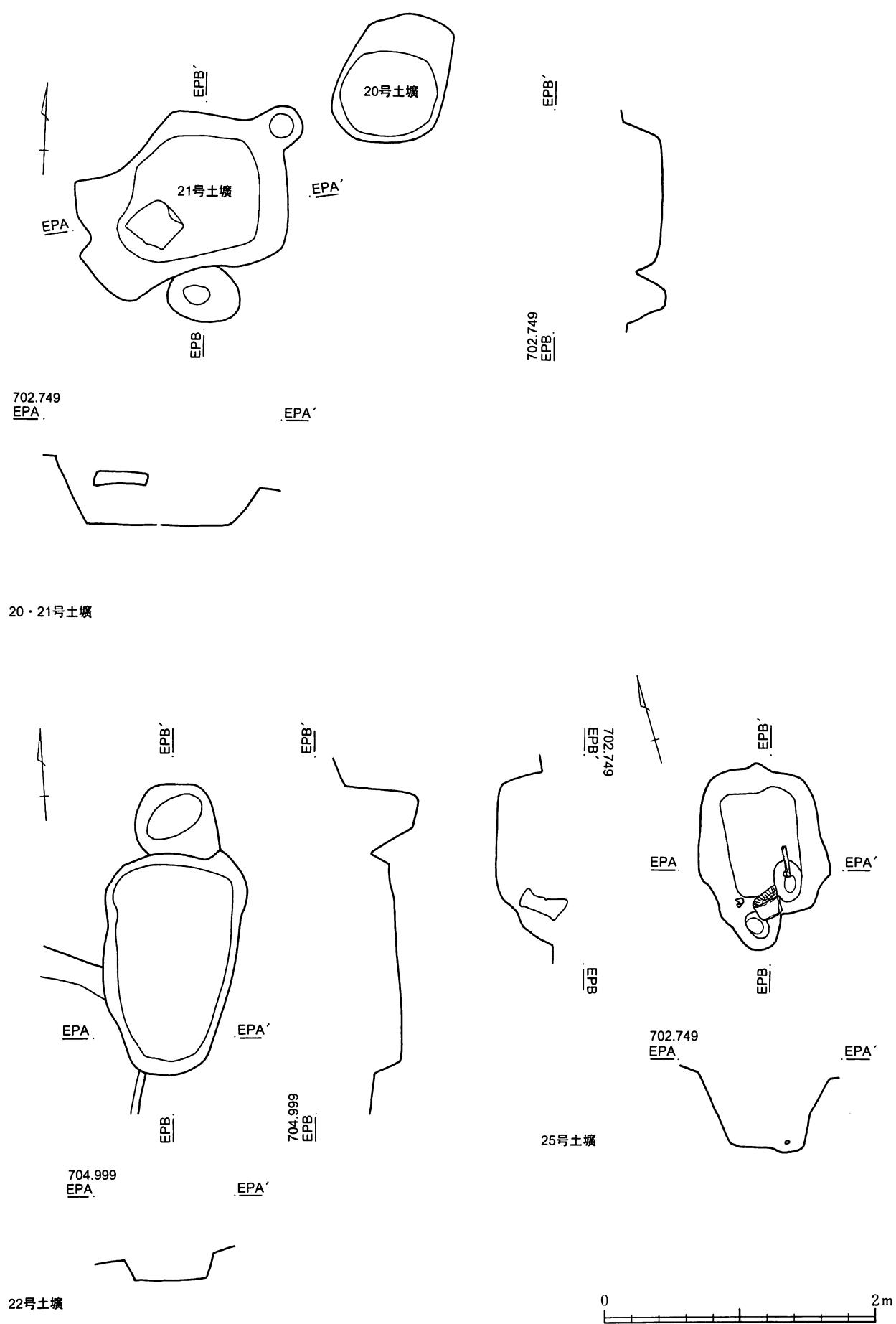


13号土壤平面・断面図

図版第11

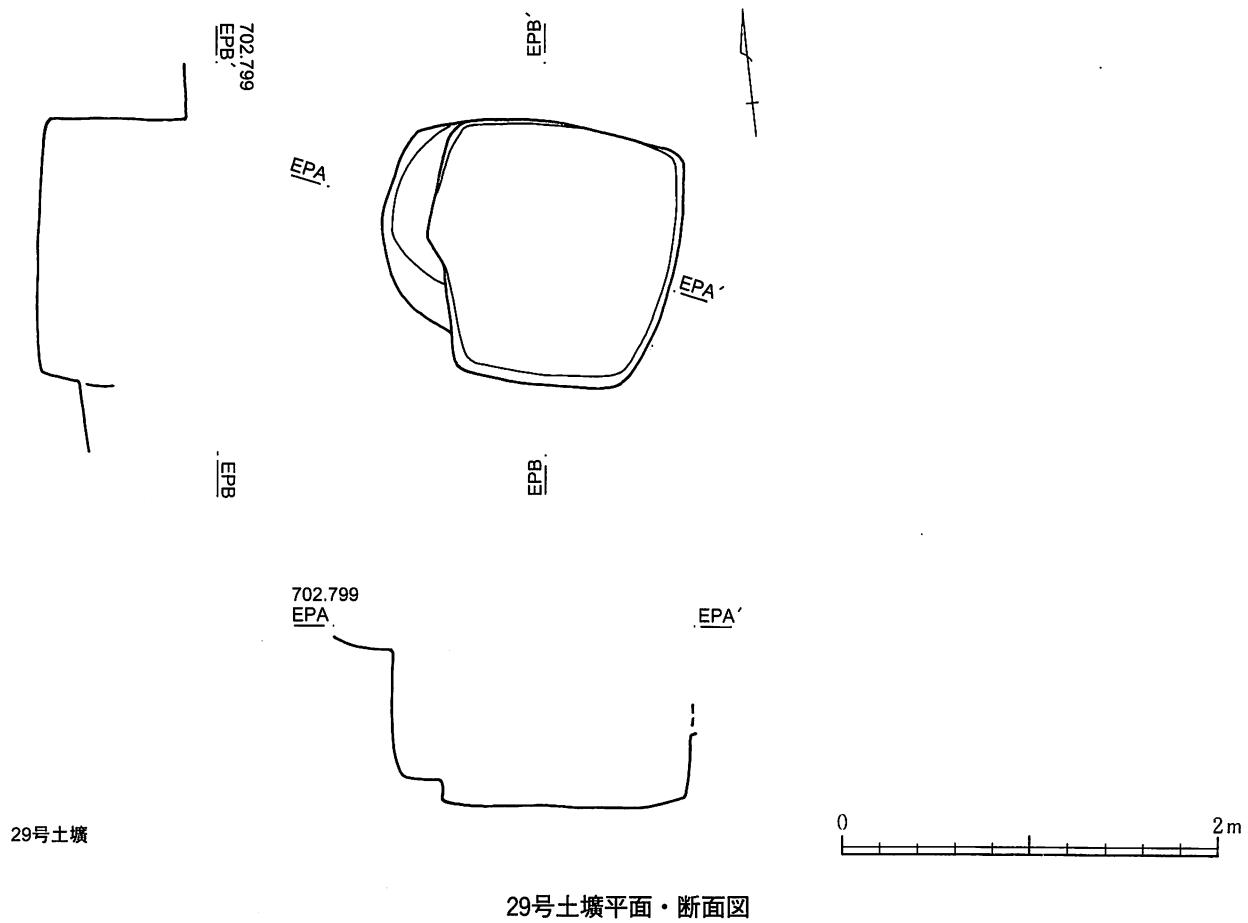


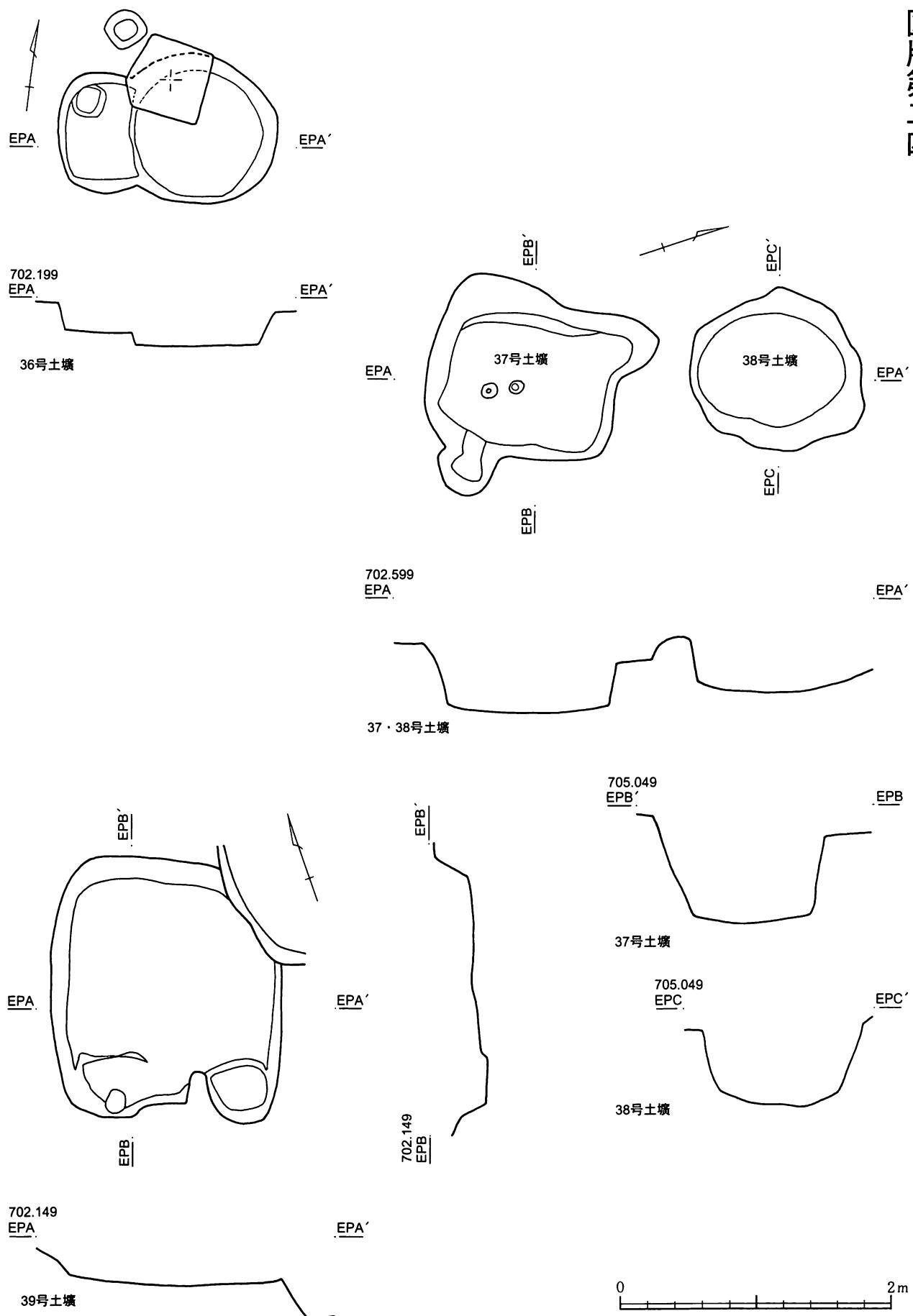
18~20・23・24号土壤平面・断面図



20・21・22・25号土壤平面・断面図

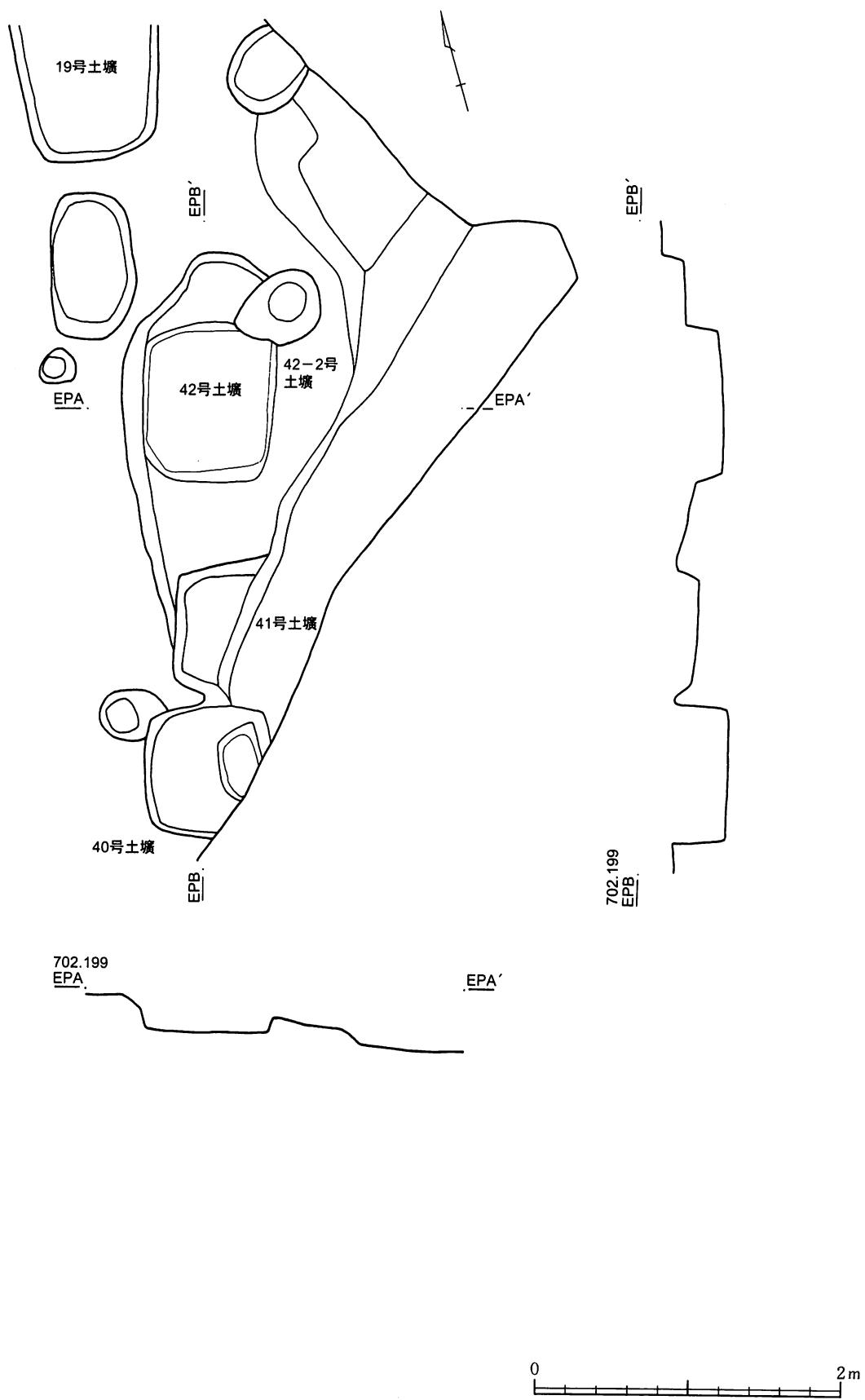
図版第一三





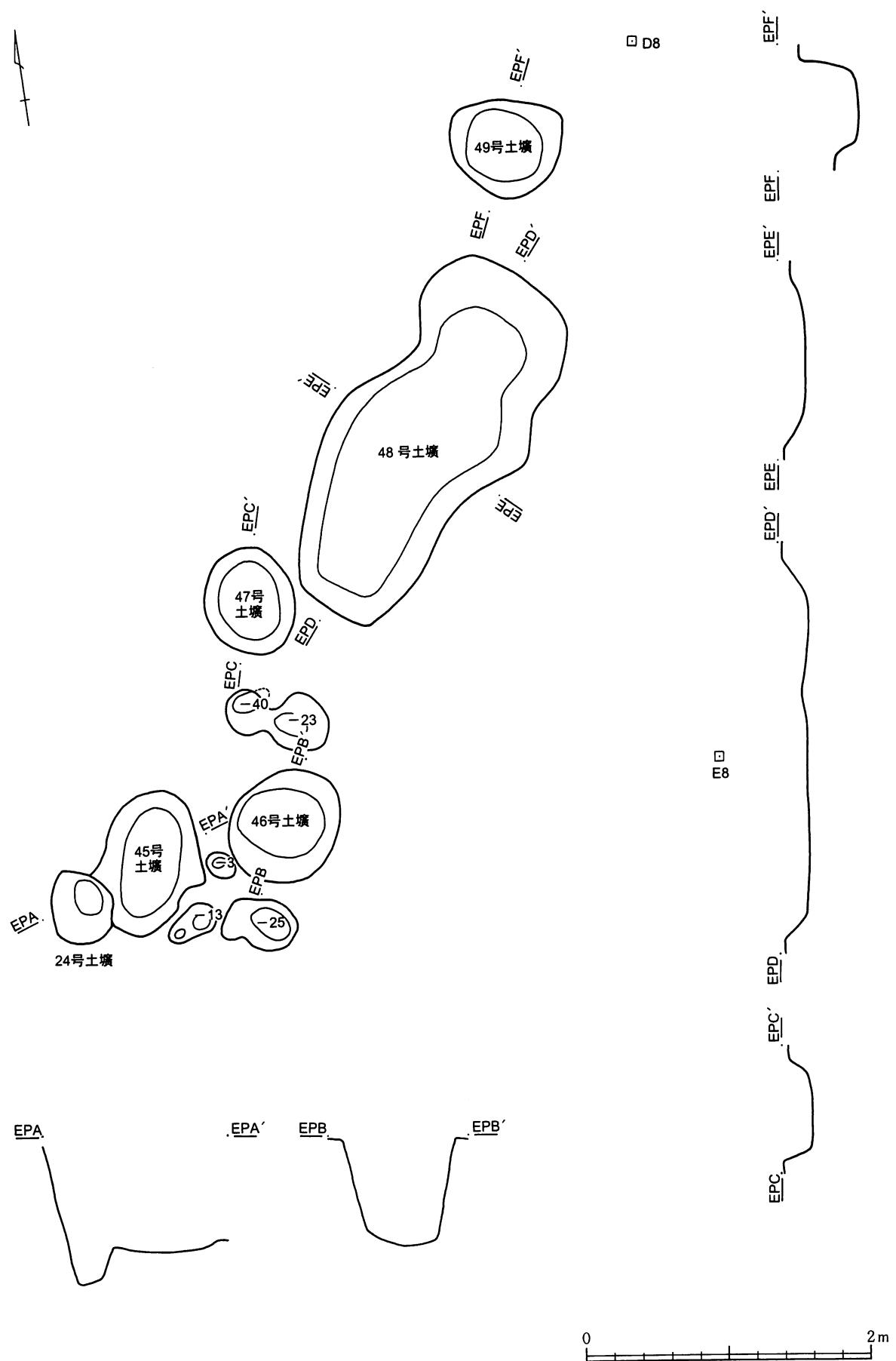
36・37・38・39号土壤平面・断面図

図版第一五



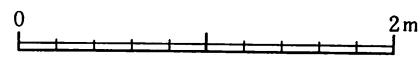
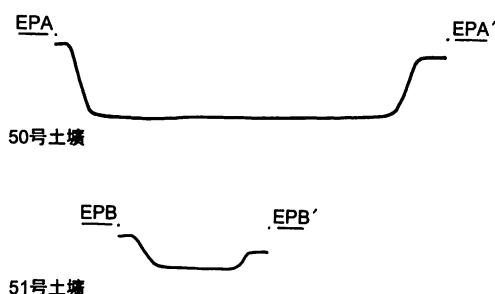
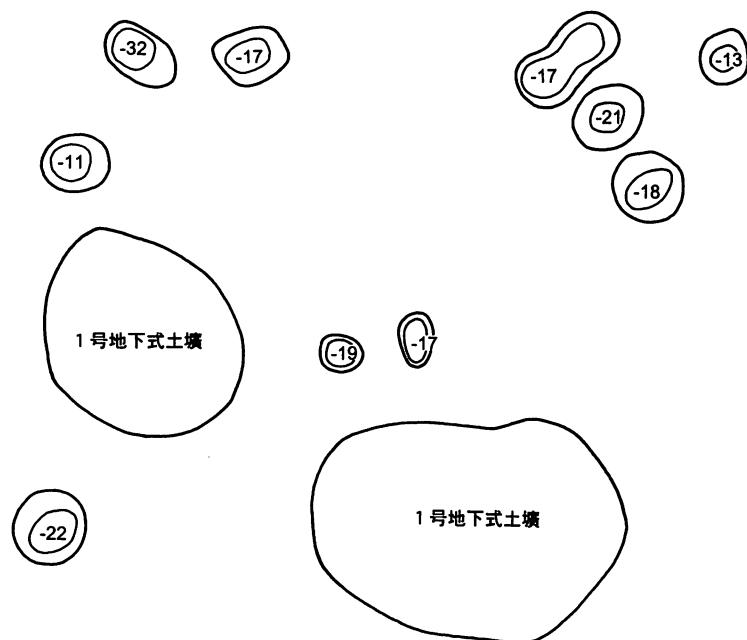
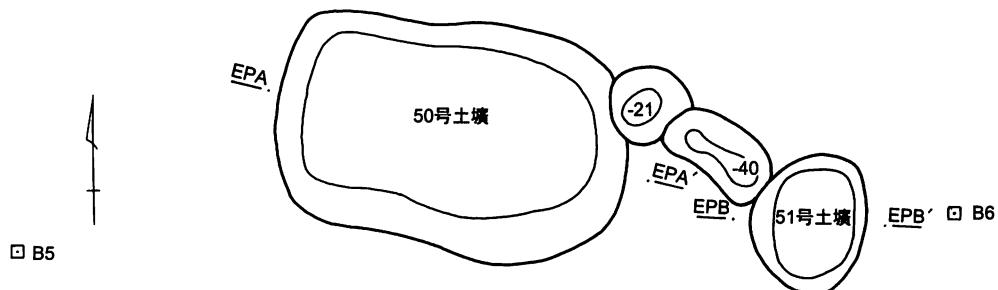
40・41・42・42-2号土壤

図版第十六

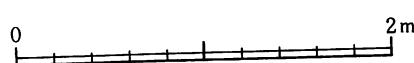
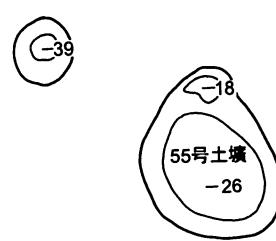
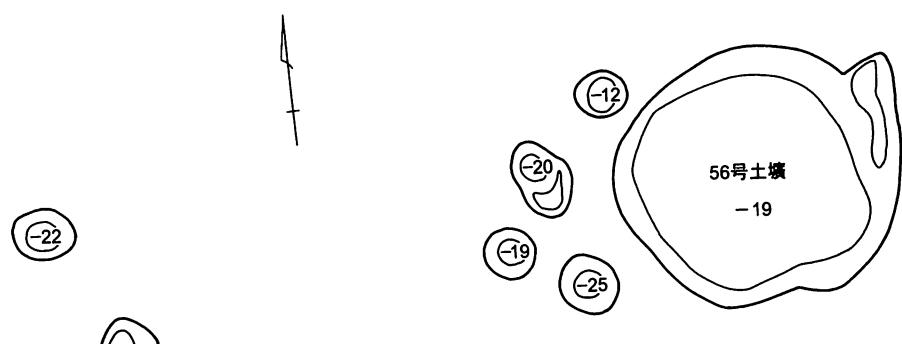
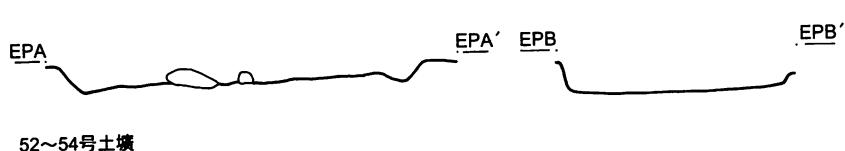
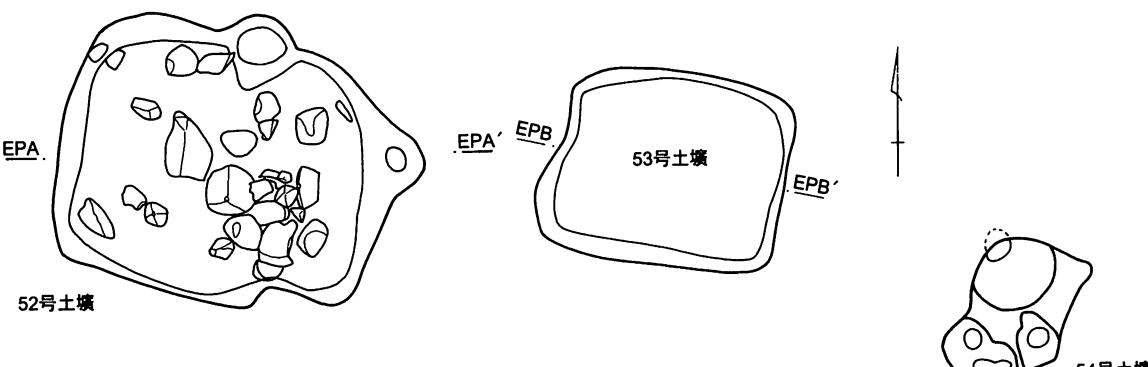


24・45・46・47・48・49号土壤

図版第二七

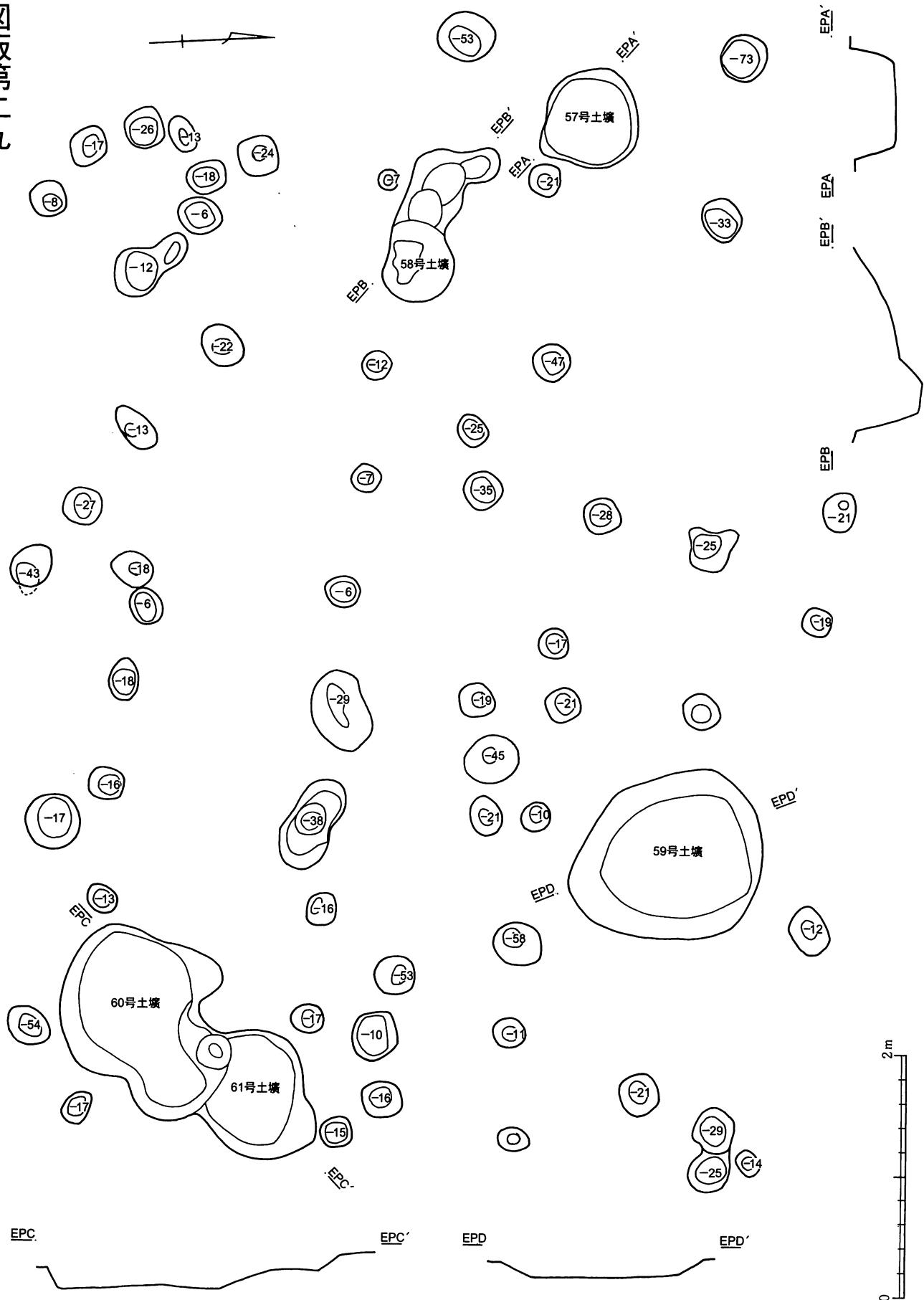


50・51号土壤平面・断面図

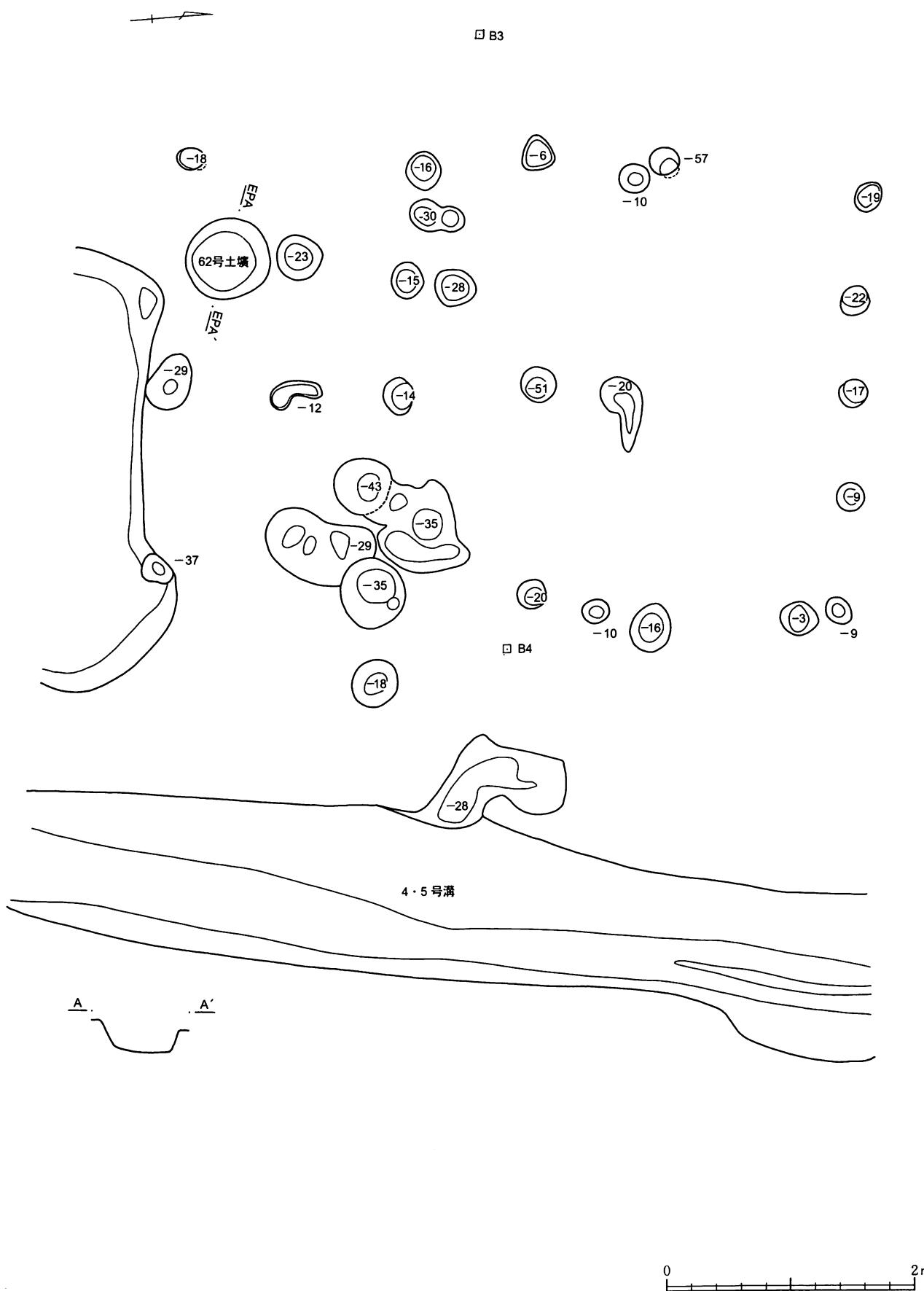


52~56号土壤平面・断面図

図版第二十九

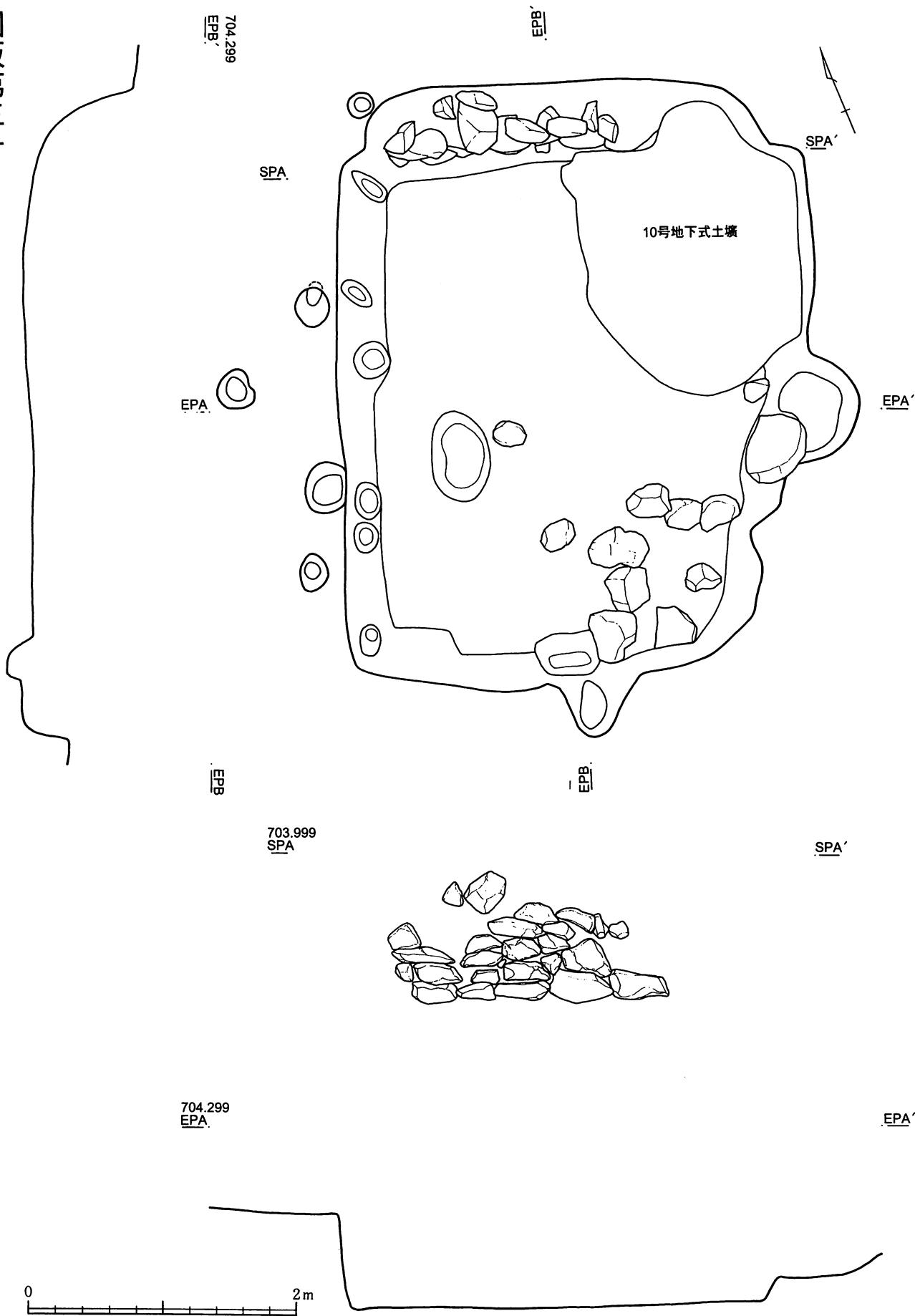


57~61号土壤、桑植樹痕 (1)

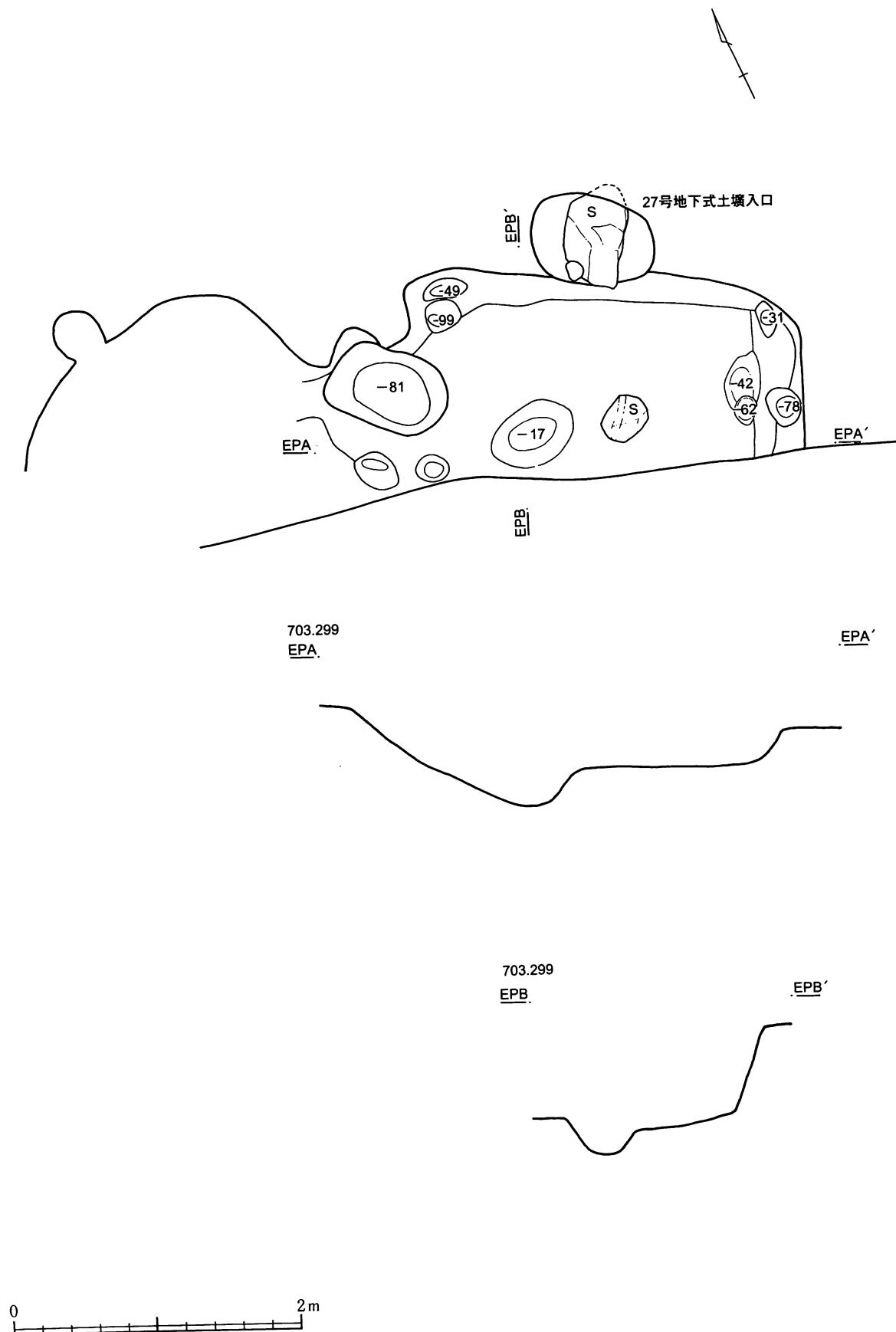


62号土壤、桑植樹痕 (2)

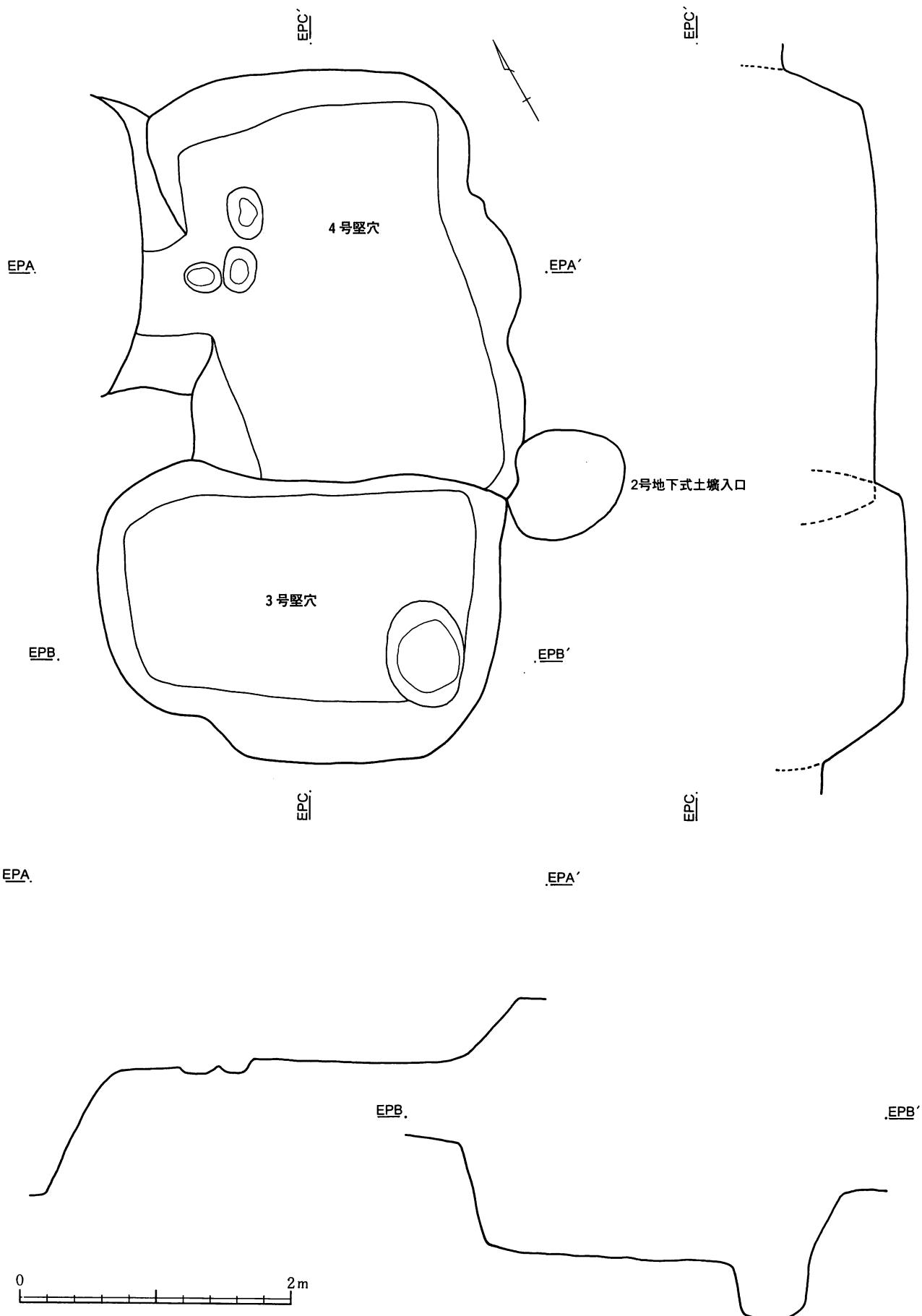
図堅壠III



1号堅穴状建物跡平面・断面図

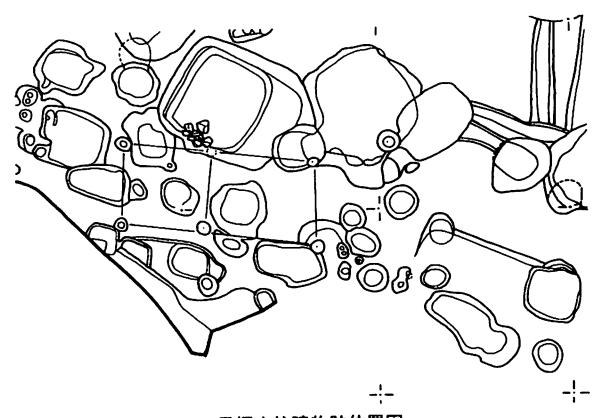


2号堅穴状建物跡平面・断面図

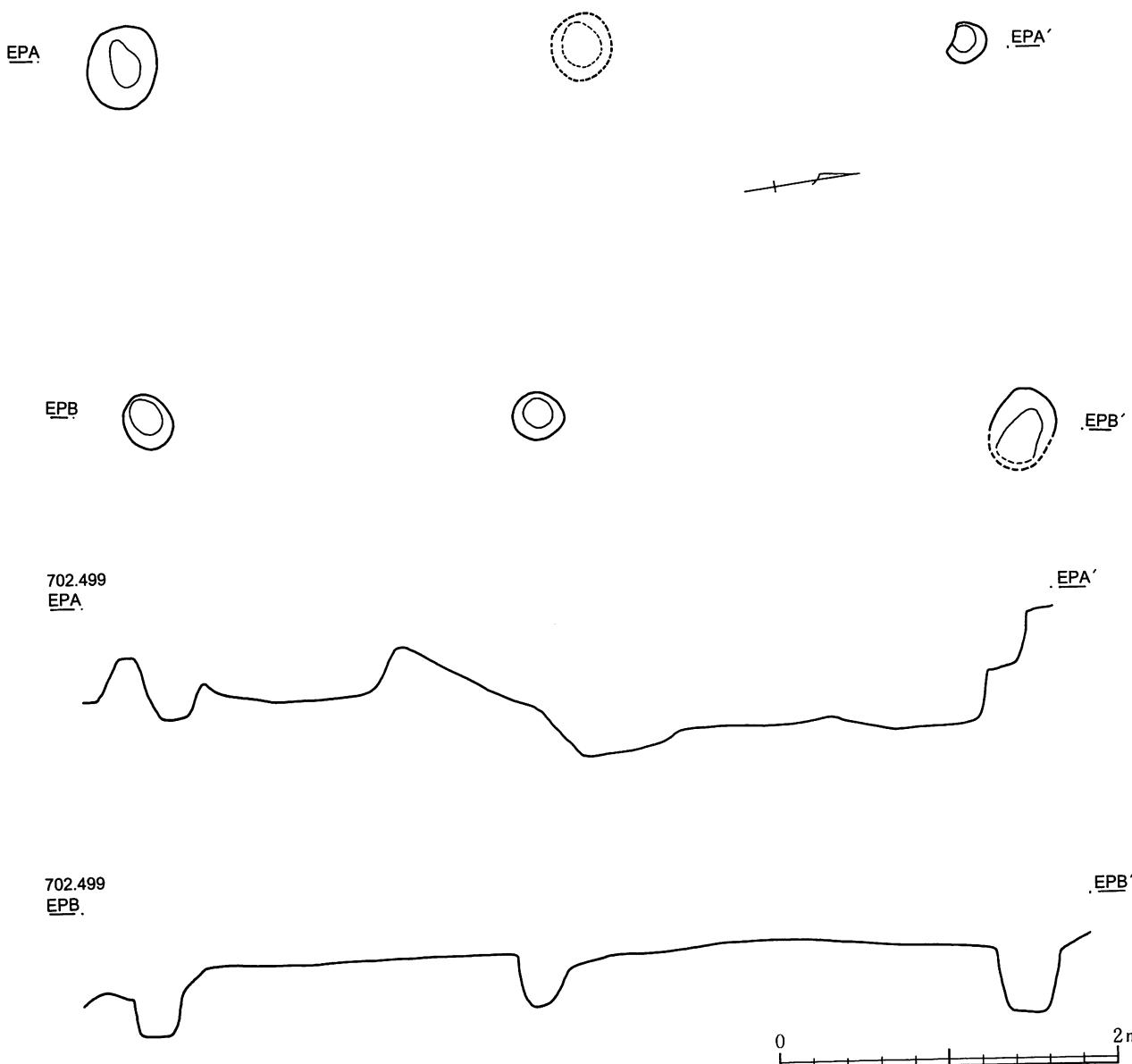


3・4号堅穴状建物跡平面・断面図

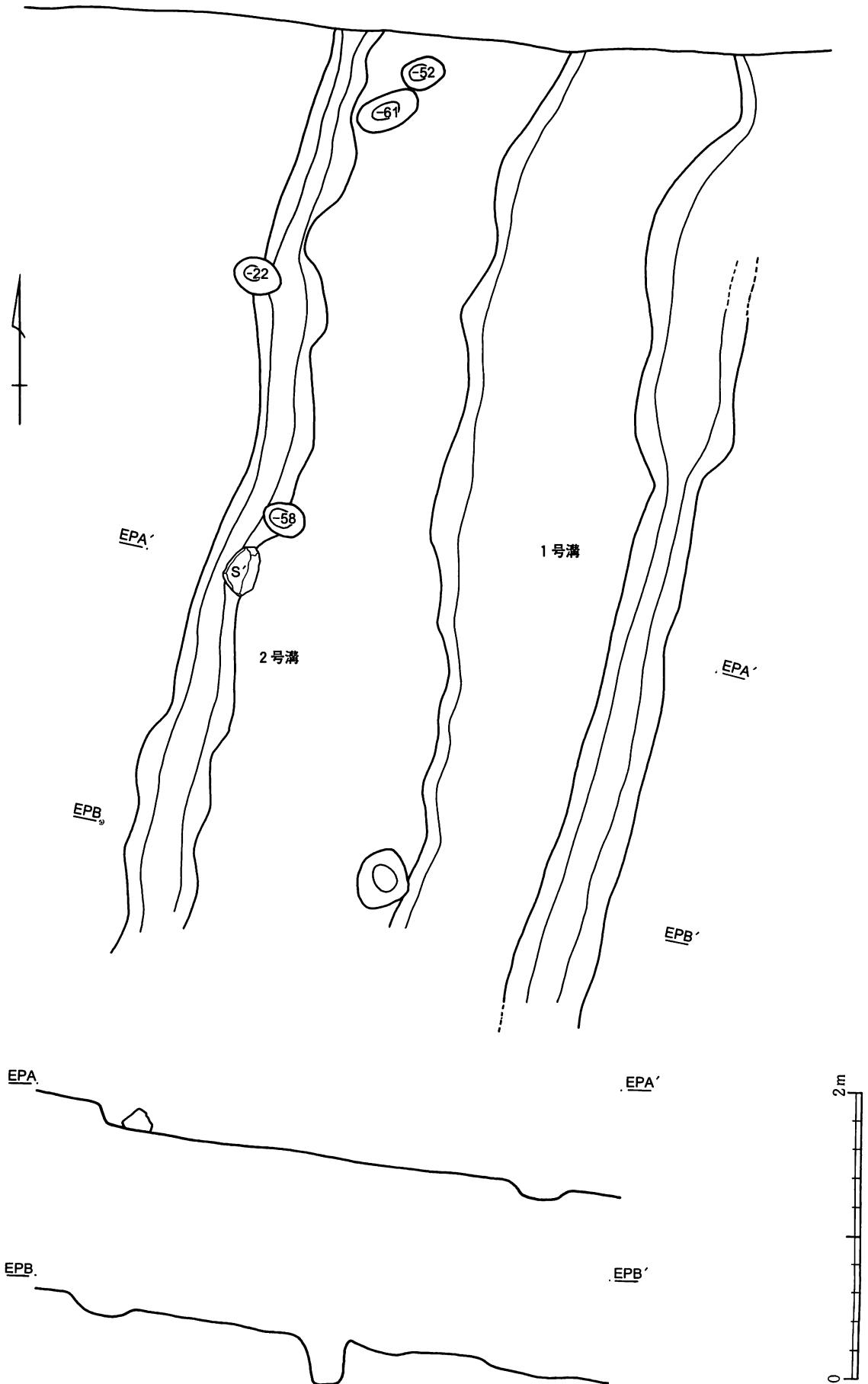
図版第三四



1号掘立柱建物跡位置図

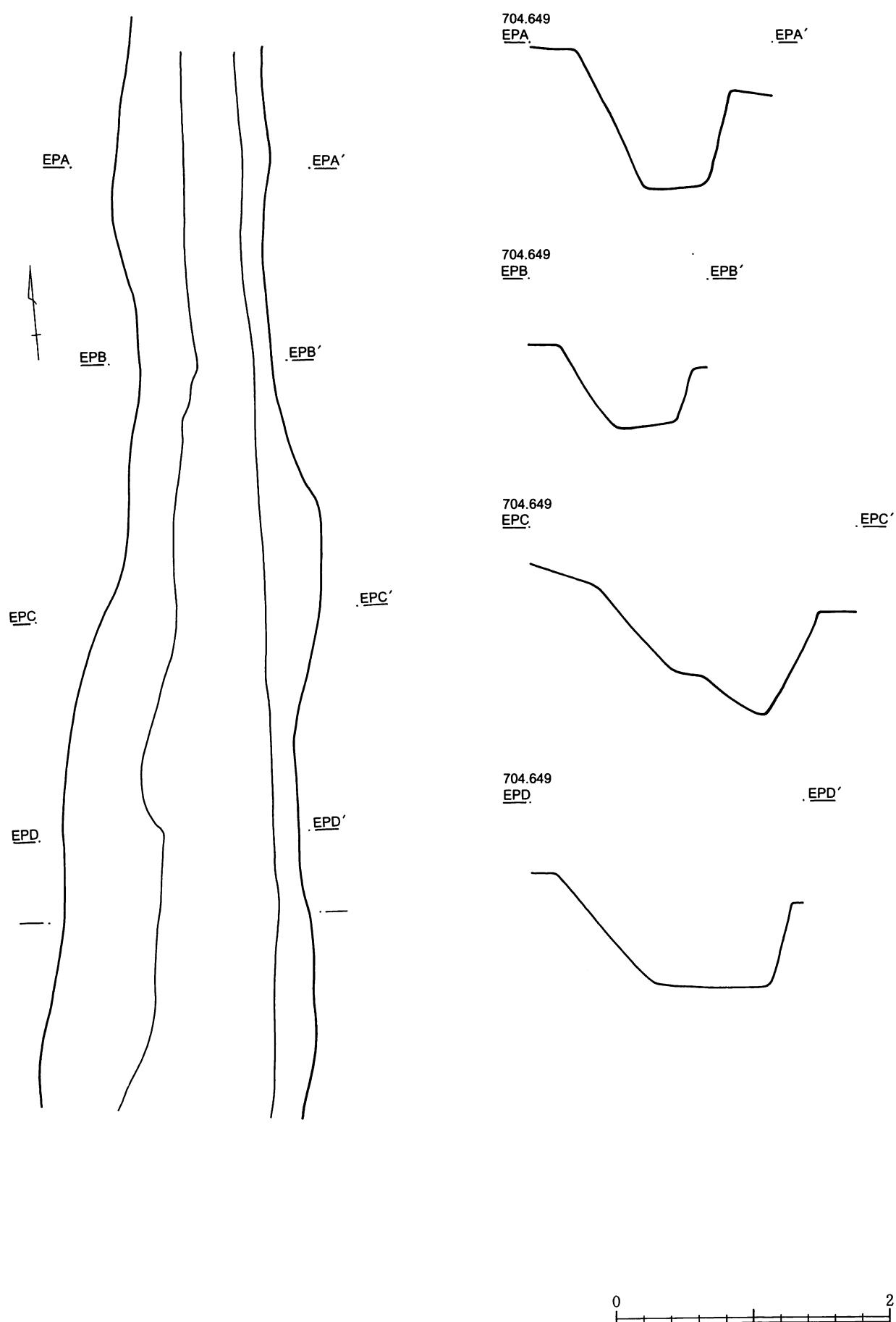


1号掘立柱建物跡平面・断面図

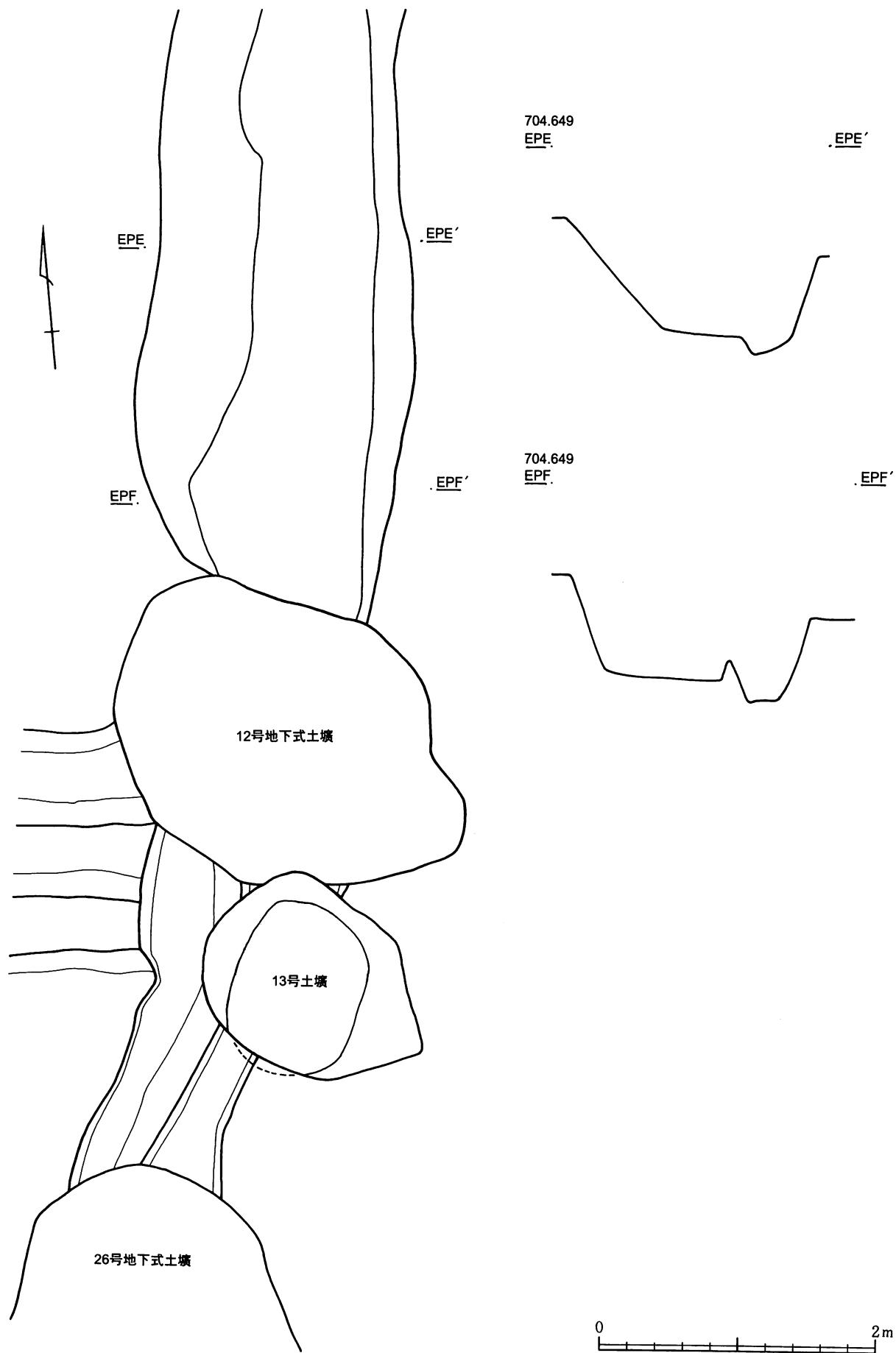


1・2号溝平面・断面図

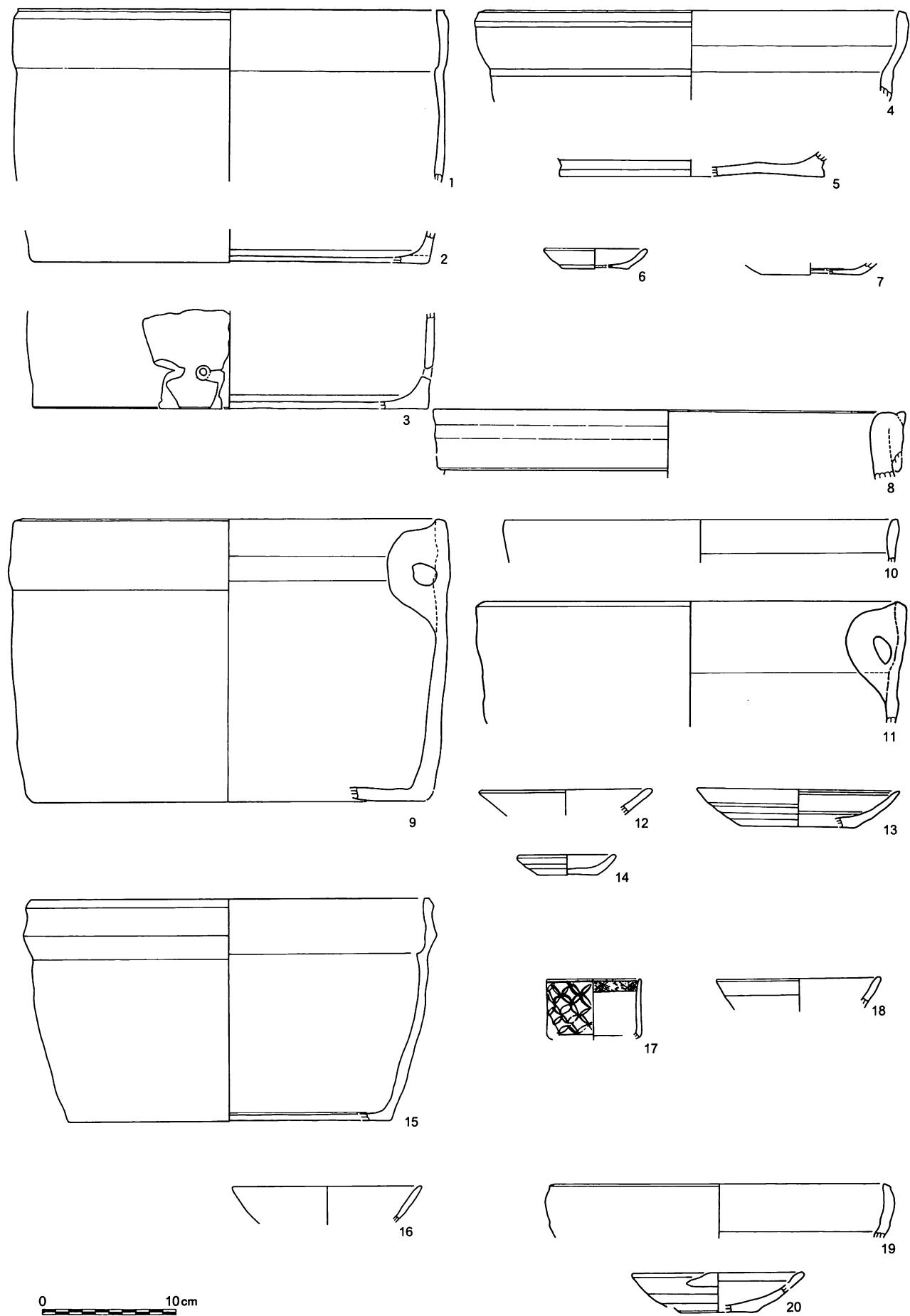
図版第三六



3号溝平面・断面図(1)

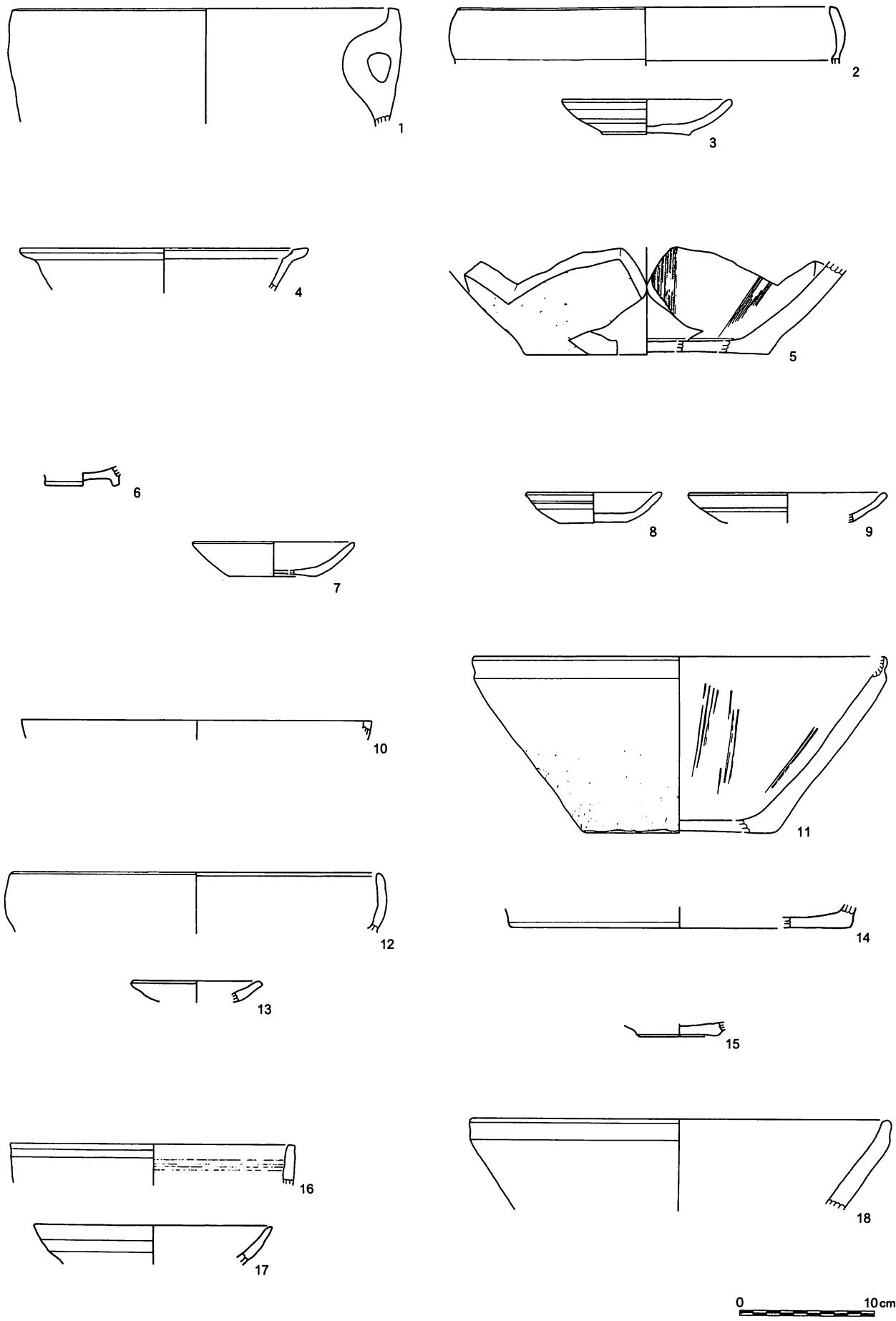


3号溝平面・断面図 (2)



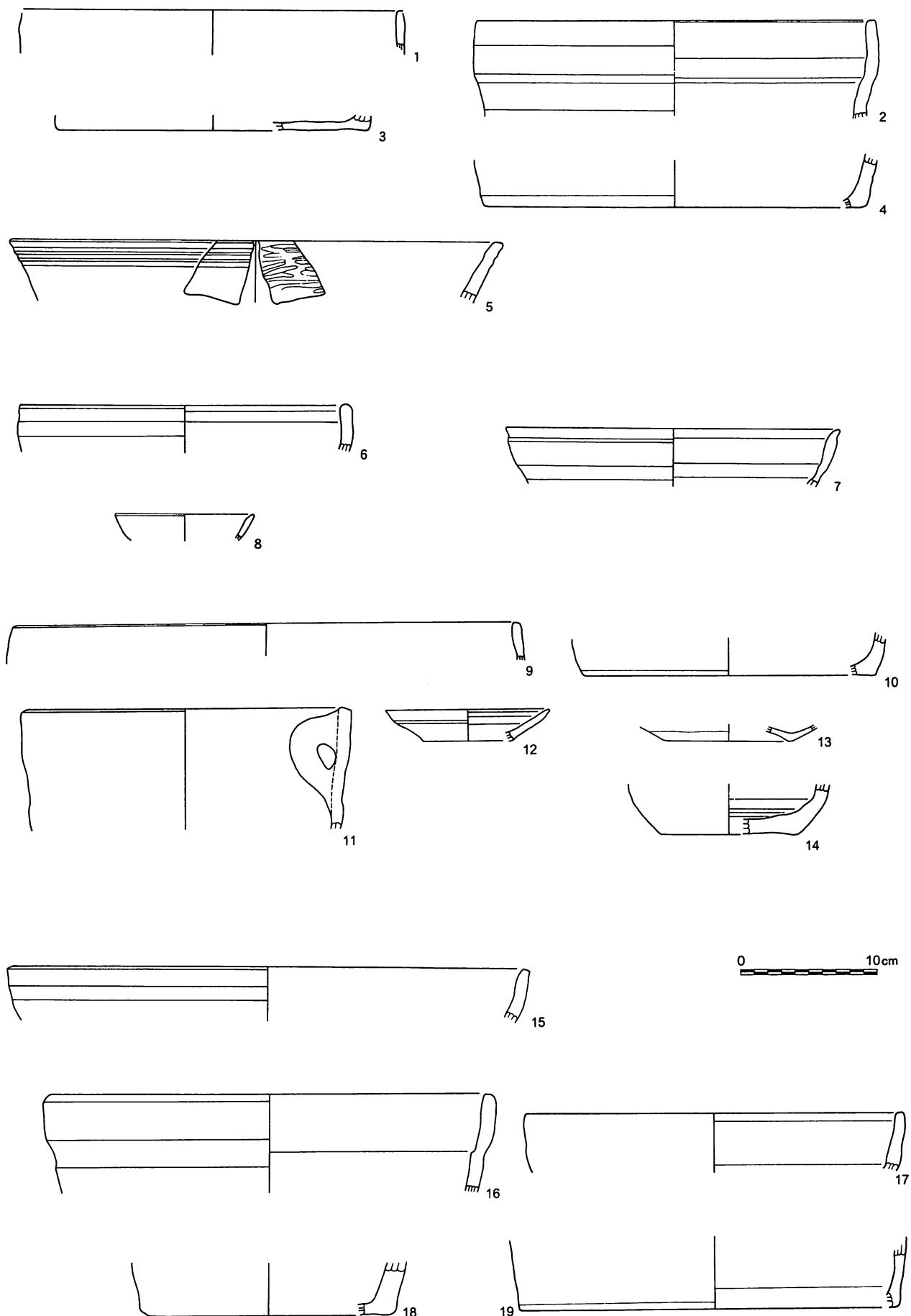
出土遺物（1）

図版第三九



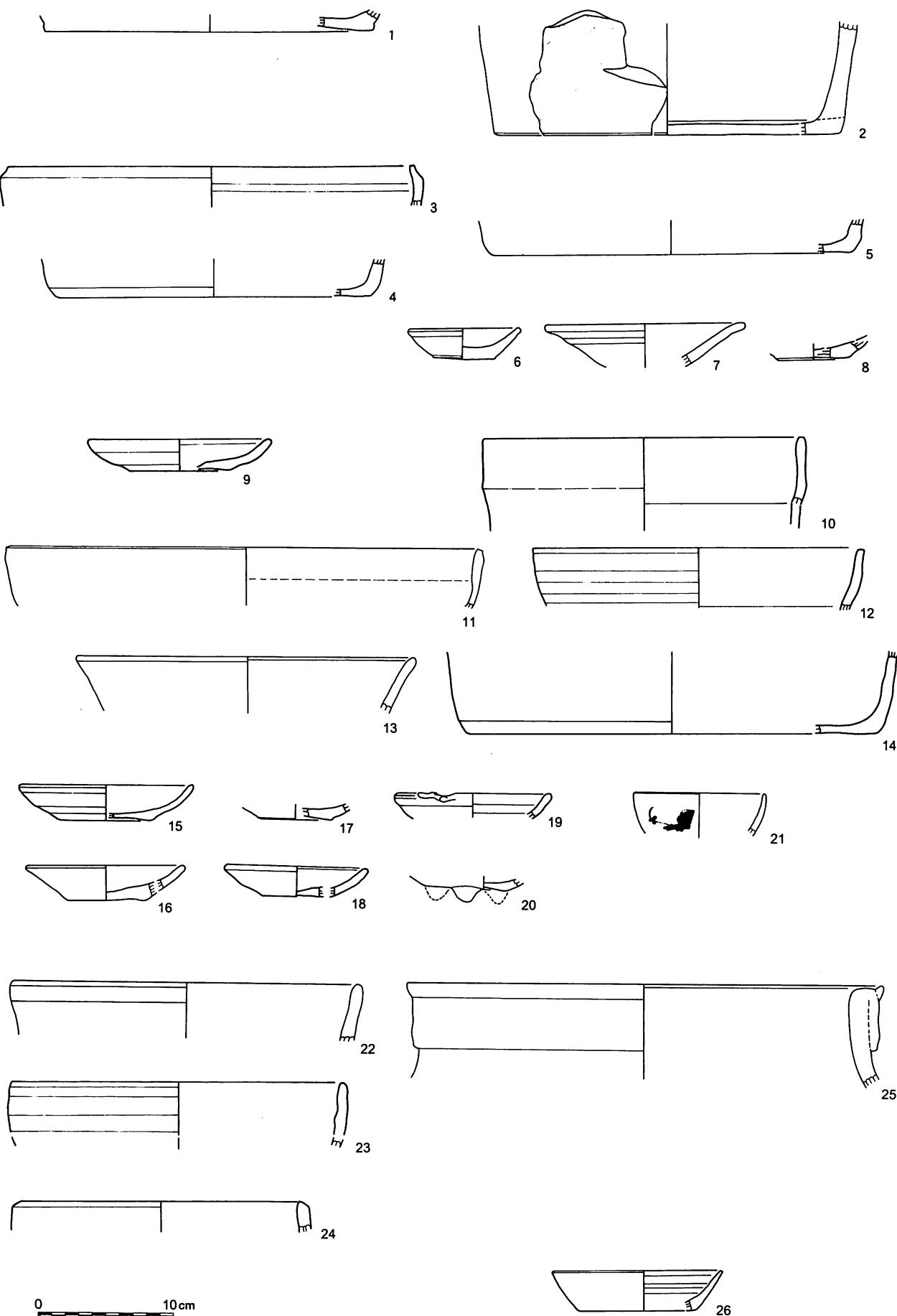
出土遺物 (2)

図版第四〇

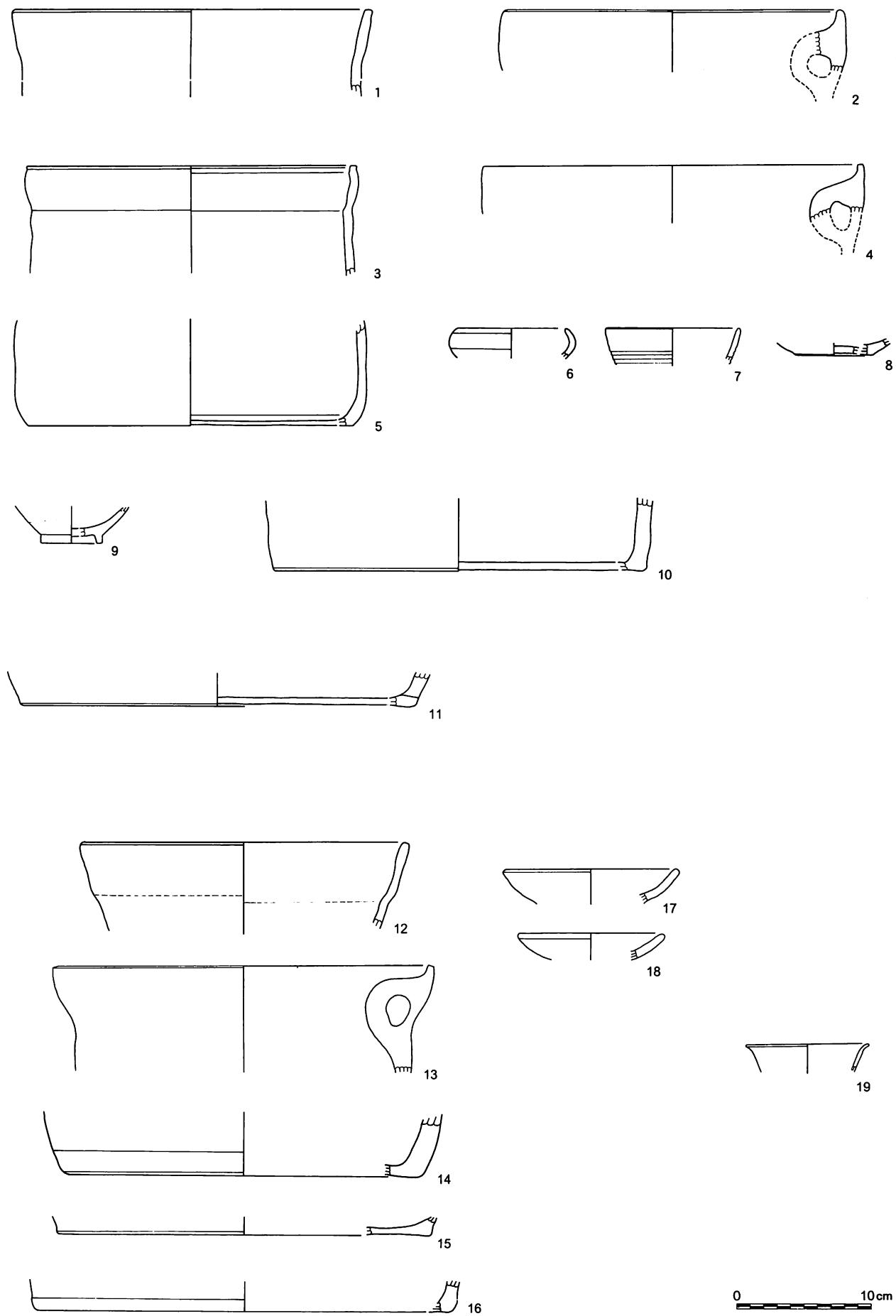


出土遺物 (3)

図版第四
一

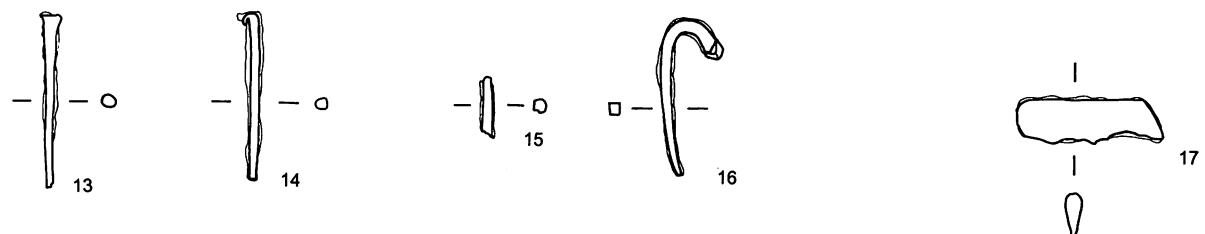
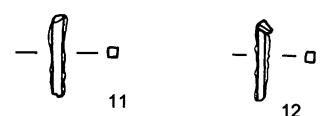
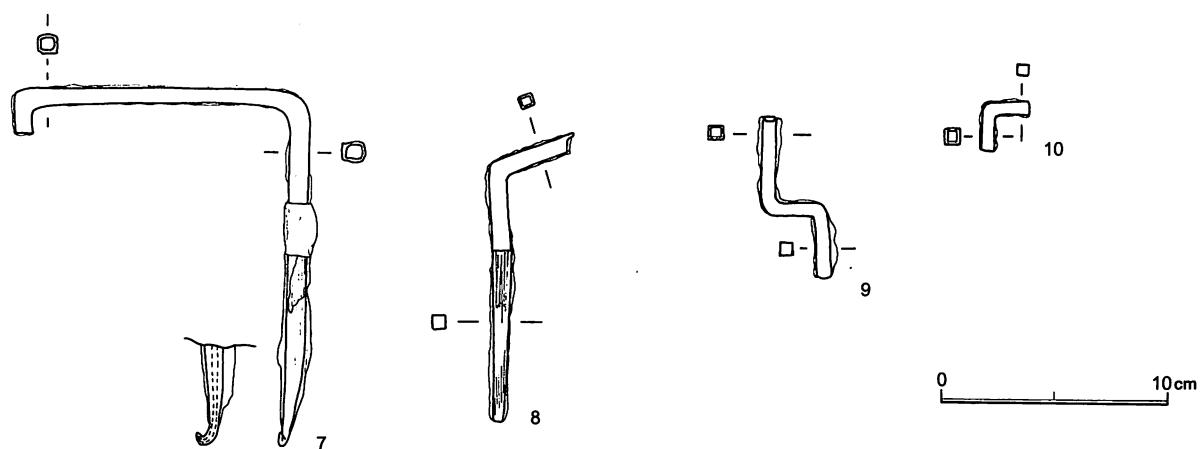
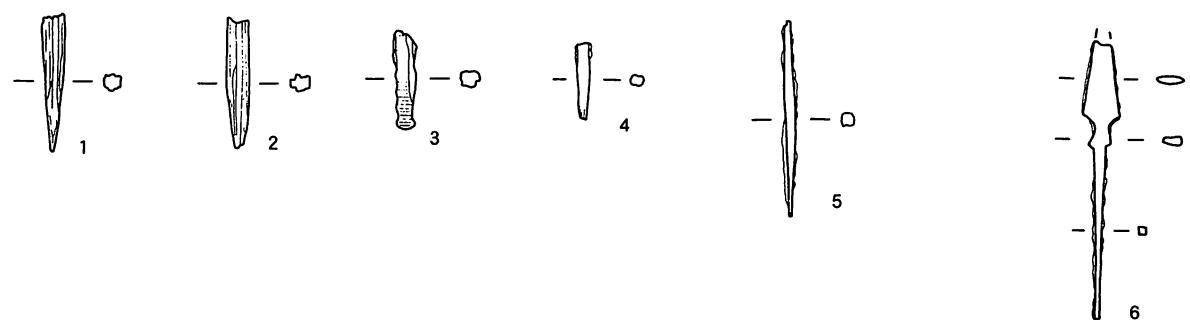


出土遺物 (4)

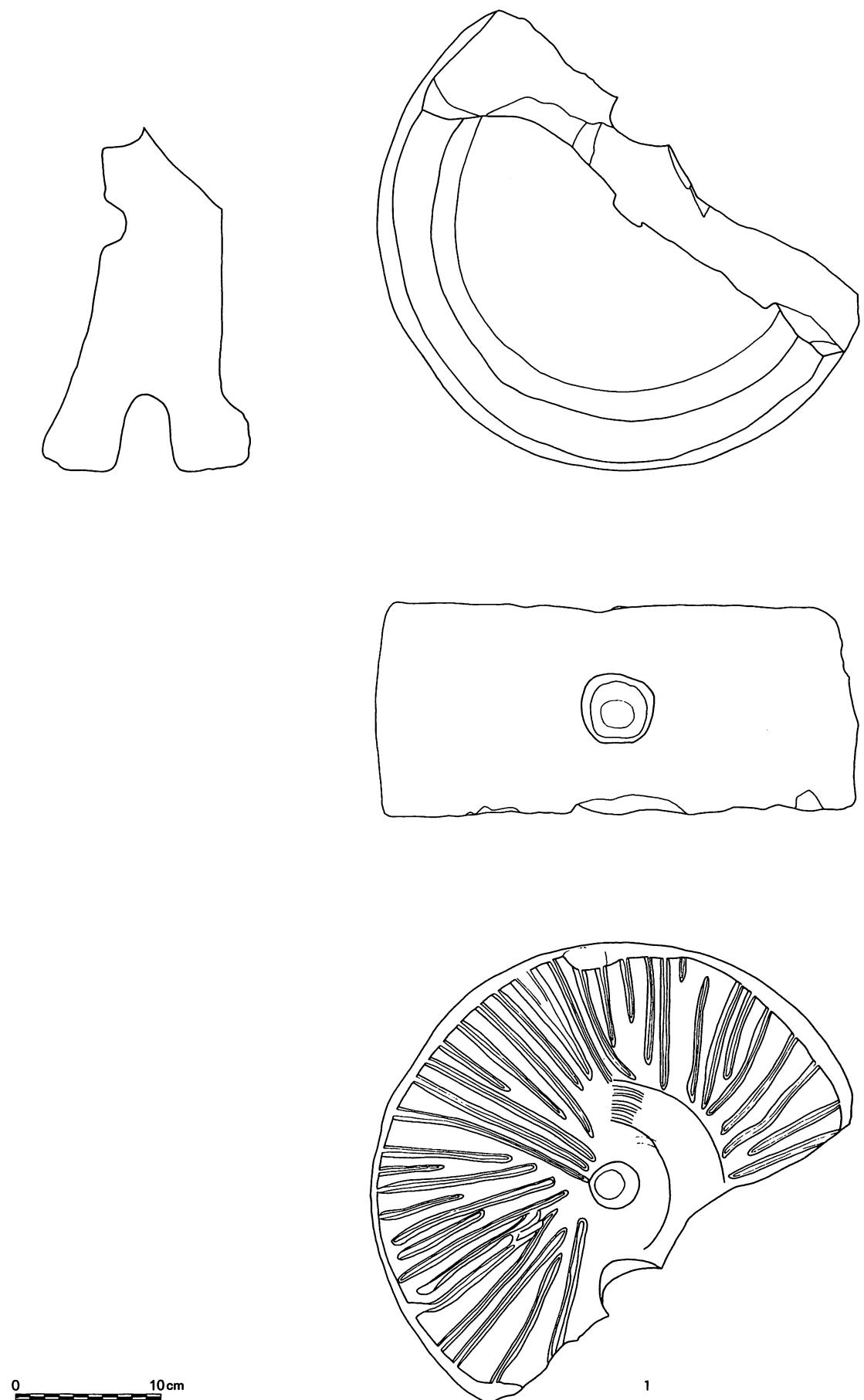


出土遺物 (5)

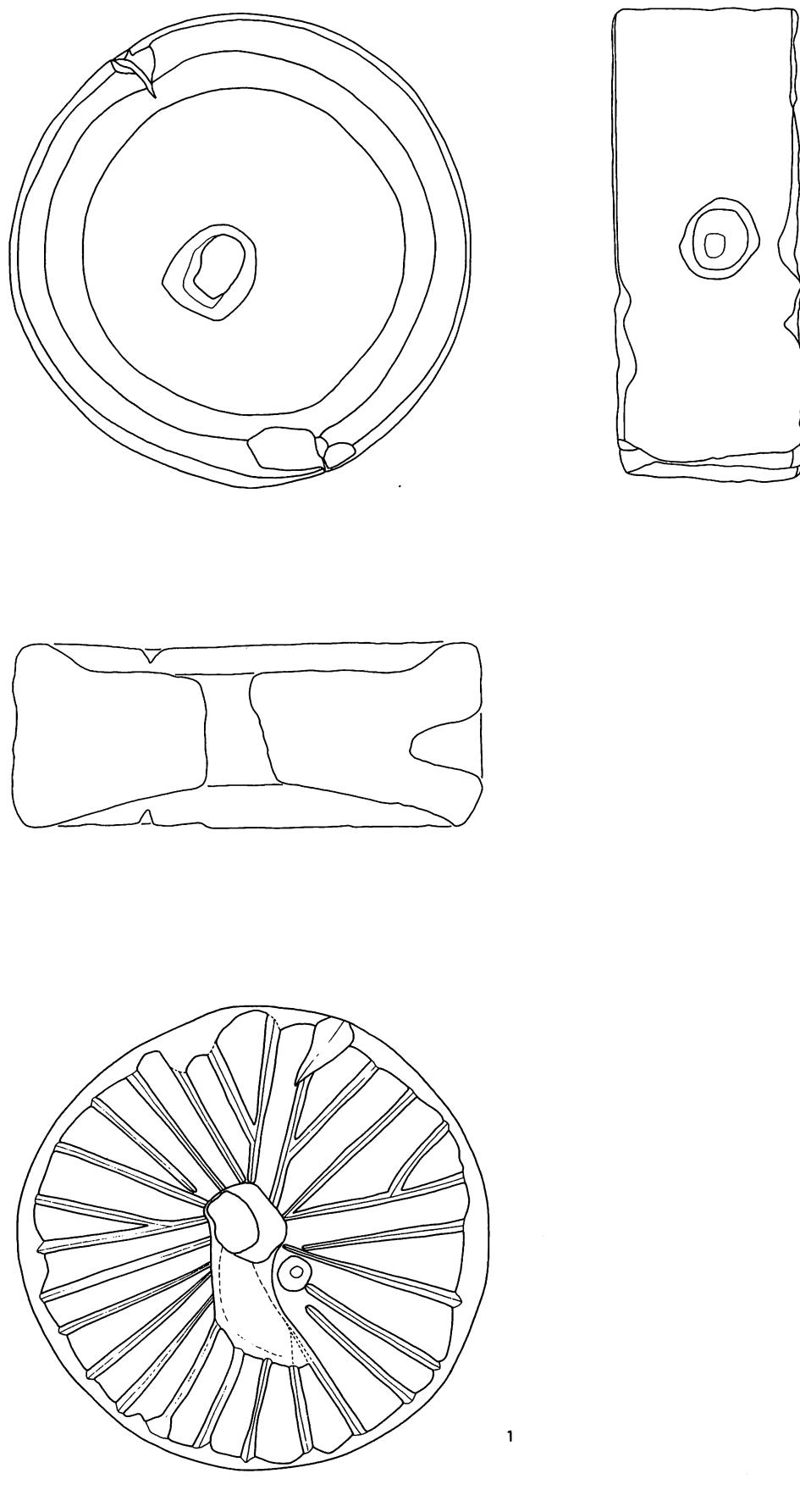
図版第四三



出土遺物 (6)

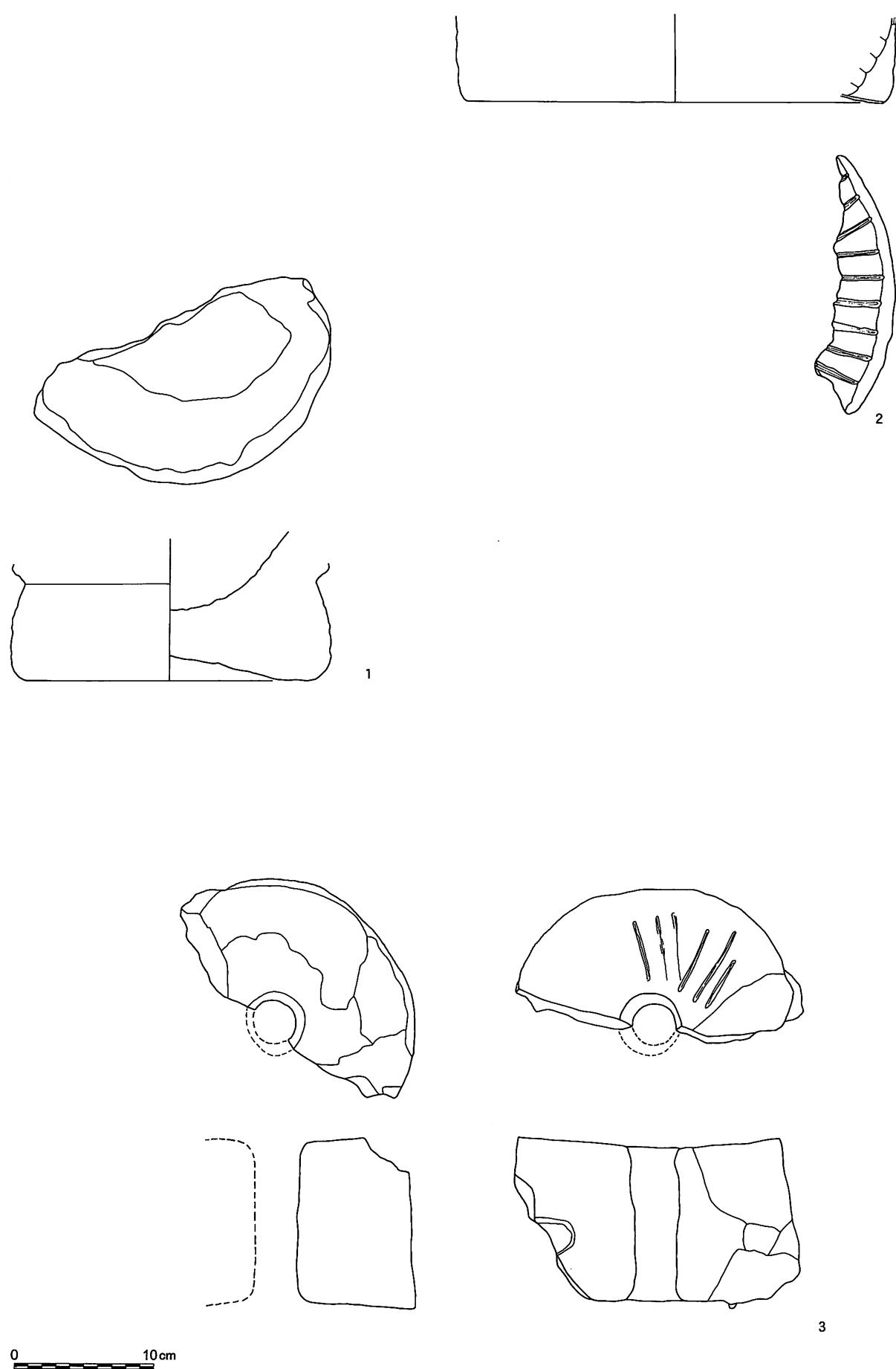


出土遺物 (7)



出土遺物 (8)

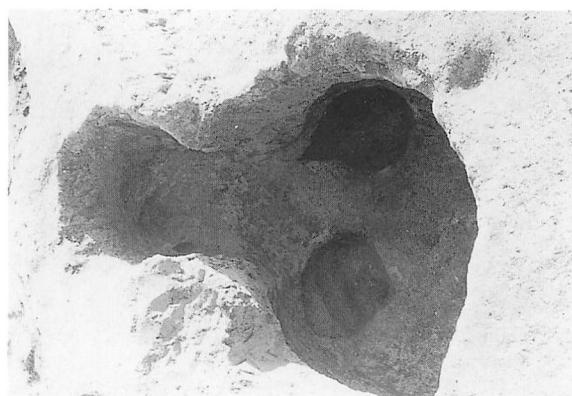
図版第四六



出土遺物 (9)



1号地下式土壤



2号地下式土壤



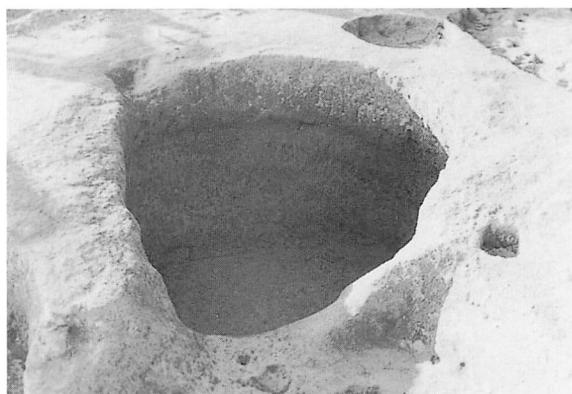
43号地下式土壤



43号地下式土壤壁掘削狀況



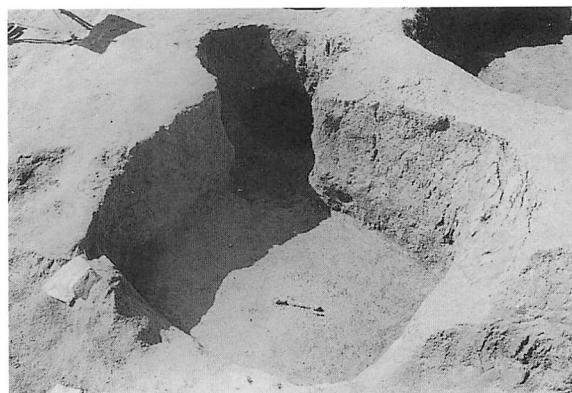
3号地下式土壤



4号地下式土壤

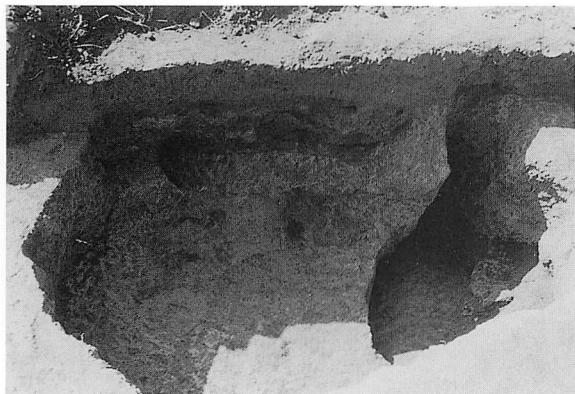


3·4号竪穴状建物（旧5·6号地下式土壤）

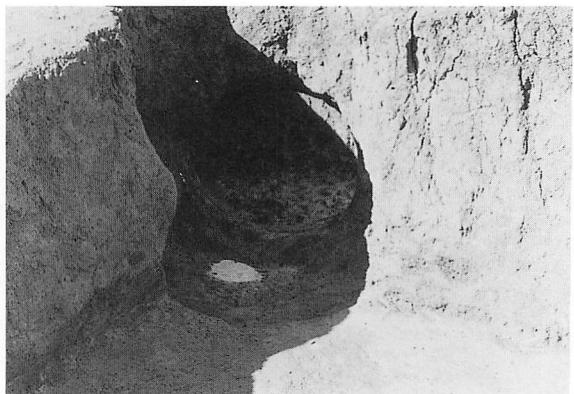


7号地下式土壤

遺構（1）



8・10号地下式土壙



7号地下式土壙から10号地下式土壙を望む



10号地下式土壙



11号地下式土壙



11号地下式土壙内耳土器ほか出土状況



12号地下式土壙



16号地下式土壙



17号地下式土壙

遺構（2）

図版第四九



17号地下式土壙入口部施設



18号土壙



21号土壙



22号土壙摺鉢出土狀況



25号土壙



1号豎穴状建物



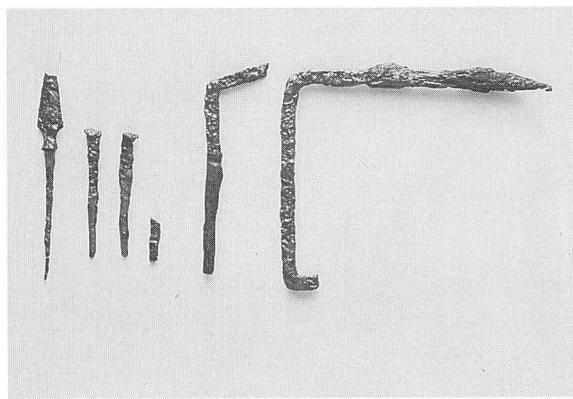
1号建物状遺構東壁回り石積



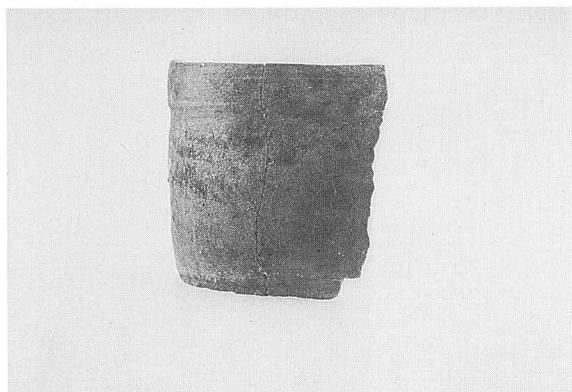
1・2号溝



1号地下式土壤及び桑植樹痕



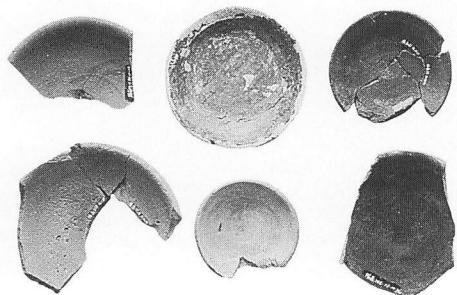
鉄製品



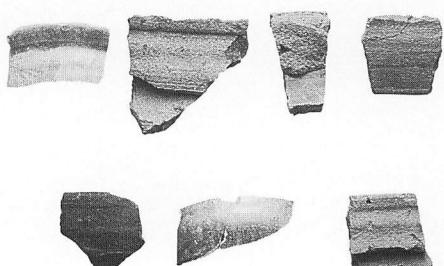
内耳土器（外面）



内耳土器（内面）



かわらけ



陶器類



古銭及び根付け

遺構（4）及び出土遺物

報告書概要

フリガナ	ヨコモリ・ヨコモリマエイセキ	
書名	横森・横森前遺跡	
副題	国道141号（箕輪バイパス）建設に伴う発掘調査報告書	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第164集	
著者名	坂本美夫	
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話番号	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 055-266-3016	
印刷所	有限会社 新星堂印刷	
印刷日・発行日	1999年3月24日・1999年3月31日	
ヨコモリ 横森・横森前遺跡	所在地	山梨県北巨摩郡高根町箕輪字横森前636他
	25,000分の1の地図名・位置	若神子 北緯35°41'27" 東経138°42'32" 標高715m
概要	主な時代	中近世
	主な遺構	中近世の地下式土壙22基、土壙38基、建物跡5基、溝5本
	主な遺物	内耳土器、かわらけ、陶器、錢、鉄鏃
	特殊遺構	
	特殊遺物	
調査期間	1996年9月24日～1996年12月9日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第164集

横森・横森前遺跡

印 刷	平成11年3月24日
發 行	平成11年3月31日
編 集	山梨県埋蔵文化財センター
發 行	山梨県教育委員会
	山梨県土木部
印 刷	有限会社 新星堂印刷

